

《翻 訳》

ジョアン・ドス・サントス『エティオピア・オリエンタール』(1609年,  
エヴォラ刊)を初版本テキストから訳注する試み  
——トロント大学トーマス・フィッシャー・レア・ブック・ライブラリー所蔵本に  
もとづく再検討(承前)——

Uma nova tentativa da tradução integral japonesa baseada na  
editio princeps da obra *Ethiopia Oriental* (Évora, 1609), da autoria  
do frei dominicano João dos Santos, reservada na Thomas Fisher  
Rare Book Library, University of Toronto.

日埜 博司 (HINO Hiroshi)

ポルトガル人ドミニコ会士ジョアン・ドス・サントス(Frei João dos Santos, O.P.)が執筆し1609年にエ  
ヴォラで刊行された『エティオピア・オリエンタール』(*Ethiopia Oriental*)という大著がある。サント  
スは16世紀末から17世紀初めにかけて永年にわたり、東アフリカの各地と、ゴアを中心とする  
エスタード・ダ・インディア(東洋におけるポルトガル勢力圏)でカトリックの布教に従事した。

リスボアにあるポルトガル国立図書館(Biblioteca Nacional de Portugal. 以下BNPと呼ぶ)では、所蔵  
する古文書のデジタル化が早くから進められている。ポルトガルが誇る大航海時代関連の貴  
重な典籍もむろんその例外ではなく、それらの大半はBNPのデジタルアーカイブスで閲覧  
することが可能である。

ジョアン・ドス・サントス『エティオピア・オリエンタール』第一部は、16世紀末東アフリカの諸  
地域を包括的に扱うエスノロジーでありエスノグラフィーである。それぞれ民族誌および民俗  
誌と訳すのであろうが、サントスの論ずるテーマは、歴史、人文、地理、風俗、習慣、民俗、自  
然、動物、植物、鉱物、宗教、迷信、等々、はなはだ広範であり、現地を見聞したサントスなら  
ではの知見やエピソードも随所にちりばめられ、まことに優れた博物誌の相貌というか特色を  
帯びる著述、と評することができる。別の地域を布教したドミニコ会同僚の著述——たとえば  
16世紀半ばの明帝国に到達し、短期間ながら華南の広州でカトリック布教を行なうという稀有  
な経験を積んだガスパール・ダ・クルスのシナ総論というべき『中国誌』——から幾つかのくだ  
りが引用され、種々の「異なるもの」を比較文化論の手法で考察しようとする視点がときおり  
持ち込まれていることも、訳者の興味をそそる。

浩瀚な原著であるが、訳者はまず16世紀末東アフリカのもろもろの地方の事物を扱う  
PRIMEIRA PARTE(第一部)の完訳をめざす。

この『エチオピア・オリエンタール』初版本であるが、不可解なことに BNP は所蔵しておらず、ゆえにデジタルアーカイブスで閲覧することもできない。やむなく訳者は下記の校訂本に頼ってその読み込みを進めてきた。

Fr. João dos Santos, *Etiópia Oriental e Vária História de Cousas Notáveis do Oriente*, Introdução de Manuel Lobato, Notas de Manuel Lobato & Eduardo Medeiros, Fixação do texto por Maria do Carmo Guerreiro Vieira (coord.), Célia Nunes Carvalho & Maria Amélia Rodrigues Coelho, Lisboa, Comissão Nacional para as Comemorações dos Descobrimientos Portugueses, 1999, 759 ps. (CNCDP 版と呼ぶ)

この校訂本は有益かつ詳細な解説に加え、テキスト全篇にわたり重厚な脚注が施され、和訳を進めるに際し、十全の信頼を託すに値するもの、と評してよい。ただ語彙に関しては、サントスの 16 世紀風の綴りを全面的に維持しているわけではなく、文法についても、ときにはその概念の史の変遷を尊重した結果であろう、原著で直説法(叙実法)の用いられている箇所が現代ポルトガル語の考え方に即して接続法(叙想法)へ改変されていたりもする。

訳者は『エチオピア・オリエンタール』のおもしろく価値ある内容に魅了されてよりこの<sup>かた</sup>方、その初版本にアクセスしたいと思いつつ、ポルトガル国内でそれが叶わぬもどかしさを募らせてきたのだが、数ヵ月前、カナダはオンタリオ州の名門トロント大学(University of Toronto)のトーマス・フィッシャー・レア・ブック・ライブラリー(The Thomas Fisher Rare Book Library)に、『エチオピア・オリエンタール』1609 年刊初版本(*editio princeps*)が所蔵され、しかもそれがトロント大学のスポンサーシップによって全巻デジタル化されているとの情報に接した。

ジョアン・ドス・サントス『エチオピア・オリエンタル』（1609年、エヴォラ刊）を初版本テキストから訳注する試み



トロント大学トーマス・フィッシャー・レア・ブック・ライブラリー蔵『エチオピア・オリエンタル』初版本  
(editio princeps)扉。扉の文言を和訳ともども下に示す

ETHIOPIA ORIENTAL,  
E VARIA HISTORIA DE COVSAS  
notaucis do Oriente.  
COMPOSTA POLLO PADRE FR. IOAÕ  
dos Santos da Ordem dos Pregadores,  
natural da Cidade de Euora.  
DIRIGIDA AO EXCELLENTISSIMO SENHOR  
Dom Duarte Marques de Frechilla & Malagon, &c.  
Impressa no Conuento de S. Domingos de Euora.  
Com licença do S. Officio & Ordinario  
& Priuilegio Real. Anno 1609.  
POR MANOEL DE LIRA IMPRESSOR.

エティオピア・オリエンタールおよび東方の注目すべき事物に関する種々の物語。説教者の修道会〔ドミニコ会〕に属しエーヴォラに生まれたるパードレ・フレイ・ジョアン・ドス・サントス、これを編纂す。この物語をいとも高邁なる君にして、フレチーリャおよびマラゴーン等の侯爵ドン・ドゥアルテへ献呈す。エーヴォラの聖ドミンゴス修道院において印刷。宗教裁判所および上長の允許<sup>いんきよ</sup>、さらに王室より賜わりたる特権をもって。1609年。

印刷者マノエル・デ・リラによりて

トーマス・フィッシャー・レア・ブック・ライブラリーは、ポルトガル語で印刷され上梓された貴重書を921点含む。特筆すべきことに、その冊数は、英語、イタリア語、フランス語文献のそれに次ぎ、イスパニア語のそれを遙かに凌ぐ。ライブラリーに含まれる当該典籍のタイトルをざっと一覽したところ、トーマス・フィッシャーは、特に大航海時代に上梓されたポルトガル語文献に焦点を絞った古書蒐集を行なったわけではないようであった。訳者は寡聞にしてこの人物についても、彼のコレクションがトロント大学へ寄贈された経緯についても、承知しない。

トロント大学の見識<sup>まんこう</sup>に満腔の敬意を表しつつ、『エティオピア・オリエンタール』1609年刊初版本の影印を訳出箇所に限って掲げるとともに、そのテキストを改めて仔細に読み込み、第一部第五巻のメリンデ関連の教章を新たに和訳して、訳者なりの注釈を施してみる。和訳の直後には CNCDP 版のテキストも掲げる。

第五巻冒頭のタイトルを初版本の体裁のまま写し、それを和訳すれば下記のとおり。

LIVRO QVIN-  
TO, DA ETHIOPIA ORIEN

TAL, EM QVE SE DA RELAÇAM DA COS  
ta de Melinde, & suas ilhas: e de toda a mais costa, até  
mar Roxo: & dos costumes dos habitadores destas  
terras: & de algũas cousas notauéis, que  
nellas acontecerão em  
nossos tempos.

『エチオピア・オリエンタール』（第一部）第五巻。ここでは、メルンデ〔マリンデ〕海岸とその〔沖合の〕島々、およびマール・ロシヨ〔紅海〕へ到るまでのそのほかの海岸について、さらには、上記もろもろの土地の住民の風俗習慣が記述されるとともに、我ら〔が滞在した〕時代に同地で生じた幾つかの注目すべき事どもが報告される

この巻でサントスが中心的に扱うメルンデや、それとライヴァル関係にあったモンバーサは、いずれも現在、ケニア南東部に位置する港町。ヴァスコ・ダ・ガマが来航した当時、メルンデやモンバーサやキルワなど主要な都市国家間の関係は良好ではなく、ポルトガルは都市国家間の足並みの乱れや、現地カフル人同士の対立や反目を、みずからの勢力拡大のため巧みに利用した。

東アフリカ海浜部には、ポルトガル人の来航よりずっと以前から、ペルシア（シーラーズ）系やアラビア（イエメン）系など有力なイスラム商人が強固な地歩を築いていた。サントスは、マファメーデの後継者のことや、教義の齟齬に由来して生じたサファヴィー朝（シーア派）とオスマン帝国（スンニ派）の抗争などの記述に、第五巻劈頭の一章を割いている。

大航海時代のイベリア両国（ポルトガルとスペイン）は、アフリカやアジアやアメリカの新天地で、征服・航海・植民・貿易といった世俗的事業を推し進める一方、カトリック教会はその住民を改宗させるという使命を帯びた。このように本来まったく異質な、教・俗ふたつの事業が、イベリア両国の〈国家事業〉として進められ、しかもそれはローマ教皇の精神的権威によって正当化されお墨付きを与えられた。

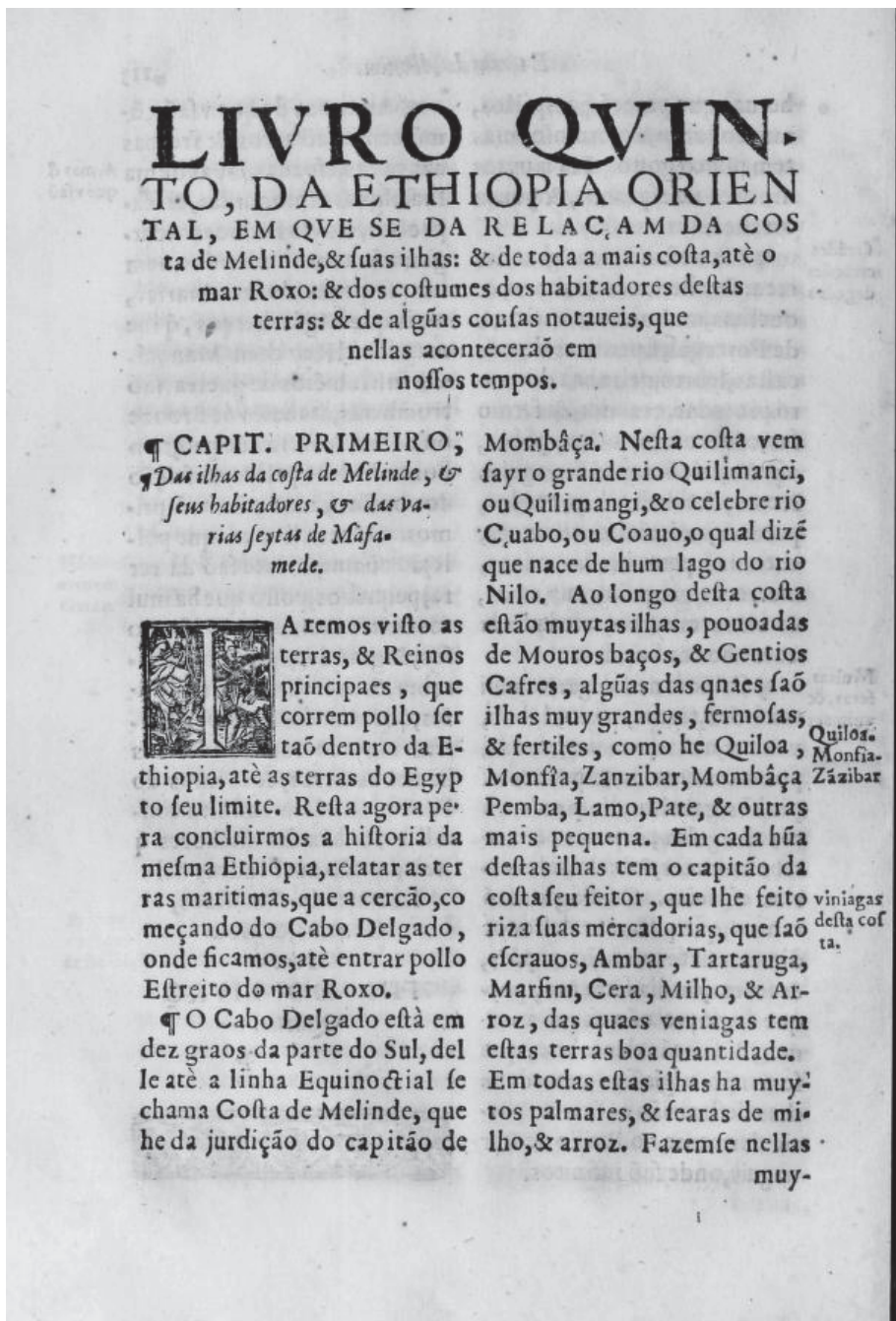
『エチオピア・オリエンタール』には、ポルトガルに敵対した誰それ（ムスリムであることが多い）の討伐が行なわれ、誰それには、その振舞いこふさわしい「懲罰」が下された、などの言いまわしがときどき見える。「懲罰」とは不穏な言いようだが、上述のような歴史的文脈に照らせばその意味が少し理解できるであろう。サントスも、上記〈国家事業〉の枠に組み込まれて行動する人であった。彼はしかし、植民地に暮らす有象無象の個々の俗人がやらかす、カトリック倫理の対極にあるような、破廉恥な振舞いには眉を顰める。サントスが、辛辣な言葉を浴びせる対象は、こんな連中である。

一、エンポーフィアと呼ばれる無理難題を、ムスリムのしがない男女に仕掛けては、金品(特に食糧)をむしり取るゴロツキのポルトガル人。二、ポルトガル王の御用だと、威圧的な言辞を振りかざして、ムスリムの持ち船を勝手にわがものとする<sup>フェイトール</sup>商務官。ただ、船の持ち主は、まずいことに、名だたる妖術師であった。船は、妖術師の呪文によって、順風を<sup>はら</sup>孕みつつも、港外へ出てゆくこと<sup>あた</sup>能わず、商務官のもくろみは失敗、結局、妖術師への謝罪に追い込まれる。三、あるポルトガル人兵士から侮辱を受けた前記の妖術師。彼はその兵士へ、しゃれた仕返しを考える。言葉を発しようとする、必ず腹中から鶏の鳴き声が洩れ出す、というわざをポルトガル人兵士へ仕掛けたのだ。謝る気を起こすまで、兵士は笑いものにされ続けた……。

初版本は「序」「献辞」「印刷允可状」など冒頭のごく一部を除き、全ページ左右二段組みで印刷され、ところどころに内容を示す簡潔な傍注が見える。傍注のないページもある。ページのノンブルはアラビア数字で片面に印刷されているだけであり、印刷されているほうにはたとえば p.22 と、ノンブルが印刷されていないその裏面については p.22v と、それぞれ記す。

傍注の原文および和訳を影印の下に記し、それらを和訳中に小見出しとして適宜組み込む。初版本の綴りを忠実に写すので、現代ポルトガル語の綴りとは異なる場合がある。段落についても、ほぼ忠実に初版本に従うが、近接した箇所<sup>に</sup>傍注が附されていて、それぞれがある程度独立した内容を有すると思われる場合、原文でも和訳でも、内容の変わり目で改行を施した。

初版本の paragraph 冒頭には必ず ¶ が附され、校訂本もその段落分けを忠実に守っている。(ただし章の書き出しに見える語彙について、初版本では ¶ を附すかわり、語彙の一字目を大きな飾り文字にしてある。) CNCDP 版には ¶ は省かれているが、拙訳では校訂本テキストの paragraph 冒頭に、私意をもって ¶ を附す。上述の理由で訳者が改行を施したときは、CNCDP 版テキストにも和訳にも、 paragraph 冒頭に ¶ は附さない。(初版本や校訂本テキストで附した ¶ は、拙訳では○としておく。)



p.113v. 右段。Quiloa, Monfia, Zāzibar. [キーロア, モンフィア, ザンジバル]/Viniagas desta costa. [当(メリンデ)海岸のもろもろの商品]

Pannos  
de Pate.

muytas embarcações, muyto cayro, esteiras, & palhetes de palha fina, muytos & bõs pannos de seda, & algodão, & particularmente na ilha de Pate, onde ha grandes rezelões, & por esse respeito são muy nomeados os pannos de Pate, de que se vestem os Mouros fidalgos, & Reys desta costa, & também as molheres de algũs Portugueses.

Origem  
dos mouros  
de Ethiopia.

¶ Cadahũa destas ilhas tem seu Rey Mouro, os quaes todos são vassallos del Rey de Portugal, & todos lhe pagão tributo em reconhecimento de vassallagem, o qual arrecada o capitão da costa em cada hum anno. Todos estes Mouros foram antigamete estrangeiros nesta costa, como hoje nella são os Portugueses, porque são Arabes de nação, & sayraõ da Prouincia de Arabia Felix, da cidade de Larach, & vierão pouar estas ilhas, & algũas terras da fralda do mar desta Ethiopia, onde fundaraõ grãdes & populosas cidades, & pouações que hoje tem, & nellas viuem ha muitos annos já como naturaes da terra, & quasi semelhantes aos mesmos Ethiopes, assi na cor do rosto, como em costumes. Todos estes A-

rabes seguem a seyta dos Persas, que he a interpretação q̄ Ale fez sobre a ley de Mafamede, no que vão muy desuiados da seyta dos Turcos, os quaes seguem a Omar interprete de contraria opinião: pol la qual rezão tê hũs aos outros em conta de herejes na obseruancia da mesma seyta de Mafamede; & essa he hũa das causas, porque o Xá Hmael Sophi Grã Sultão de Persia he inimicissimo do Grã Turco, & traz sempre guerra com elle sobre a pretensão do summo Pontificado da seyta de Mafamede, allegando que lhe conuem legitimamete, por quanto segue a mais certa interpretação da ley que Ale fez, & o Turco lhe tem vsurpado o mesmo Pontificado, sendo hereje, & seguidor d'outra falsa interpretação.

Causa  
das guerras  
do Persa cõ  
o Turco

¶ E pera que esta differença de seytas melhor se entenda, he de saber, que depois da morte de Mafamede ouue algũas duuidas entre seus descendentes, sobre o entendimento da seyta que tinha deixado, pol la qual rezão quatro parentes seus mais chegados, & que mais o comunicauão, querdo cadahũ mostrar-se mais douto

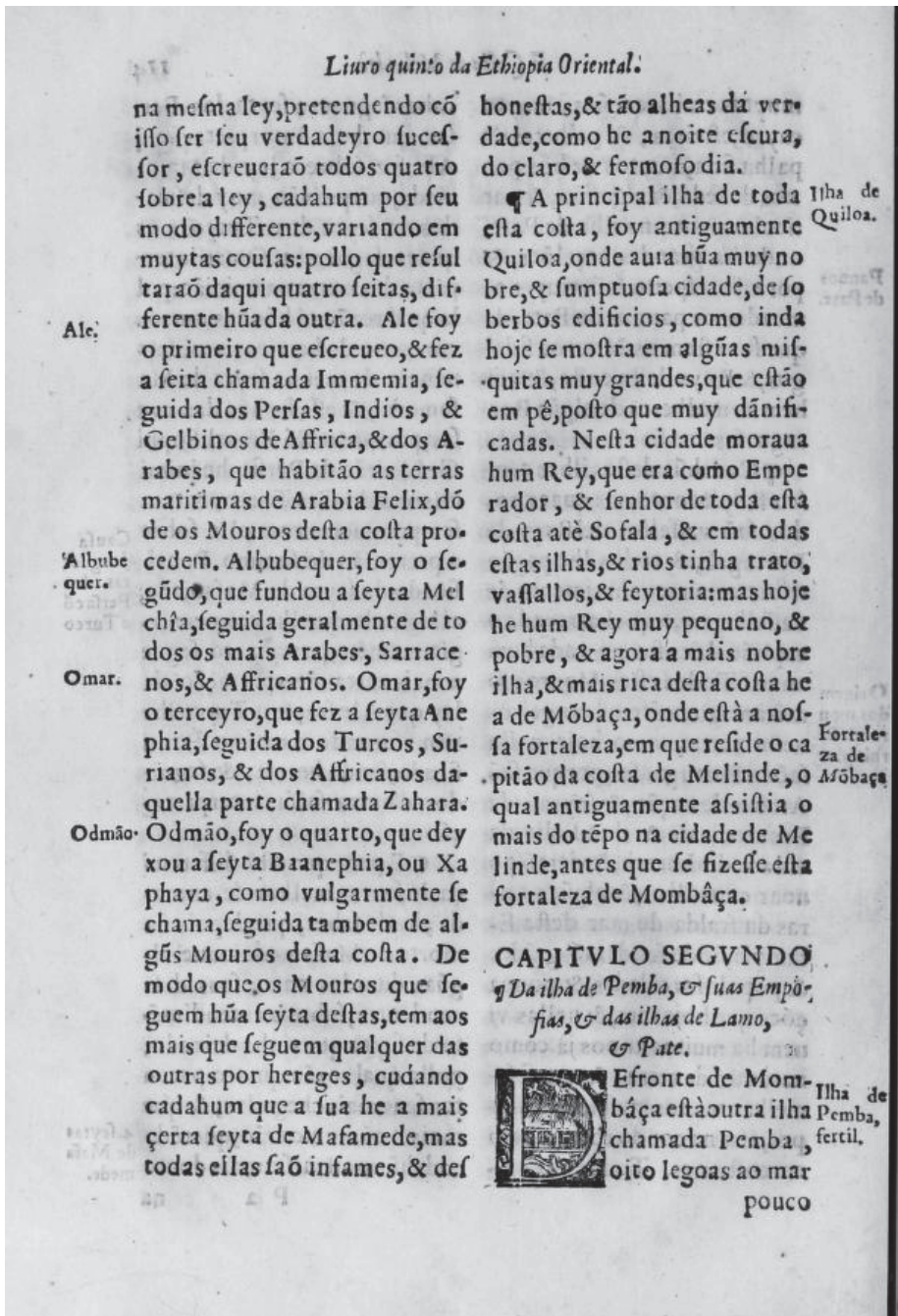
4. seytas  
de Mafamede.

P 2 na

p.114. 左段. Pannos de Pate.〔ハテの反物〕/Origem dos mouros de Ethiopia.〔エティオピアのムスリムの起源〕

右段. Causa das guerras do Persa cõ o Turco.〔ペルシアとトルコがたび重なるいくさを行なうわけ〕/4. seytas de Mafamede.〔マファメーデ(ムハンマド)から生じた四宗(学)派〕





p.114v. 左段。Ale.[アーレ(アリー)]/Albubequer.[アルブベケール(アブー=バクル)]/Omar.[オマール(ウマル)]/Odmão.[オドマン(ウスマーン)]

右段。Ilha de Quiloa.[キーロア(キルワ)島]/Fortaleza de Mõbaça.[モンバーサの要塞]/Ilha de Pemba, fértil.[豊沃なるペンバ島]

## CAPÍTULO I (Primeira Parte, Livro Quinto)

### Das ilhas da costa de Melinde, e seus habitantes, e das várias seitas de Mafamede.

第1章(第一部第五卷) メリンデの沿岸のもろもろの島, およびその住民について。  
マファメーデ[ムハンマド]のさまざまな宗派について

○我らはこれまで, エチオピアの内奥部に広がるもろもろの土地と主要な国々から, その最果てであるエジプトのもろもろの土地に至るまでを見てきた。同エチオピアの話を締めるため残されているのは, エチオピアを取り囲む海浜のもろもろの土地を語ることだけである。その叙述は, 我らが今いるところのカーボ・デルガード<sup>1</sup>をもって始まり, やがてマール・ロシヨ[紅海]の海峡へと及んでゆくであろう。

¶ Já temos visto as terras, e reinos principais que correm polo sertão dentro da Etiópia, até as terras do Egipto seu limite. Resta agora pera concluirmos a história da mesma Etiópia, relatar as terras marítimas, que a cercam, começando do Cabo Delgado, onde ficamos, até entrar polo Estreito do Mar Roxo.

### キーロア[キルフ], モンフィーア, ザンジバル/当[メリンデ]海岸のもろもろの商品/パテの織物

○カーボ・デルガードは南の側[南緯]10度に位置する。カーボ・デルガードから赤道(a linha Equinocial)に到るまでを, メリンデ<sup>2</sup>の海岸と呼び, モンバーサのカピタンの管轄下にある。この

---

<sup>1</sup> 原綴り Cabo Delgado. 直訳して「薄っぺらの岬」。16世紀後半に活躍したフェルナン・ヴァス・ドウラードの地図には Mosâbique と MELIMDE の境界付近, 海浜の, やや土地が海へ突き出したあたりに C. delgado の文字が二度記されるのが見える。Cf. Fernão Vaz Dourado. *Atlas. Reprodução do códice iluminado 171 da Biblioteca Nacional*, preparação e nota introdutória por Luís de Albuquerque; leitura e ordenação de topónimos por Maria Armada Ramos Tavares & Maria Catarina Madeira Santos, Lisboa, Comissão Nacional para as Comemorações dos Descobrimientos Portugueses & Finantia, 1991. 現在モザンビーク共和国の最も北東部に位置するのが Província do Cabo Delgado(カーボ・デルガード州)である。

<sup>2</sup> 原綴り Melinde. 現在, ケニア共和国南東部に位置する港市。英語読みでマリンディ。モンバサやキルフと並び, ムスリム商人によるインド洋貿易の拠点のひとつとして栄える。15世紀前半, 鄭和に率いられた明朝艦隊は, 都合7回, インド洋に來航するが, 1413年の第3回, 1417年の第4回, 1421年の第5回航海では, 分遣隊が東アフリカにまでやってきた。明朝艦隊が訪れた東アフリカ沿岸の港町として, 漢文史料にその名が見える木骨都東や麻林はそれぞれ, モガディシオとマリンディに比定されている(宮本正興/松田素二編『新書アフリカ史 改訂新版』講談社現代新書, 2018年, 243~244頁。福田安志執筆の第八章「インド洋交渉史」参照)。1498年4月には, インド航路の開拓をめざす

ジョアン・ドス・サントス『エチオピア・オリエンタル』（1609年、エヴォラ刊）を初版本テキストから訳注する試み

海岸一帯で、大河キリマンシもしくはキリマンジヤ、有名なクアーボ河もしくはクアーヴォ河が海へ注ぐ。伝聞によると、この河の水源は、ニーロ(ナイル)河につながる某湖であるという。この海浜沿いには多くの島々がある。これらの島々には、浅黒い膚色のムスリムや、カフル人のゼンチョ<sup>3</sup>が住んでいる。島々の幾つかは、たいそう大きく、美しく、かつ肥沃である。たとえば、キーロア、モンフィーア、ザンジバル、モンバーサ、ペンバ、ラーモ、パテのほか、別のより小さな島々——。これらの島々の海浜には[ポルトガル人]カピタン[行政長官]がおり、その下にフェイトール[事務員]が配されている。このフェイトールがカピタンの商品を管理する。その商品とは、奴隷、竜涎香<sup>りゅうぜんこう</sup>、亀、蠟、モロコシ[ソルガム]、それに米だ。これらの土地に潤沢に存するものばかりだ。島々には、いたるところに、椰子の林、モロコシの畑、米の田んぼが、豊かに広がっている。どの島でも、舟艇や麻布、質のよい藁筵、佳良な絹・綿織物が、盛んに作られる。パテ島はことにそうであり、この島には腕のよい織物職人がいる。ゆえに、パテの織物は評判がよく、ムスリムの貴族や、当メルンデ海岸のもろもろの王が、好んでこれを身に纏うし、幾人かのポルトガル人の妻も、そのようにする。

Quiloa, Monfía, Zāzibar./ Viniagas desta costa. /Pannos de Pate.

¶ O Cabo Delgado está em dez graus da parte do sul, dele até a linha equinocial se chama costa de Melinde, que é da jurisdição do capitão de Mombaça. Nesta costa vem sair o grande rio Quilimanci, ou Quilimangi, e o celebre rio Cuabo, ou Coavo, o qual dizem que nasce de um lago do rio Nilo. Ao longo desta costa estão muitas ilhas, povoadas de mouros baços, e gentios cafres, algũas das quais são ilhas mui grandes, fermosas, e fértils, como é Quíloa, Monfía, Zanzibar, Mombaça, Pemba, Lamo, Pate, e outras mais pequenas. Em cada ãa destas ilhas tem o capitão da costa seu feitor que lhe feitoriza suas mercadorias, que são escravos, âmbar, tartaruga, marfim, cera, milho, e arroz, das quais veniagas têm estas terras boa quantidade. Em todas estas ilhas há muitos palmares, e searas de milho, e arroz. Fazem-se nelas muitas embarcações, muito cairo, esteiras, e palhetes de palha fina, muitos e bons panos de seda, e algodão, e particularmente na ilha de Pate, onde há grandes tecelões, e por esse respeito, são mui nomeados os panos de Pate, de que se

---

ヴァスコ・ダ・ガマがこの地に立ち寄り、通説によると、グジャラート出身のイブン・マージドなるキリスト教徒の水先案内人を見つける(これを否定する説もある)、という幸運に恵まれる。無事、インド西海岸のカレクレーテ(コーリコード)へ到達したのは、1498年5月20日(同上書、275～276頁。宮本正興執筆の第九章「大西洋交渉史」参照)。

<sup>3</sup> 原綴り Gentios. 異教徒。キリスト教もユダヤ教もイスラムも奉じぬ人々を、大航海時代のポルトガル人は一括してこう呼んだ。つまり仏教や神道や儒教を奉ずる人々、さらに、偶像崇拜の徒はおしなべて、「ゼンチョ」と呼ばれる人々に分類されることになる。キリシタン時代の日本人にして、キリシタンに改宗せぬ人々が一般的に、ゼンチョと呼ばれたわけは、上記の事情による。

vestem os mouros fidalgos, e reis desta costa, e também as mulheres de alguns portugueses.

### エチオピアのムスリムの起源

○これらの島々〔前パラグラフに見えるキーロア(キルワ)、モンフィーア、ザンジバル、モンバーサ、ペンバ、ラーモ、パテなどはそれぞれムスリムの王を戴いている。これらの王は皆、ポルトガル王の家来である。彼らは皆、ポルトガル王に臣下の礼をとるあかしとして貢ぎ物を差し出す。一年一度その貢ぎ物を収納するのは、メリンデ海岸を治める〔ポルトガル人〕カピタンの役目だ。これらのムスリムは皆、往時この海浜にあつてはよそ者にすぎなかった。現今、ここでポルトガル人がよそ者であるのと同じように。当地のムスリムは、出自で言えば、アラビア人であり、アラビア・フェリクスすなわち〈幸福のアラビア〉の諸地方およびラーシェの街からやってきたのだ。彼らのもくろみは、前記の島々や、当エチオピアの海辺のもろもろの土地に植民を行なうことであつた。彼らはそれらの土地に、壮大かつ人口稠密な街や居留地を建設し、それらは今も存続する。彼らについては、それらの街や居留地に暮らすこと多年にわたり、そのようすはまるで当地の原住民さながらであり、顔の色においても習俗においても、エチオピア人と類似しほぼ変わるところがない。

#### Origem dos mouros de Ethiopia.

¶ Cada ãa destas ilhas tem seu rei mouro, os quais todos são vassallos d'el Rei de Portugal, e todos lhe pagam tributo em reconhecimento de vassalagem, o qual arrecada o capitão da costa em cada um ano. Todos estes mouros foram antigamente estrangeiros nesta costa, como hoje nela são os portugueses, porque são árabes de nação, e foram da Província da Arábia Felix, da cidade de Larache, e vieram povoar estas ilhas, e algũas terras da fralda do mar desta Etiópia, onde fundaram grandes, e populosas cidades, e povoações que hoje têm, e nelas vivem há muitos anos já como naturais da terra, e quasi semelhantes aos mesmos etíopes, assim na cor do rosto como em costumes.

### ペルシアとトルコがたび重なるいくさを行なうわけ

これらアラビアに出自を有する連中は、ペルシア人の掟に随順する。この掟は、アーレ〔アリー。第四代正統カリフ。ムハンマドのいとこにして娘婿〕がマファメーデの律法についてアーレみずからの下した解釈にもとづくもの〔シーア派〕。彼らの考え方だが、トルキアー人の掟〔スンニ派〕からの乖離が少なからず進んでいる。というのは、トルキアー〔トルコ〕人はオマール〔ウマル。第二代正統カリフ〕という、〔アリーとは〕まったく異質な〔律法の〕解釈を行なう人物に随順するからだ。ゆえに彼らは、マファメーデ〔ムハンマド〕の開いた宗派を等しく遵守すべき立場に

ジョアン・ドス・サントス『エチオピア・オリエンタル』（1609年、エヴォラ刊）を初版本テキストから訳注する試み  
ありながら、相互に他方を異教徒のようだと罵り合う。ペルシアのグラン・スルタン<sup>4</sup>、シャー  
ー・イズマエール・ソフイ<sup>5</sup>が、グラン・トゥルコ<sup>6</sup>を不倶戴天の敵と見なし、[マファメーデの宗  
派の]最高主導権(Sumo Pontificado)をめぐり、絶えずいさを交えている要因のひとつこそ、  
彼らのあいだに横たわる[教理解釈上の]不一致にはかならない。シャー・イズマエールは、  
[律法の]正統的な[継承者の]名はみずからにこそふさわしい、と主張する。その拠りどころ  
として、アーレ[アリー]が行なった律法の解釈に揺るぎなく随順するのは我、つまりシャ  
ー・イズマエールであること、[グラン・]トゥルコは、[マファメーデの宗派の]最高主導権を  
めぐり、みずからを追い落とそうとしてきた張本人であるばかりか、偽りの解釈への追随者  
にすぎぬ、ということを挙げる。

#### Causa das guerras do Persa cõ o Turco.

Todos estes árabes seguem a seita dos persas, que é a interpretação que Ale fez sobre a Lei de Mafamede, no que vão mui desviados da seita dos turcos, os quais seguem a Omar intérprete de contrária opinião, pola qual rezão têm uns aos outros em conta de hereges na observância da mesma seita de Mafamede, e ela é ùa das causas, porque o Xá Ismael Sofi, Grã Sultão da Pérsia, é inimicíssimo do Grã Turco, e traz sempre guerra com ele sobre a pretensão do Sumo Pontificado da seita de Mafamede, alegando que lhe convém legitimamente, porquanto segue a mais certa interpretação da lei que Ale fez, e o Turco lhe tem usurpado o mesmo pontificado, sendo herege, e seguidor d'outra falsa interpretação.

#### マファメーデ[ムハンマド]から生じた4つの宗派[学派]

〇こうした諸宗派の違いをよりよく理解するためには、次のことを知る必要がある。マファメ  
ーデ[ムハンマド]の死後、彼の後継者たちのあいだに幾つかの分派が発生する。それはマファ

---

<sup>4</sup> 原綴り Grã Sultão. 「偉大なるスルタン」。

<sup>5</sup> 原綴り Xá Ismael Sophi. イスマーイール一世。在位 1501-1524 年。ペルシアにシーア派を広めたサファヴィー朝の創始者。

<sup>6</sup> 原綴り Grã Turco. 「偉大なるトルコ人」。サントスのいう「シャー・イズマエール・ソフイ」すなわちイスマーイール一世の在位期は、オスマン朝第八代バヤズィト二世(在位 1481-1512)、第九代セルム一世(在位 1512-1520)、そして第一〇代スレイマン一世(大帝。在位 1520-1566)と、それぞれ重なる。以上 3 名のうち「大帝」の称号を有するのはスレイマン一世だけなので、「グラン・トゥルコ」はスレイマン一世を指すか、と一見思われるが、史実に照らせば、「グラン・トゥルコ」は、これをセルム一世としておくのが、最も合理的である(高橋巖根氏の教示による)。シーア派サファヴィー朝(ペルシア)と、スンニ派オスマン朝(トルコ)との対立がたけなわを迎えるのは、セルム一世の時代であるから(1514年8月、有名なチャルディランの戦いで、セルム一世がイスマーイール一世に勝利するなど)。その跡を継いだスレイマン一世(大帝)は、外征の主たる関心をヨーロッパ方面へ向けるようになる。

メーデの遺した教えをどう理解するか、に関わることであった。すなわち、マファメーデに最も近く、しかもマフェメーデと深い交流のあった 4 人の親戚が出、彼らひとりひとりがマファメーデの掟に最も通暁していることを示そうとし、さらには、そうすることによってマファメーデの真実の後継者たろうと企てたのである。そうして彼らは、4 人とも、マファメーデの掟に関する著述をしたためた。ひとりひとり違ったやり方に拠ったから、多くの点で齟齬が生じた。4 つの宗派〔学派〕が生じそれぞれの宗派が相異なる、という結果が生じたゆえんは、そこにある。

#### 4. seytas de Mafamede.

¶ E para que esta diferença de seitas melhor se entenda, é de saber que depois da morte de Mafamede houve algũas dúvidas entre seus descendentes, sobre o entendimento da seita que tinha deixado, pola qual razão quatro parentes seus mais chegados, e que mais o comunicavam, querendo cada um mostrar-se mais douto na mesma lei, pretendendo com isso ser seu verdadeiro sucessor, escreveram todos quatro sobre a lei, cada um por seu modo diferente, variando em muitas cousas; polo que resultaram daqui quatro seitas, diferentes ùa da outra.

#### アーレ〔アリー〕 / アルブベケール〔アブー=バクル〕 / オマール〔ウマル〕 / オドマン〔ウスマーン〕

○アーレは著書を残した最初の人物であり、イ〔ム〕ミーア<sup>7</sup>と呼ばれる宗派〔すなわちシーア派〕を創始した。この宗派を信奉したのはペルシア人であり、インディオ人であり、アラビアのジェルビーノス〔原綴り *gelbinos*. この語彙未詳〕であり、アラビア・フェリクス〔幸福のアラビア〕の海浜地方——当〔メルンデ〕海岸のムスリムの起源はこの地方である——に住むアラビア人であった。アルブベケール〔アブー=バクル. 第一代正統カリフ〕は著書を残した第二の人物であり、彼がメルチーア学派<sup>8</sup>を創始した。この学派を一般的に信奉したのは、その他すべてのアラビア人、サラセン人〔原綴り *sarracenos*. 中世ヨーロッパ世界でムスリム一般を総称的に捉えた呼称〕、そしてアフリカ人である。オマール〔ウマル. 前出〕は著書を残した第三の人物であり、彼がアネフィア学派<sup>9</sup>を創始した。この学派を信奉したのはトルコ人でありスリアーノ人〔原綴り *surianos*. この語彙未詳ながら「シリア人」か〕でありザアラー〔原綴り *Zahara*. サハラ〕と呼ばれる地方に住むアフリカ人〔原語 *Africanos*.〕である。第四はオドマン〔ウスマーン. 第三代正統カリフ〕であり、バアネフィア学派——もし

<sup>7</sup> 原綴り *immemia*. シーア派の指導者の称号「イマーム」に由来する言葉であろう。高橋巖根氏の教示による。

<sup>8</sup> 原語 *a seyta Melchia*. サントスの言及する第二、第三、第四の人物はいずれも、スンニ派に関連するであろう。スンニ派には、いわゆる四大法学派と呼ばれるものがあり、メルチーア派とはマーリク学派を指すか。法学派は「宗派」ではないので、この *seyta* には「学派」という訳語を宛てるのが、より適切である。高橋巖根氏の教示による。

<sup>9</sup> 原語 *a seyta Anephia*. スンニ派の四大法学派のひとつハナフィー学派。高橋巖根氏の教示による。

くは、通俗的に呼ばれているようにシャファイア学派<sup>10</sup>——を遺した人である。この学派は当海岸のムスリムの一部によって奉ぜられる。かくして、これらの学派のうちいずれかに従うムスリムたちは、いかなる学派であれ、他の学派を信奉する連中を異端者と見なす。そうしてそれぞれ、みずからの学派こそ最も確かなマファメーデの宗派である、と信じてやまない。これらの学派はしかし、どれもこれも罰当たりで、不実極まりなく、真理からは程遠い。それは、明るく、きらびやかな昼に続く夜の、その闇がいつそう深いのだと同じだ。

Ale. /Albubequer. / Omar. /Odmão.

Ale foi o primeiro que escreveu, e fez a seita chamada imemia, seguida dos persas, índios, e gelbinos de Arábia, e dos árabes que habitam as terras marítimas de Arábia Felix, donde os mouros desta costa procedem. Albubequer foi o segundo que fundou a seita Melquia, seguida geralmente de todos os mais árabes, sarracenos e africanos. Omar foi o terceiro que fez a seita anefia, seguida dos turcos, surianos e dos africanos daquela parte chamada Zahara. Odmão foi o quarto que deixou seita banefia ou xafaia, como vulgarmente se chama, seguida também de alguns mouros desta costa. De modo que os mouros que seguem ãa seita destas, têm aos mais que seguem qualquer das outras por hereges, cudando cada ãa que a sua é a mais certa seita de Mafamede, mas todas elas são infames, e desonestos, e tão alheios da verdade, como é a noite escura do claro, e fermoso dia.

### キーロア[キルワ]島 /モンバーサの要塞

○この[メリンデ]海岸全体沿いに位置する島のうち主要なものは、キーロア[キルワ]である。そこには昔、すこぶる高貴で壮麗なひとつの街が存在した。街には堂々たる建築物が建っていたが、そのことは、非常に大きなモスクが今も幾つか遺っていることにより判明する。それらのモスクはずいぶん傷んではいるけれど、[辛うじて]建っている。この街にある王が住んでいた。この王はまるで皇帝のようであり、ソファーラに至るまでの海岸一帯のあるじさながらであった。海岸沿いの島々および河すべてにおいて、王は交易にいそしみ、臣下を持ち、商館を有していた。ところが今、王はその勢力まことに小さく、しかも貧しい。現今この海岸で、最も壮麗かつ裕福な島といえば、モンバーサ島だ。ここには我らの要<sup>フォルタレーザ</sup>塞があり、その中にメリンデ海岸を統べる[ポルトガル人]カピタン[行政長官]が駐在する。その昔、カピタンはほぼ常時、メリンデ海岸に駐在していたのだが、それはモンバーサに要塞が造られる以前のことであつ

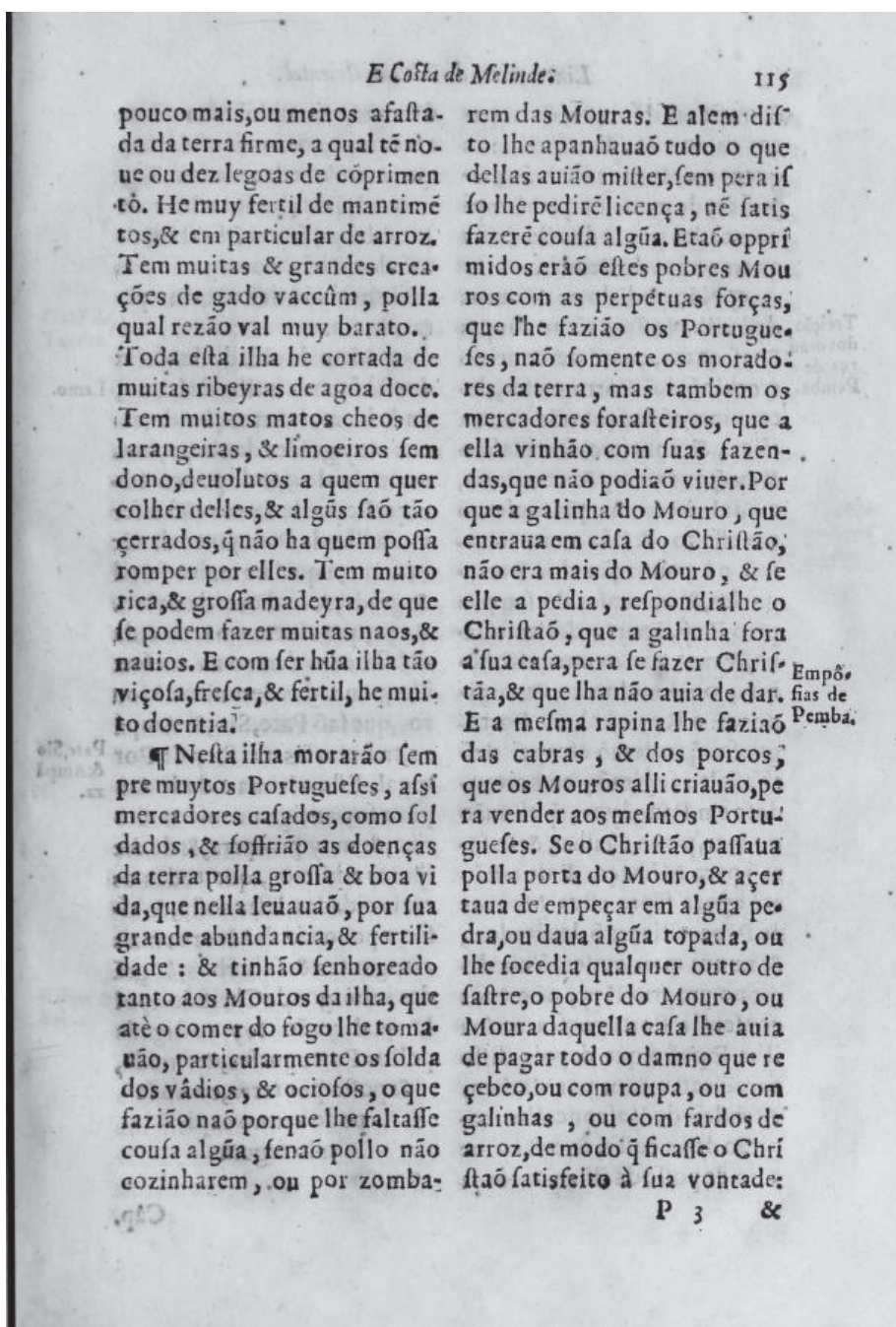
<sup>10</sup> 原文 a seyta Baanephia, ou Xaphaya, como vulgarmente se chama. スンニ派の四大法学派のひとつシャーフィイー派。高橋巖根氏の教示による。

た。

Ilha de Quíloa. /Fortaleza de Mõbaça.

¶ A principal ilha de toda esta costa foi, antigamente, Quíloa, onde havia ãa mui nobre e sumptuosa cidade, de soberbos edificios, como inda hoje se mostra em algũas misquitas mui grandes, que estão em pé, posto que muito danificadas. Nesta cidade morava um rei que era como Emperador e senhor de toda esta costa até Sofala, e em todas estas ilhas, e rios tinha trato, vassalos, e feitoria; mas hoje é um rei mui pequeno, e pobre, e agora a mais nobre ilha e mais rica desta costa é a de Mombaça, onde está a nossa fortaleza, em que reside o Capitão da costa de Melinde, o qual antigamente assistia o mais do tempo na cidade de Melinde, antes que se fizesse esta fortaleza de Mombaça.





p.115. 右段。Empôfias de Pemba.〔ベンバのエンポーフィア——ポルトガル人による嫌がらせ——〕

Liuro quinto da Ethiopia Oriental.

& outras mil forças, & trapazas como estas lhe fazião: às quaes os Mouros chamão empôfias; de maneira q̄ eraõ mui nomeadas por toda esta costa as empôfias de Pemba.

Treição dos mouros de Pemba.

¶ Não pôdêdo os Mouros desta ilha soffrer tâtas forças & afrontas, como de contino recebião dos Portugueses, determinaraõ levantar-se contra elles, & contra o seu mesmo Rey q̄ os soffria, & consentia, a qual determinação puseraõ em effeito, & hũa noite saltaraõ na pouoação dos Portugueses, & nas casas do seu proprio Rey, q̄ perto delles estava, & mataraõ muitos, asy homens, como molheres, & ministros. E o Rey có algũs Portugueses q̄ puderaõ escapar deste assalto fugiraõ, embarcandose em Pangâyos, q̄ estauão no mar, perto da ilha, & se foraõ pera Mõbaça. E de então atè agora sêpre estes Mouros de Pêba estiueraõ leuâtados, & nunca mais quiserã obedecer ao proprio Rey, nê menos consentir Portugueses na sua ilha. E posto que depois disso foraõ castigados por Matheus Mendez de Vasconcellos capitão desta costa, & o Rey medido de posse da ilha por força

d'armas, com tudo tornaraõ se a levantar, como oje estã, sem quererem obedecer a seu Rey natural, q̄ está na fortaleza de Mombáça, feyto Christão, & casado có hũa Portuguesa das orfãs que vão deste Reino pera a India:

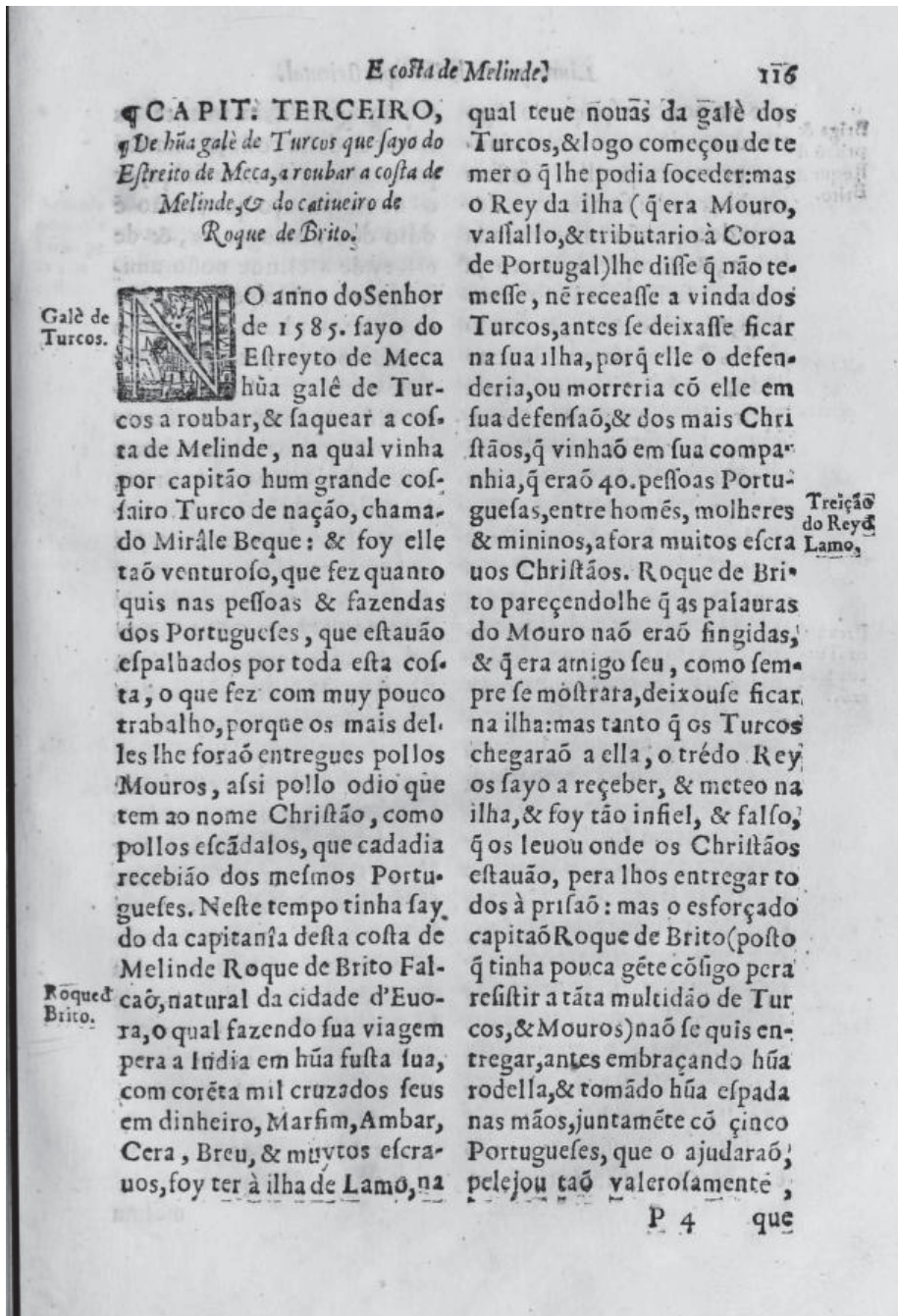
¶ Alem da cidade de Melia de està situada a ilha de Lamo, Lamo. onde ha muita creação de afnos muy grãdes de corpo, mas muito moles, & de pouco feruiço. Perto de Lamo està a ferrosa ilha de Pate junto da terra firme, a qual he muito fertil & grãde, & senhoreada de tres Reys, que viuem em tres cidades situadas dentro na mesma ilha, pouoadas de muitos Mouros, que saõ Pate, Sio, & Ampãza, tributarias a el Rey de Portugal. Esta vltima cidade Ampãza foy antiguamente muito rica, & muy prospera, & de melhores edificios, que todas as mais cidades desta costa, & asy era pouoada de Mouros mais arrogantes & soberbos, & grãdes inimigos de Christãos: pol la qual rezão foy castigada pollos Portugueses, destruida, & posta por terra, como se pode ver no capitulo seguin-

Pate, Sio & Ampãza.

Cap.

p.115v. 左段。Treição dos mouros de Pemba.〔ペンバのムスリムの叛逆行為〕

右段。Lamo.〔ラーモ(島)〕/ Pate, Sio & Ampãza〔パテ, シオ, およびアンパーザ〕



p.116. 左段。Galê de Turcos。〔トルキヤー(トルコ)人のガレー船〕/Roque de Brito。〔ロケ・デ・ブリート〕

右段。Treição do Rei de Lamo。〔ラーモ王の背信行為〕

Briga & prisão de Roque de Brito.

que em pouco espaço de tempo tirou a vida a muytos inimigos primeiro que lhe tirassem sua liberdade: finalmente depois de auer húa muy trauada briga, & Roque de Brito ja mui mal ferido, então foy rendido, & catiuo, & logo curado pollos Turcos com muito cuydado, por respeito do resgate q̄ por elle esperauão de auer, & depois foy leuado a Consta tinopla, onde falleceo de sua doença. De modo que os Turcos leuaraõ desta costa muitas & grossas prezas, q̄ montariaõ

Preza q̄ os Turcos leuaraõ.

ao todo cento & çincoenta mil cruzados, afsi do que tomaraõ a Roque de Brito, & aos outros Portugueses, como tambẽ de dadiuas q̄ os Mouros desta costa lhe deraõ, & alem disso leuaraõ duzentas & sessenta pessoas catiuas, em que entraraõ corenta Portugueses, que lhe foraõ entregues em diuersas partes desta costa, pollos Mouros della, falsos, & trêdos

¶ Soube tão bem este boca do aos Turcos, que determinaraõ tornar a esta costa com mayor cabedal, & armada, para nella fazerem húa fortaleza onde se recolhessem, & fortificassem. O qual intento fauo-

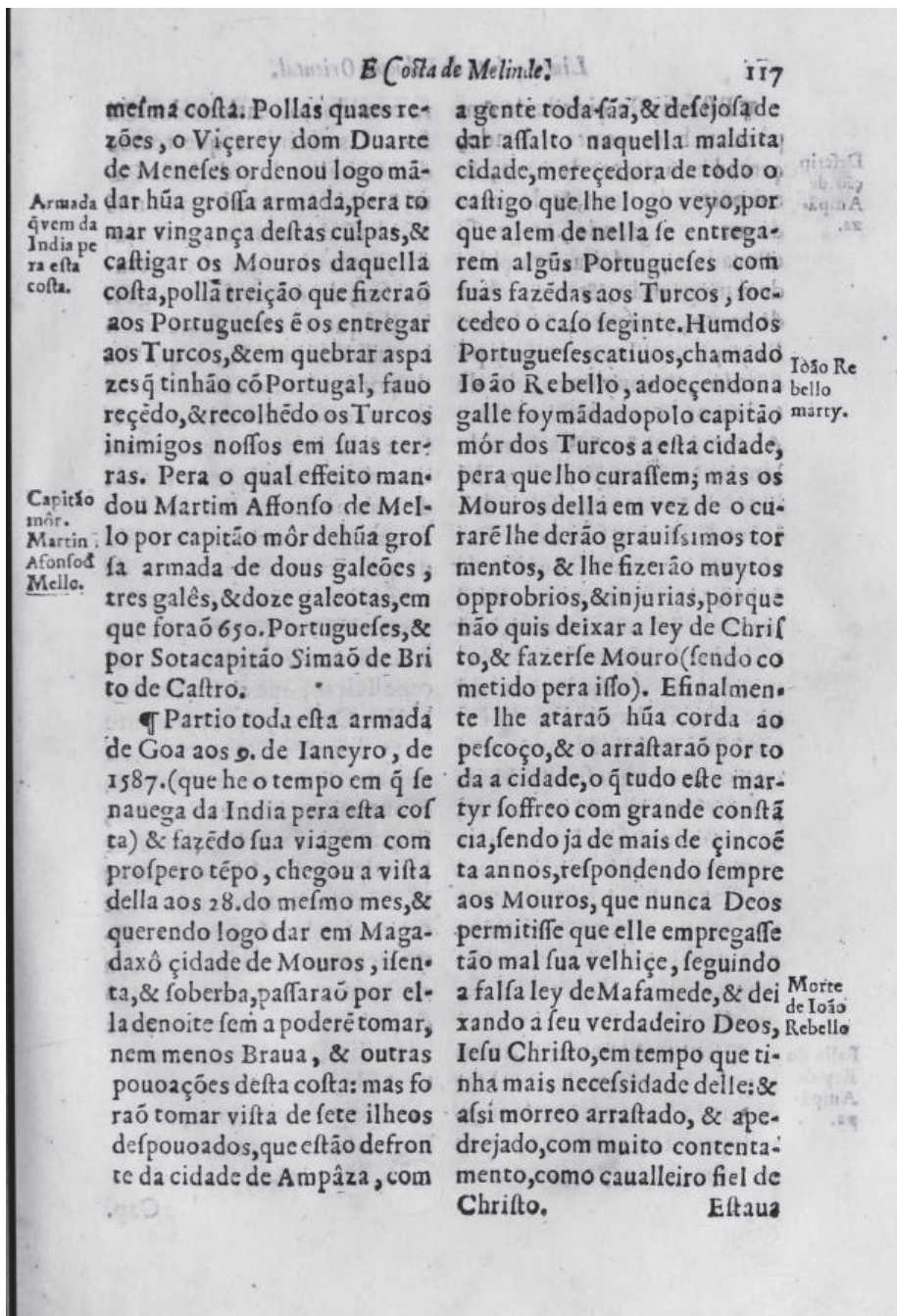
reção grandissimamente os Mouros desta costa, & mais e particular os de Mombâça, & os de Ampâza, o que fazião e odio dos Portugueses, & de elRey de Melinde nosso amigo, prometeõdo pera este effeito muitas dadiuas aos Turcos & todo o fauor, & ajuda q̄ lhe fosse necessaria. Com esta determinação se tornou o Turco pera o Estreito de Meca, leuando consigo a Roque de Brito, & a seus cõpanheiros, & a fusta que lhe tomou, cõ toda sua carga.

¶ CAPITULO QVARTO

¶ De húa armada que veyo da India castigar os Mouros da costa de Melinde, & do martyrio de João Rebello.



¶ Icou o estado da India requeando a tornada dos Turcos a esta costa, & assentarem nella como tinham concertado cõ os Mouros falsos, & trêdos da mesma costa: tudo a fim de lançarem os Portugueses fora destas terras. O qual intento, se viera a effeito, recebera o estado da India muito danno, & a fortaleza de Moçambique muita oppressão, por ficar na mesma



p.117. 左段。Armada que vem da India pera esta costa.〔インディアより当(メリンデ)海岸へ渡来せる船隊〕/ Capitão mór

Martin Afonso de Mello.〔カピタン=モール(総司令官)マルティン・アフォンソ・デ・メーロ〕

右段。João Rebello marty[r].〔殉難者ジョアン・レベアーロ〕/ Morte de João Rebello.〔ジョアン・レベアーロの死〕

Descrip  
ção de  
Ampâ-  
za.

¶ Estãa esta çidade de Ampâza em hum monte redondo, cercada em partes de vaza, & em partes de muro, & da parte do mar com grande, & grossa estacada de madeira. Erã çidade muy grande, & muy cheia de gente, prospera, & rica: o Rey que a pessuya era muy poderoso, & muy enuejado de todos os Reys desta costa.

Ao tempo que a nossa armada lançou anchora, veyo logo hũ batel de terra tomar falla della, cudãdo ser a frota dos Turcos, que vinha do Estreyto de Meca, como tinha prometido, mas achando o contrario, voltou muy ligeiramente, & tornou à çidade com a noua do que era. O Rey chamado Estãbãdur, entendẽdo muito bẽ que os Portugueses auião de pelear com elle, & castigallo, pollas culpas que contra elles cometera, & que tinha pouca esperança de socorro de seus vizinhos, poys a todos tinha por inimigos, fez hũa falla a seus vassallos, da maneira seguinte.

Falla do  
Rey de  
Ampã-  
za.

¶ Bem vedes amigos quam incerta he nossa vida, & saluação nesta hora, porque se fugimos pera a terra firme auemos de ser roubados, & por ventu-

ra comidos, ou catiuos dos Cafres. Os vizinhos que temos dẽtro na ilha da çidade de Parte, & de Sio, çerto he que nos não haõ de focorrer, nem ajudar, antes entregar aos Portugueses, de quem saõ amigos. Pollo que nos fica samente o remedio da espada, a qual ha de por em duuida esta contenta entre nõs & os Portugueses: & se vençermos, ficamos com muita honra, & nossa cidade com nossas familias, & fato seguro, & ficamos entãõ pôdo os pês sobre os pescoços de nossos inimigos, & se morreremos, mais val que seja pelejando com os Portugueses, q̃ saõ caualleiros, que não comidos pollos Cafres, & finalmente eu ey de pelear atẽ vencer, ou morrer. Ditas estas palauras, & outras semelhantes rezões, & çertificado dos grandes, & principaes vassallos que tinha estarem todos no mesmo parecer: ordenouse logo hum solẽne juramento, em que todos jurassem de pelear em defenção da patria, de seu Rey, & de suas

familias, atẽ morrer na condẽda, o qual juramento se pode ver no capitulo seguinte.

Cap.

CAPÍTULO II (Primeira Parte, Livro Quinto)

**Da ilha de Pemba, e suas Empófiás, e das ilhas de Lamo, e Pate.**

第 2 章(第一部第五卷) ペンバ島と、ここで行なわれる[ポルトガル人の]エンポーフアについて。また、ラーモとパテの両島について

**豊沃なるペンバ島**

○モンバーサの正面には別の島があり、これをペンバ<sup>11</sup>と呼ぶ。大陸から隔たることおよそ 8 レーグアの沖合にある。この島は長さ 9 レーグアか 10 レーグアだ。食糧は非常に豊かであり、特に米がそうである。いろいろな家畜の飼養が盛んに行なわれるので、値段は非常に安い。

*Ilha de Pemba, fértil.*

¶ Defronte de Mombaça está outra ilha chamada Pemba, oito léguas ao mar, pouco mais ou menos, afastada da terra firme, a qual tem nove ou dez léguas de comprimento. É mui fértil de mantimentos e em particular de arroz. Tem muitas e grandes criações de gado vacum, pola qual razão vale mui barato.

○この島はいたるところ、多くの淡水の小川によって潤されている。おびただしい密林があり、そこは持ち主のいないオレンジやレモンの木で溢れている。持ち主がいらないから、それらを収穫したいと思う人に自由に開かれている。密林の一部はたいそう稠密であり、掻き分け掻き分け進もうとしても、進めるものではない。すこぶる質のよいどっしりとした材木があり、それを材料として、ナウ船やナヴィオ船を多数造ることができる。緑滴る、爽やかで、肥沃な島であるにもかかわらず、この島はたいそう病気の発生が多い。

¶ Toda esta ilha é cortada de muitas ribeiras de água doce. Tem muitos matos cheios de laranjeiras, e limoeiros sem dono, devolutos a quem quer colher deles, e alguns são tão cerrados que não há quem possa romper por eles. Tem muito rica, e grossa madeira, de que se podem fazer muitas naus, e navios. E com ser ùa ilha tão viçosa, fresca, e fértil, é muito doentia.

**ペンバのエンポーフア——ポルトガル人による嫌がらせ——**

○この島[ペンバ]には常に多くのポルトガル人が住んでいた。既婚の商人もいたし兵士もいた。風土病に罹<sup>かか</sup>っている[者が多かった]。その島で彼らが送る粗野で、だらけた生活のため

<sup>11</sup> タンザニア連合共和国北部の沖に浮かぶザンジバル列島を構成する、その一島。現在モサンビーク共和国カーボ・デルガード州の州都ペンバとは、むろん別。

だ。そんな暮らしができるのは、この島の豊かさと肥沃さのおかげだ。彼らはこの島のムスリムをひどく抑圧している。連中はムスリムから、僅かばかりの家の食べ物さえむしり取っている。とりわけ悪質なのは、暇を持って余すごろうつきの兵士だ。連中がそうした悪事を働くのは、何かが不足しているからではないのだ。連中ときたら、みずから立ち働いて調理したくないため、ムスリム女をからかうため、そうするにすぎないのだ。そればかりではない。彼らは、ムスリム女が本当に必要としているものさえ、巻き上げる。そのための許しなど、彼女らに求めないし、何ものにも対価を払わない。気の毒なムスリムたちは、ポルトガル人から仕掛けられる絶え間ない暴虐に抑圧されていた。現地の住人のみならず、この島へやってくる財産持ちの商人も、暮らしが立ちゆかなかった。そのありさまだが、ムスリムの所有する鶏がいるとする。この鶏がキリスト教徒の家へ入ってゆくと、何と、もうそれっきり、鶏はムスリムのものではなくなるのだ。ムスリムが返してくれと懇願しても、キリスト教徒はこんなふうにする。鶏が俺の家に来たのはだ、こいつがキリスト教徒になりたがっているからなのだよ、だから引き渡すわけには、ゆかぬよ——。ヤギや豚が同じことをしても、ポルトガル人は似たような嫌がらせをやる。これらの動物は、ムスリムがほかならぬポルトガル人へ売するため、飼って養っているものだ。もしキリスト教徒がムスリムの家の戸口を通りかかり、たまたま石か何かで足を取られたとする。それにつまずくとか、あるいは何か、別の災いに見舞われたとする。すると不幸にも、その家に住む男女のムスリムは、当該のキリスト教徒が受けた損害のすべてを、弁済してやらねばならない。かねで償えなければ、衣服で、あるいは鶏で、あるいは何俵かの米で、埋め合わせをしてやるのだ。しかもキリスト教徒が心ゆくまでの満足を得るように。これに類した暴虐や非道の振舞いを、ほかにもポルトガル人は働いている。そうした暴力や不正行為を、ムスリムはエンポーフアと呼び習わす。だからこの海岸一帯で、悪名高いペンバのエンポーフアといえば、誰ひとり知らぬ者はない。

#### Empôfias de Pemba.

¶ Nesta ilha moraram sempre muitos portugueses, assi mercadores casados, como soldados, e sofriam as doenças da terra pola grossa e boa vida, que nela levavam, por sua grande abundância, e fertilidade; e tinham senhoreado tanto aos mouros da ilha, que até o comer do fogo lhe tomavam, particularmente os soldados vadios, e ociosos, o que faziam não porque lhes faltasse alguma coisa, senão por não cozinharem, ou por zombarem das mouras. E além disto lhe apanhavam tudo o que delas haviam mister, sem para isso lhe pedirem licença, nem satisfazerem cousa alguma. E tão oprimidos eram estes pobres mouros com as perpétuas forças, que lhe faziam os portugueses, não somente os moradores da terra, mas também os mercadores forasteiros, que a ela vinham com suas fazendas, que não podiam viver. Porque a galinha do mouro, que entrava em casa do cristão, não



era mais do mouro, e se ele a pedia, respondia-lhe o cristão que a galinha fora a sua casa pera se fazer cristã e que lha não havia de dar. E a mesma rapina lhes faziam das cabras, e dos porcos, que os mouros ali criavam pera vender aos mesmos portugueses. Se o cristão passava pola porta do mouro, e acertava de empeçar em algũa pedra, ou dava algũa topada ou lhe sucedia qualquer outro desastre, o pobre do mouro ou moura daquela casa lhe havia de pagar todo o dano que recebeu, ou com roupa, ou com galinhas, ou com fardos de arroz, de modo que ficasse o cristão satisfeito à sua vontade, e outras mil forças, e trapaças como estas lhes faziam, as quais os mouros chamam *empófias*, de maneira que eram mui nomeadas por toda esta costa as *empófias* de Pemba.

### ペンバのムスリムの叛逆行為

○ペンバ島のムスリムは、継続的にポルトガル人から受けてきた暴力や侮辱のかずかずに、とうとう堪えられなくなった。そこでポルトガル人に対し、そしてほかならぬ自分たちの王に対し、叛乱を起こす決意を固めた。この王というのは、ポルトガル人の勝手放題を許し、これに黙認を与えていた男だ。上記の決意を彼らは実行に移した。ある夜のことで。ムスリムは、ポルトガル人の集落およびポルトガル人の近くにいた彼らの王の住まいに、襲撃をかけた。そして多くの人々を殺した。男ばかりか婦女子も、殺害された。王は、襲撃から逃れた幾人かのポルトガル人と一緒に、島近くの海上に停泊していたパンガイオ船に乗り込み、モンバーサへ逃げた。そのとき以来今日まで、ペンバに住むムスリムの叛乱の企てはやまない。そして彼らの〔本来の〕王には、決して服従しようとはしない。ましてみずからの島にポルトガル人が居座るなど、決して許さない。この件をめぐり後日、ムスリムは、マテウス・メンデス・デ・ヴァスコンセーロス——この海岸のカピタン〔行政長官〕である——による懲罰を受ける。ヴァスコンセーロスは、武力を用い、かの王が島〔ペンバ〕の支配者へ返り咲くよう計らってやったのだが、ムスリムは再び反抗に立ち上がり、〔不穏な〕情勢は今も続いている。ムスリムは、彼ら本来の王に服従することを、決して望まない。問題の王は今、モンバーサの要塞に暮らし、キリスト教徒となり、ポルトガル女性と結婚している。この女性は本国〔ポルトガル〕からインディアへ来ている孤児のひとりである<sup>12</sup>

---

<sup>12</sup> 大航海時代、商人や船乗りや兵士として、インドなど東洋のポルトガル勢力圏に赴き、そのまま現地に居ついてしまったポルトガル人（男性）は、少なくなかった。ゴアが、アフォンソ・デ・アルブケルケによって占領された1510年以降、しばらくの間、東洋植民地へ渡航するポルトガル人の数を男女比で見ると、長い航海に伴う危険や疫病、船内の過酷な日常作業に女性は適応しがたい、等々の理由で、男が圧倒的に高かった。アルブケルケはそこで、ポルトガル人独身者となるべく身分ある、現地のヒンドゥー教徒の婦人と婚姻するよう奨励した（ヒンドゥー教徒の妻をカトリックへ改宗させる働きかけは、当然、熱心に行なわれたであろう）。守るべき家庭を持ち、カザード（既婚者）と呼ばれる身分

## Treição dos mouros de Pemba.

¶ Não podendo os mouros desta ilha sofrer tantas forças e afrontas, como de contínuo recebiam dos portugueses, determinaram levantar-se contra eles, e contra o seu mesmo rei que os sofria, e consentia, a qual determinação puseram a efeito, e ùa noite saltaram na povoação dos portugueses, e nas casas do seu próprio rei, que perto deles estava, e mataram muitos, assim homens como mulheres, e meninos. E o rei com alguns portugueses que puderam escapar deste assalto fugiram, embarcando-se em pangaios, que estavam no mar, perto da ilha, e se foram para

---

の男性を増やせば、カトリック倫理にもとづいて日常生活を律する者も、増えるであろう。そうすれば、ポルトガル海外帝国の維持・防衛をみずからの問題として、より真剣に考えるようになる者も、増えるであろう。と。アルブケルケの考えでは、ソルテイロ(独身者)と呼ばれ、主として現地の軍務や雑役に従う兵士たちは、放縱な暮らしに陥りがちであり、このような連中に、責任ある植民地経営を担わせるのは、無理であった。インドにおけるポルトガル人女性の絶対的少なさに鑑み、ポルトガル植民者は現地のヒンドゥー系女性と結婚するよう推奨したアルブケルケであるが、このやり方では、植民地におけるポルトガル人の男女人口比のいびつさは、解消されない。それを少しでも改善するため、1545年頃から、ポルトガル王室は、父親を軍役等により失った女のみなしごを、インドや東アジアの植民地へ送る政策を採用する。みなしごの少女は、ゆくゆくは、現地人支配者や、ポルトガル人植民者に嫁がされることになる(ペンバ島の王の地位を追われ、モンバーサへ移った人物が、キリスト教に改宗し、ポルトガル人孤児を妻に迎えた、というサントスの記事は、その一例)。

彼女らは *órfãs d'el-rei* (オールファン・デルレイ。国王の女性孤児) と呼ばれる。年齢はおおむね12歳から30歳くらい。 *órfãs d'el-rei* と、ことさらに「国王の」という但し書きが附されていることからわかるように、ポルトガル王室は、派遣される前の彼女らの世話・養育に対する金銭的責任を負った。それは、彼女らがゴアを筆頭とする海外植民地へ送られてからも、同様であった。ただ、植民地で、国策によって送られてきた女性孤児(選抜の条件として、①白人であること、②カトリック信徒であること、③素性のよい者であること、が求められていた)を、いきなり妻に迎えよ、と言われても、それだけでは、二の足を踏む男が多かったであろう、男が喜んで結婚に応ずるためのいわばインセンティブとして、みなしごたちは、あたかもダウリーの如き“婚資”を持たされていた。“婚資”は、現金ではなく、ゴア政庁など植民地行政の公職に就くことを保証する約束、という形式をしばしばとった。公職には、結婚相手を見つけたみなしご自身が就任することも、ときおりあったが、多くの場合、みなしごを妻に迎えた男が、その地位に就いた。

本注を記すに際し以下の諸書を参照した。

Margaret Sarkissian. *D'Albuquerque's Children: Performing Tradition in Malaysia's Portuguese Settlement*, Chicago, University of Chicago Press, 2000.

Timothy Coates. *Convicts and Orphans: Forced and State-sponsored Colonizers in the Portuguese Empire, 1550-1755*, Redwood City (California), Stanford University Press, 2001.

Charles Ralph Boxer. *Four Centuries of Portuguese Expansion, 1415-1825: A Succinct Survey*, Volume 3 of Publications of the Ernest Oppenheimer Institute of Portuguese Studies of the University of the Witwatersrand, Johannesburg / Oakland (California), University of California Press, 1972.

Charles Ralph Boxer. *Women in Iberian Expansion Overseas, 1415-1815: Some Facts, Fancies, and Personalities*, New York, Oxford University Press, 1975.

Fatima da Silva Gracias. *Keloidoscope of Women in Goa, 1510-1961*, New Delhi, Concept Publishing Company, 1996.

Fatima da Silva Gracias. *Beyond the Self: Santa Casa da Misericórdia de Goa*, Panjim (Goa), Surya Publications, 2000.

Mombaça. E de então até agora sempre estes mouros de Pemba estiveram levantados, e nunca mais quiseram obedecer ao próprio rei, nem menos consentir portugueses na ilha. E posto que depois disso foram castigados por Mateus Mendes de Vasconcelos, Capitão desta costa, e o rei metido de posse da ilha por força d'armas, contudo tornaram-se a levantar, como hoje estão, sem quererem obedecer a seu rei natural, que está na fortaleza de Mombaça, feito cristão, e casado com ã portuguesa das orfãs que vão deste reino pera a Índia.

### ラーモ(島)/パテ, シオ, およびアンパーザ

○メリンデ〔マリンディ〕市の向こうにラーモ〔ラーム〕島が存在する。そこには図体のひどく大きなロバが、盛んに飼われ養われている。体つきこそ大きいものの、いたって軟弱であって、ほとんどものの役には立たない。ラーモの近くには、陸地に接するように、美しいパテ島がある。この島はたいそう肥沃かつ広大であり、3人の王が支配している。これらの王は同じ島に点在する3つの街で暮らしており、そこにはムスリムが多数住んでいる。これらの街とは、パテと、シオと、アンパーザだ。いずれの街も、ポルトガル王に貢ぎ物を納めている。最後に挙げたアンパーザの街はその昔、すこぶる富裕で繁栄を謳歌していた。立ち並ぶ建物は、海浜一帯にあるどの街の建物より壮麗であった。そのせいもあるのか、アンパーザに暮らすのは、ムスリムの中でもひととき傲慢で、鼻っ柱が強く、キリスト教徒の手ごわい敵であった。この街がポルトガル人の懲らしめを受け、破壊されたゆえんは、そこにある。その次第は次章において見ることができる。

#### Lamo./ Pate, Sio & Ampãza

¶ Além da cidade de Melinde está situada a ilha de Lamo, onde há muita criação de asnos mui grandes de corpo, mas muito moles, e de pouco serviço. Perto de Lamo está fermosa ilha de Pate junto da terra firme, a qual é muito fértil, e grande, e senhoreada de três reis, que vivem em três cidades situadas dentro na mesma ilha, povoadas de muitos mouros, que são Pate, Sio, e Ampaza, tributárias a el-Rei de Portugal. Esta ultima cidade Ampaza foi antigamente muito rica, e mui próspera de melhores edificios, que todas as mais cidades desta costa, e assim era povoada de mouros mais arrogantes, e soberbos, e grandes inimigos de cristãos; pola qual razão foi castigada polos portugueses, destruída, e posta por terra, como se pode ver no capítulo seguinte.

### CAPÍTULO III (Primeira Parte, Livro Quinto)

**De ã galé de turcos que saiu do Estreito de Meca, a roubar a costa de Melinde, e do cativo de Roque de Brito.**

### 第 3 章(第一部第五卷) メリンデの海岸を強奪するためメッカの海峡を出たトゥルキア人の一ガレー船について。ロケ・デ・ブリートが捕囚の身となったことについて

#### トゥルキア(トルコ)人のガレー船

○主の年の 1585 年、メッカの海峡<sup>13</sup>をトゥルキア人たちのガレー船一艘が出発した。メリンデの海岸で強盗や略奪を働くことが狙いであった。ガレー船には、カピタン[司令官]として大物の海賊がひとり、乗り組んでいた。この男、出自はトゥルキア[トルコ]であり、名をミラーレ・ベッケという。すこぶる怖いもの知らずであって、メリンデの海岸に暮らすポルトガル人の家族やその財貨に対する略奪と強奪を、恣<sup>ほしま</sup>にした。しかもいささかも難なく、それを成就した。なぜならポルトガル人の大半は、当地のムスリムによって、ミラーレ・ベッケのもとへ[俘虜として]引き渡されていたからだ。ポルトガル人がそのような仕打ちを受けたのは、ひとつに、当地の住民がキリシタンという呼び名に懐かたならぬ憎悪のため、いまひとつに、ポルトガル人から日々蒙<sup>エスカンダロ</sup>っている損害と、[ポルトガル人がやらかす]もろもろの破廉恥な振舞いのせいだ。

#### ロケ・デ・ブリート

この頃、メリンデのカピタニア[仮の訳語として「海外領土行政区」を考慮しておく]を、エーヴォラ市生まれのロケ・デ・ブリートは、留守にしていた。ロケ・デ・ブリートは自前のフスタ船に乗り、インディアへ渡りつつあったのだ。持参したのは、手持ちの現金 4 万クルザード、象牙、竜涎香、蠟、タール、そして多数の奴隷であった。ラーモ島に立ち寄ったとき、トゥルキア人のガレー船が渡来するという知らせを、ロケ・デ・ブリートは耳にする。彼はわが身へ降りかかろうとする事態に、恐怖を覚えた。ラーモ島の王——ムスリムであるけれど、ポルトガル王室の家来であり、これに貢ぎ物を納めている——はしかし、ロケ・デ・ブリートへこう告げた——。恐れることはありません。トゥルキア人の来襲を懸念する理由は、何もありません。わがラーモ島に留まれよ。私が貴殿をお守りする。万一それが不可能となれば、貴殿や、貴殿に随伴するキリスト教徒——彼らはポルトガル人で、大人の男女、子ども、総勢 40 名。それから、キリスト教に改宗した奴隷も多かった——を守りつつ、貴殿に殉じて果てる覚悟である。ムスリム[ラーモ島の王]の言葉は人を欺いているとは思われぬ、この男は味方である——ラーモ島の王が見せてきた態度は、それまで確かに友好的であったのだ、と、ロケ・デ・ブリートはそう考え、そ

<sup>13</sup> 原語 Estreyto de Meca. バブ・アル=マンデブ海峡。アラビア半島南西のイエメンと、アフリカの角と呼ばれるジブティやエリトリアのあいだに横たわる海峡。

のままラーモ島に滞留する道を選んだ。

### ラーモ王の背信行為

しかしである。トゥルキア人がラーモに近づくや、王は裏切り者の本性を現わす。なんと、トゥルキア人を歓迎しようと、のこのこ姿を現わし、トゥルキア人を島に引き止めたのだ。そして何という不忠であり欺瞞であろう、トゥルキア人をキリスト教徒の居場所へ導いた。キリスト教徒を全員、トゥルキア人へ引き渡し、牢獄送りにするためである。

### ロケ・デ・ブリートの格闘と収監

しかし勇敢なカピタンであるロケ・デ・ブリートは（トゥルキア人の大群と、ムスリムに立ち向かうには、少なすぎる手勢しか引き連れていなかったにもかかわらず）は、おめおめと投降することを望まなかった。それどころか、楯ひとつ腕に巻きつけ、剣一振り両手に取り、すこぶる勇猛な争闘を繰り広げた。ポルトガル人5名が彼を助けようと加勢した。敵の命は多数奪ったものの、多勢に無勢、やがてロケ・デ・ブリートは身動きの自由を失う。くんずほぐれつの乱闘が行なわれ、深手を負ったロケ・デ・ブリートは、ついに降参、捕虜となって即刻、トゥルキア人の手厚い治療を受けた。この男を捕虜とすれば転がり込むであろう身代金への思惑が、トゥルキア人にはあった。ロケ・デ・ブリートはその後、コンスタンティノープラ〔コンスタンティノープル〕へ連行され、そこで病を得、亡くなる。

### トゥルキア〔トルコ〕人の持ち去った戦利品

トゥルキア人はこうして、この海岸一帯から、価値ある戦利品を、おびたしく持ち帰った。その価値、総計15万クルザードに上るであろう。戦利品は、ロケ・デ・ブリート自身から得たものと、他のポルトガル人から奪い取ったものからなる。加えて海岸一帯のムスリムがトゥルキア人へ差し出した贈り物のかずかずも、大きな戦利品であった。トゥルキア人が連れ去った囚われびとは260人、うち40名がポルトガル人であった。囚われびとは、メリンデ海岸のさまざまな場所で、トゥルキア人へ引き渡された。引き渡し役を買って出たのは、海岸に暮らすムスリムであり、欺瞞的で裏切りを好む連中だ。

### Galê de Turcos.

¶ No ano do Senhor de 1585, saiu do Estreito de Meca ã galê de turcos a roubar, e saquear a costa de Melinde, na qual vinha por capitão um grande cossairo, turco de nação, chamado Mirale Beque, e foi ele tão venturoso, que fez quanto quis nas pessoas e fazendas dos portugueses, que estavam espalhados por toda esta costa, o que fez com mui pouco trabalho, porque os mais deles lhe foram entregues pelos mouros, assi pelo ódio que têm ao nome cristão, como pelos escândalos que cada dia recebiam dos mesmos portugueses.

### Roque de Brito.

Neste tempo tinha saído da Capitania desta costa de Melinde Roque de Brito Falcão, natural da cidade d'Évora, o qual fazendo sua viagem pera a Índia em ãa fusta sua, com corenta mil cruzados seus em dinheiro, marfim, âmbar, cera, breu e muitos escravos, foi ter à ilha de Lamo, na qual teve novas da galé dos turcos, e logo começou de temer o que lhe podia suceder; mas o rei da ilha (que era mouro, vassalo, e tributário à Coroa de Portugal) lhe disse que não temesse, nem receasse a vinda dos turcos, antes se deixasse ficar na sua ilha, porque ele o defenderia, ou morreria com ele em sua defesa, e dos mais cristãos, que vinham em sua companhia, que eram corenta pessoas portuguesas, entre homens, mulheres e mininos, afora muitos escravos cristãos.

Treição do Rei de Lamo./Briga & prisão de Roque de Brito./ Preza que os Turcos leuaraõ.

Roque de Brito parecendo-lhe que as palavras do mouro não eram fingidas, e que era amigo seu, como sempre se mostrara, deixou-se ficar na ilha; mas tanto que os turcos chegaram a ela, o tredo rei os saiu a receber, e meteu na ilha, e foi tão infiel, e falso, que os levou onde os cristãos estavam para lhos entregar todos à prisão; mas o esforçado Capitão Roque de Brito (posto que tinha pouca gente consigo para resistir a tanta multidão de turcos, e mouros) não se quis entregar, antes abraçando ãa rodela, e tomando ãa espada nas mãos, juntamente com cinco portugueses que o ajudaram, pelejou tão valerosamente que em pouco espaço de tempo tirou a vida a muitos inimigos primeiro que lhe tirassem sua liberdade; finalmente depois de haver ãa mui travada briga, e Roque de Brito já mui mal ferido, então foi rendido, e cativo, e logo curado polos turcos com muito cuidado, por respeito do resgate que por ele esperavam de haver, e depois foi levado a Constantinopla, onde faleceu de sua doença. De modo que os turcos levaram desta costa muitas e grossas presas, que montariam ao todo cento e cinquenta mil cruzados, assim do que tomaram a Roque de Brito e aos outros portugueses, como também de dádivas que os mouros desta costa lhe deram e, além disso, levaram duzentas e sessenta pessoas cativas, em que estavam corenta portugueses, que lhe foram entregues em diversas partes desta costa, pelos mouros dela, falsos e tredos.

○この戦利品に味を占めたトゥルキア人は、より潤沢な資金と、大がかりな船隊を準備して、当[メリンデ]海岸を略取しようと決意した。そしてあわよくば、海岸部に、退避に適し、フォルタレーザ籠城を圍りうる一要塞を築こうと、もくろんだ。トゥルキア人の企てを、海岸に暮らすムスリムたちは、口を極めて褒めそやした。ことにモンバーサおよびアンパーザのムスリムの喜びようは格別であった。彼らが大喜びしたのは、ポルトガル人に対する憎しみのゆえ、そ

ジョアン・ドス・サントス『エティオピア・オリエンタル』（1609年、エヴォラ刊）を初版本テキストから訳注する試み

して、我らの味方であるメルンデ王に対する嫌悪感のゆえであった。彼らは上記のもくろみが完遂するよう、トゥルキアー人へもろもろの無償供与を精一杯行なう、さらに、要請あるときは、トゥルキアー人へあらゆる支援と加勢を惜しまぬ、と約束した。トゥルキアー人の軍勢は、上記の決意を固め、メッカの海峡〔前出。バブ・アル=マンデブ海峡〕へ戻った。ロケ・デ・ブリーとその従者たち、さらには、トゥルキアー人がロケ・デ・ブリーから取り上げたフスタ船——その積荷すべてともども——も一緒であった。

¶ Soubte tão bem este bocado aos turcos que determinaram tornar a esta costa com maior cabedal, e armada, para nela fazerem ãa fortaleza onde se recolhessem e fortificassem. O qual intento favoreciam grandecissimamente os mouros desta costa, e mais em particular os de Mombaça, e os de Ampaza, o que faziam em ódio dos portugueses, e de el-Rei de Melinde nosso amigo, prometendo para este efeito muitas dádivas aos turcos e todo o favor, e ajuda que lhe fosse necessária. Com esta determinação se tornou o turco para o Estreito de Meca, levando consigo a Roque de Brito, e a seus companheiros, e a fusta que lhe tomou, com toda sua carga.

#### CAPÍTULO IV (Primeira Parte, Livro Quinto)

##### **De ãa armada que veio da Índia castigar os mouros da costa de Melinde, e do martírio de João Rebelo.**

第4章(第一部第五卷) メルンデ海岸のムスリムたちを懲罰するためインディアからやってきた〔ポルトガルの〕一船隊について。ジョアン・レベローが受難に堪えて死んだことについて

エスタード・ダ・インディア<sup>14</sup>は、この海岸へトゥルキアー人が再来することを懸念していた。そして、トゥルキアー人が、メルンデ海岸の偽り多く、裏切り好きの、ムスリムと交わした約束どおり、同海岸に腰を据えてしまうのではないかと、と惧れていた。トゥルキアー人のねらいは、詰まるところただひとつ、これら諸地方の外へポルトガル人を放逐することであった。そのたくらみがもし実現すれば、エスタード・ダ・インディアは、重大な損害を蒙り、モサンビークの要塞<sup>フォルタレーザ</sup>もまた、メルンデと同一海岸〔の延長線上〕に位置するのであるから、大きな圧迫にさらされるであろう。そうしたもろもろの理由に鑑み、インディア副王ドン・ドウアルテ・デ・メネーゼ

---

<sup>14</sup> ポルトガル領インディア。大航海時代、ポルトガル海洋帝国の影響力が及んだ東方の、主として海岸地域や、周辺の島嶼部を全般的に指す。が、ここでは、ポルトガル国王の名代たる副王が駐在するゴア政庁を指すであろう。

ス<sup>15</sup>は、素早く、一大船隊の派遣を取り決めた。そのねらいは、トルキア人の犯した非違のかずかずに報復し、さらに、かの海岸のムスリムがポルトガル人をトルキア人へ引き渡すという背信行為を働き、あまつさえ、ポルトガルとのあいだで維持してきた和平の関係を反故にしたうえ、我らの敵であるトルキア人に肩入れし、かつトルキア人をみずからの土地へ引き入れる、という裏切り行為をやったのけた、その責任をとらせ、かつ彼らを厳罰に処するためであった。この目的を果たすため、副王ドン・ドゥアルテ〔・デ・メネーゼス〕は、マルティン・アフォンソ・デ・メーロをカピタン・モールとする一大船隊を派遣した。船隊の陣容は、ガレオン〔ガレオン〕船2隻、ガレー船3隻、ガレオタ船12隻である。乗り組んだポルトガル人は総勢650人。カピタン補佐はシマン・デ・ブリート・デ・カストロが務めた。

¶ Ficou o Estado da Índia receando a tornada dos turcos a esta costa; e assentarem nela como tinham concertado com os mouros falsos, e tredos da mesma costa; tudo a fim de lançarem os portugueses fora destas terras. O qual intento, se viera a efeito, recebera o Estado da Índia muito dano, e a fortaleza de Moçambique muita opressão, por ficar na mesma costa. Polas quais rezões, o Vice-Rei D. Duarte de Meneses ordenou logo mandar ãa grossa armada, pera tomar vingança destas culpas, e castigar os mouros daquela costa, pola treição que fizeram aos portugueses em os entregar aos turcos, e em quebrar as pazes que tinham com Portugal, favorecendo, e recolhendo os turcos inimigos nossos em suas terras. Pera o qual efeito mandou Martim Afonso de Melo por capitão-mor de ãa grossa armada de dois galeões, três galés, doze galeotas, em que foram seiscentos e cinquenta portugueses, e por sota-capitão, Simão de Brito de Castro.

### 殉難者ジョアン・レベロー/ジョアン・レベローの死

この船隊が全船挙げてゴアを出発したのは、1587年1月9日〔メリンデ〕海岸へ向けインディアからの航海を始めるのは、おおよそこの時期だ。船隊は順風を受けて航海を続け、〔メリンデ〕海岸を視界に入れた。これが同月28日。ムスリムの街であり傍若無人にして尊大なマダシヨール〔モガディシヨール〕<sup>16</sup>に、ただちに攻勢を加えようと望んだが、結局この街は奪取せず、

<sup>15</sup> モロッコのタンジェ(タンジール)に1537年12月6日生まれ、1588年5月4日ゴアで没。第三〇代インディア総督にして第一四代インディア副王。イエズス会巡察師アレッサンドロ・ヴァリニャーノの懇請を受け、死の直前、在日キリシタン宣教師の庇護等を願う、豊臣秀吉宛ての書翰(国宝。妙法院蔵)をしたためたことでも知られる。1522年から1544年までインディア総督を務めたドゥアルテ・デ・メネーゼスの孫。

<sup>16</sup> 原綴り Magadaxô。900年頃アラブ人や黒人の植民者が定住し、12世紀初頭にはアフリカ東海岸における一大商業拠点に発展、その交易のようすは14世紀に来訪したイブン・バトゥータによって記される。15世紀前半には鄭和の明朝艦隊の分遣隊が訪問(宮本正興/松田素二編『新書アフリカ史 改訂新版』前掲書、242～244頁。福田安志執筆の第八章「インド洋交渉史」参照)。



夜半、この街〔の沖を〕をやり過ぎた。ブラーヴァや、同海岸のその他の〔ムスリム〕居住地も、同様に通過した。そのかわり、ポルトガル人は7つの小さな無人島を視界に捉えた。これらの無人島はアンパーザの街を正面に見るように位置する。ポルトガル人は皆、気力充実、かの呪うべき街〔アンパーザ〕に急襲をかけてやろうとする願いに燃えていた。まったくこの街は、これからここに降りかかる、あらゆる懲罰に値するのであった。というのは、ポルトガル人数名のトゥルキア人への引き渡し——ポルトガル人が有していた財貨もろともに——が行なわれたのは、この街においてであったばかりか、次のような出来事も生じたからだ。捕虜となったポルトガル人のひとりに、ジョアン・レベローと名乗る人物がいた。〔トゥルキアへ向かう〕ガレー船中で病気に罹り、トゥルキア人を束ねるカピタン・モール〔総司令官〕によって、この街へ送り返された。彼に治療を受けさせるためであった。しかしこの街のムスリムときたら、治療を施すかわりに、むごたらしい拷問を加えたのだ。加えて、多くの辱めを与え、侮りの言葉を投げつけた。彼は、クリストの掟を棄てムスリムになるよう、執拗な責めを受けた。ついにアンパーザの連中は、その首に縄を巻きつけ、市街をくまなく、その格好で引きずり廻した。受難をもつともせぬこの男<sup>17</sup>は、<sup>よひ</sup>年齢50を越える老境の身でありながら、ただならぬ自制と節操をもって、一切に堪えた。ムスリムへの返答は常に一貫していた。私が偽りのマファメーデ〔ムハンマド〕の掟に尻尾を振ったり、わが真実のデウス——ジェズ・クリスト——を棄て、もって、晩節を汚すが如き振舞いに出たりせぬよう——それも、デウスの助けを最も必要としつつあるこのときに——、デウスよ、私を守り給え、と。引きずり廻され、投石され、ジョアン・レベローは、クリストの忠良なる騎士として、大いなる喜びとともに絶命した。

Ioão Rebello martyr[r]. / Morte de Ioão Rebello.

¶ Partiu toda esta armada de Goa aos 9 de Janeiro, de 1587 (que é o tempo em que se navega da Índia para esta costa) e fazendo sua viagem com próspero tempo, chegou à vista dela aos 28 do mesmo mês, e querendo logo dar em Magadoxo cidade dos mouros, isenta, e soberba, passaram por ela de noite sem a poderem tomar, nem mesmo Brava, e outras povoações desta costa; mas foram tomar a vista de sete ilhéus despovoados, que estão defronte da cidade de Ampaza, com a gente toda sã, e desejosa de dar assalto naquela maldita cidade, merecedora de todo o castigo que lhe veio, porque além de nela se entregarem alguns portugueses com suas fazendas aos turcos, sucedeu o caso seguinte. Um dos portugueses cativos, chamado João Rebelo, adoecendo na galé foi mandado polo capitão-mor dos turcos a esta cidade, para que lho curassem; mas os mouros

<sup>17</sup> 原語 martyr. 「殉教者」の義であるが、カトリック信仰に殉じた者、というより、もう少し広い意味を持たせた訳語とする。

dele em vez de o curarem, lhe deram gravíssimos tormentos, e lhe fizeram muitos opróbrios, e injúrias, porque não quis deixar a lei de Cristo, e fazer-se mouro (sendo cometido para isso). E finalmente lhe ataram ãa corda ao pescoço, e o arrastaram por toda a cidade, o que tudo este mártir sofreu com grande constância, sendo já de mais de cinquenta anos, respondendo sempre aos mouros que nunca Deus permitisse que ele empregasse tão mal sua velhice, seguindo a falsa lei de Mafamede, e deixando a seu verdadeiro Deus, Jesu Cristo, em tempo que tinha mais necessidade dele; e assi morreu arrastado; e apedrejado, com muito contentamento, como cavaleiro fiel de Cristo.

### アンパーザの描写

○当アンパーザの街は、円錐形の、ある山の<sup>ふところ</sup>懐に位置している。あるところは水路に、あるところは壁に取り巻かれ、海の側は、堂々として頑丈な、木製の防壁によって守られている。ひところこの街は、たいそう壮大で、住民に溢れ、繁栄を享受し、裕福であった。この街を手中に収めていた王は、大いに権勢あり、海岸一帯に暮らす王すべてから羨望の眼差しをもって見られていた。我ら〔の船隊〕が錨を下ろすと、ただちに一艘のバテール船〔艇〕が陸から、我らと言葉を交わしにやってきた。我らの船隊を、かねてトゥルキア人と交わしていた約束のとおり、メッカの海峡からやってきたトゥルキアの船隊、と誤認したのだ。予断が大いに誤っていると気づいたバテール船は、さっさと陸へ引き返し、今しも起こりつつある事態を急報すべく、アンパーザの街へ戻った。アンパーザの王はエスタンバードウルという。彼の認識は、こうであった。ポルトガル人は、みずからと一戦を交え、我——エスタンバードウル——がポルトガル人に対し犯した罪を償わせようとしている。ポルトガル人は我へ懲罰を加えようと思いを固める一方、我の側には隣人からの救援を受ける見込みが、ほぼない——。エスタンバードウルは、もはや隣人を皆、敵と見なさざるを得なかった。彼は家臣一同に向かい、次のような演説をぶった。

### Descrição de Ampãza

¶ Estava esta cidade de Ampaza em um monte redondo, cercado em partes de vaza, e em partes de muro, e da parte do mar com grande, e grossa estacada de madeira. Era cidade mui grande, e mui cheia de gente, próspera, e rica; o rei que a pessuia<sup>18</sup> era mui poderoso, e mui envejado de todos os reis desta costa. Ao tempo que a nossa armada lançou âncora, veio logo um

---

<sup>18</sup> 初版本にも pessuya とあるが、possuya (現代綴りなら possuia) の誤りか。ならば、possuir (所有する) の直説法・完了過去・三人称・単数。そうと見て和訳する。

batel de terra tomar fala dela, cuidando ser a frota dos turcos, que vinha do Estreito de Meca, como tinha prometido, mas achando o contrário, voltou mui ligeiramente, e tornou à cidade com a nova do que era. O Rei chamado Estambadur, entendendo muito bem que os portugueses haviam de pelear com ele, e castigá-lo pelas culpas que contra eles cometera, e que tinha pouca esperança de socorro de seus vizinhos, pois a todos tinha por inimigos, fez ùa fala a seus vassalos, da maneira seguinte:

### アンパーザ王の演説

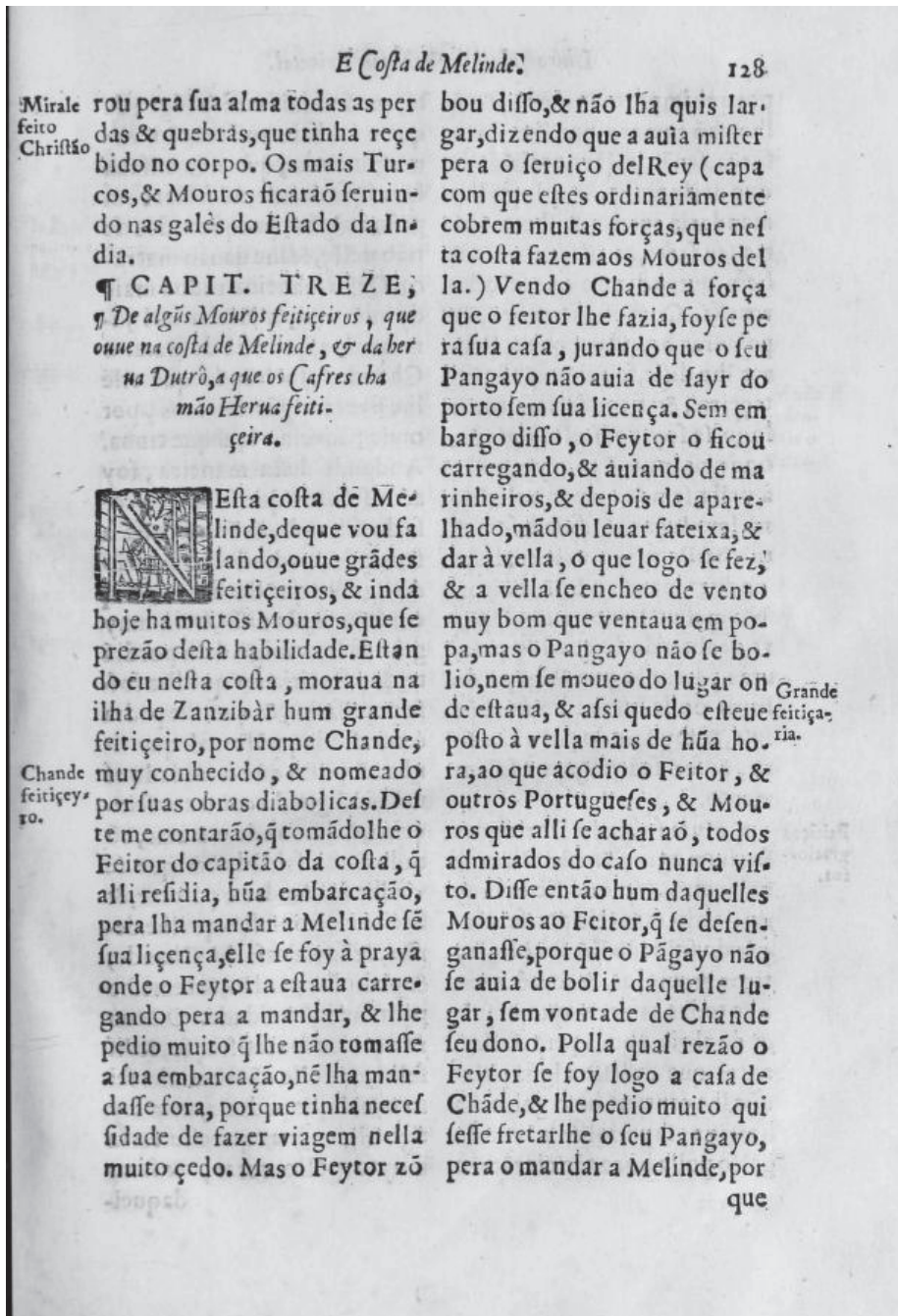
○「わが友よ。これから述べることに、よく思いを馳せよ。この期に及んで命を保とうとすること、生き永らえようとするのが、いかに<sup>はかみな</sup>儂い願いであるか。もしも、だ。我ら、本土へ向けて逃走するとせよ。必ずや略奪の憂き目を見るであろう。カフル人どもに食われ、囚われの身となる憂いも、ある。パテヤシオの街がある本島に、我らが有する隣人であるが、連中が我らへの加勢に来てくれぬは必定、救いの手も差し延べてはくれまい。それどころか、我らを捕え、その身柄をポルトガル人へ引き渡す<sup>おそ</sup>恐れさえ、ある。パテヤシオの連中は、ポルトガル人と良好な関係にあるからだ。したがって、我とわが身を守る方法としてはひとつ。剣による自力救済、これのみである。剣こそが、ポルトガル人との争闘に勝つか、負けるか、その帰趨を制するのだ。我らが勝つとせよ。我らの声望は大いに高まり、我らの街も、わが一族も、家財ともども安全ならしめられ、我ら、敵どもの頸を見下ろしこれに両足を置くであろう。我らが死ぬとせよ。それはそれで、よいのだ。ポルトガル人と闘って果てるのなら、それは価値あることではあるまいか。彼らは歴戦の勇士だ。カフル人に喰われて死ぬのとは、わけが違う。最後に〔言う〕。私は必ず闘い抜く。勝つにせよ、死ぬにせよ、その一瞬まで、闘う」

こうした言葉や、これに類したもろもろの道理を明言し、彼に侍る大身や重臣がみずからと同意見である、と確認すると、さっそく厳粛な宣誓の儀式が執り行なわれた。そこにおいて一同は、家郷を守り、みずからの王を守り、みずからの家族を守るため、争闘に<sup>たお</sup>斃れる、その一瞬まで戦うことを、誓った。宣誓の儀式とは、次章に見るとおりである。

### Falla do Rey de Ampâza

¶ *Bem vedes amigos quão incerta é nossa vida, e salvação nesta hora, porque se figimos para a terra firme havemos de ser roubados, e por ventura comidos, ou cativos dos cafres. Os vizinhos que temos dentro na ilha da cidade de Pate, e de Sio, certo é que nos não hão-de socorrer, nem ajudar, antes entregar aos portugueses, de quem são amigos. Polo que nos fica somente o remédio da espada, a qual há-de pôr em dúvida esta contenda entre nós e os portugueses, e se vencermos, ficamos com muita honra, e nossa cidade com nossas famílias, e fato seguro, e*

*ficamos então pondo os pés sobre os pescoços de nossos inimigos, e se morrermos, mas vale que seja pelejando com os portugueses, que são cavaleiros, que não comidos pelos cafres, e finalmente eu hei-de pelejar até vencer, ou morrer.* Ditas estas palavras, e outras semelhantes rezões, e certificado dos grandes, e principais vassallos que tinha estarem todos no mesmo parecer, ordenou-se logo um solene juramento, em que todos jurassem de pelejar em defesa da pátria, de seu rei, e de suas famílias, até morrer na contenda, o qual juramento se pode ver no capítulo seguinte.



p.128. 左段。Chande feitiçeyro.〔妖術師チャンデ〕

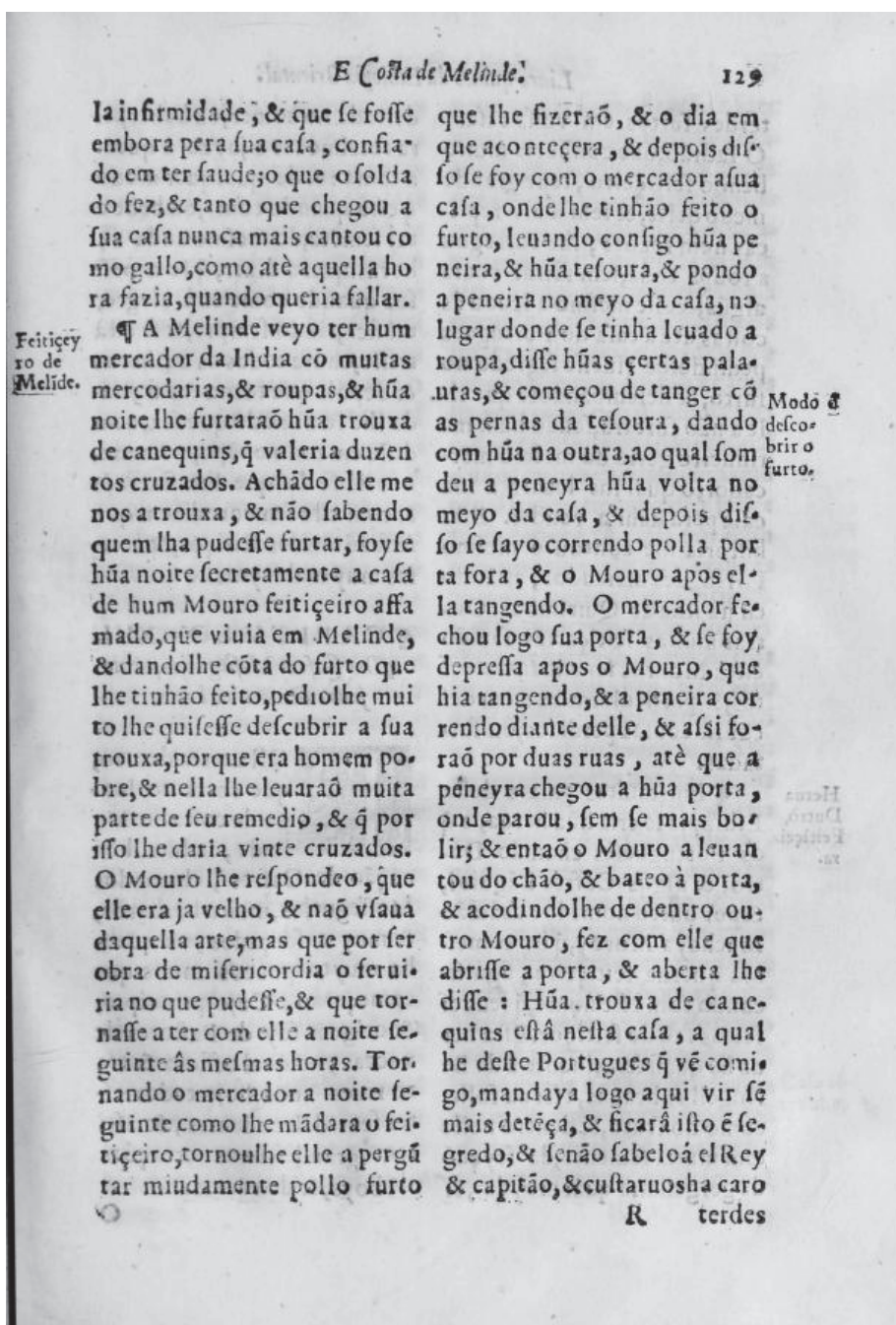
右段。Grande feitiçaria.〔偉大なる妖術〕

porque importaua muito, & q̄ lho não tomara por lhe fazer força, senão polla neçsidade que delle tinha, & q̄ logo lho mandaria tornar, & lhe pagaria seu frete, & o feruiria também outro dia no que se offerecesse. Com estas rezões, & palauras brandas, que o Feitor lhe disse, se quietou este feitiçeiro, & ficou satisfeito. E logo se foy com elle à praya, onde estaua o Pangayo posto à vella, sem se querer bolir do mesmo lugar, & disselhe em alta voz: Pangayo vay em bora onde te manda o Soñ Feitor. No mesmo ponto que o Mouro acabou de dizer estas palauras, partio logo o Págayo do lugar onde estaua como húa feta, & foy saindo polo rio fora, & fez sua viagem a saluamento.

Feitiços  
graciosos.

¶ Hum soldado Portugues fez hum agrauo a este Chande feitiçeiro, de que ficou muy magoado, mas elle por se vingar do soldado lhe fez hús feitiços graciosos, & foraõ taes, que todas as vezes que o soldado abria a boca pera fallar, antes que dissesse algũa palaura, lhe cantaua hum gallo na barriga, sayndolhe a voz do gallo polla boca tão claramen-

te, que se ouuia muito lóge, de que o soldado andaua tão envergonhado, que não ousaua sayr fora de casa, nê fallar com pessoa algũa, porque todos se rião delle, & lhe dauão matracas. Desta maneira andou mais de hum mes, & juraua mil juramentos, que auia de matar o Chande, solpeitando que elle lhe fizera algús feitiços, por onde padecia o mal que tinha. Andando desta maneira, foy aconselhado que se fosse a casa do Chande, & se lançasse a seus pés, pedindolhe perdão do agrauo que lhe fizera, & q̄ em satisfação disso, seria muy grande seu amigo dalli pordiãte, & o feruiria no que lhe fosse necessario, & que lhe pedia o curasse daquelle mal que tinha. E posto que o soldado estava indignado contra o feitiçeiro, & juraua de o matar, cõ tudo a neçsidade em que se via lhe fez mudar o parecer, & aceitou o conselho que lhe derão, & foy a casa do Chande, & pediolhe perdão, & remedio pera sua infirmitade. O Mouro aceitou sua satisfação, & disselhe, que elle não lhe tinha feito o mal que padecia, nem feitiço algum, mas que elle faria muyto pollo curar, & sarar daquel-



p.129. 左段。Feitiçeiro de Melide.〔メルンデの妖術師〕

右段。Modo de descobrir o furto.〔盗品を発見する方法〕

terdes furtos em vossa casa. O ladrão, que conhecia muito bem o feitiçeiro, teue grande medo d'elle, & sem mais replicas nem rezões, lhe entregou a roupa toda, sem faltar cousa alguma, & elle mesmo a leuou às costas até a casa do Portugues pedindolhe tinesse segredo no furto, & desculpandose que elle a não furtara, senão hum marinheiro gétio do mesmo mercador, o qual lho leuara a sua casa pera dahi a vender. Esta historia me contou o mesmo Portugues mercador, estando eu na ilha de Quirimba. Outras muitas feitiçarias fazião estes Mouros semelhantes a estas, & particularmente em descubrir cousas perdidas, ou furtadas.

Herua  
Dutrò,  
Feitiçei-  
ra.

¶ Em muitas partes desta Ethiopia se cria hũa herua, a q̃ os Portugueses chamão Dutrò, & algũs Cafres Bâguinî, & por outro nome lhe chamão Machaya Moroy, q̃ he o mesmo q̃ herua feitiçeira, significando com este nome, q̃ seus feitos são de feitiços. Esta herua he quasi semelhante â de Beringellas brauas, a fsi na folha como no fruto, & dentro nelle tem muita semente, da feyçãõ de gergelim: a qual moyda, &

deitada no comer, ou beber, tira totalmente o juyzo a quem a toma: & de qualquer modo q̃ está quando come, ou bebe a tal semete, do mesmo anda 24 horas: quero dizer, q̃ se a pessoa quando come está alegre, tal fica, rindo sempre, & se está triste, chora todas as 24. horas & depois que torna em si, nada lhe lembra do que fez, nem disse em todo o tẽpo, nem menos dà fẽ do que lhe fizeraõ: & com esta semente dizem que se fazẽ muitos feitiços, & coufas muy mal feytas.

¶ CAPITULO XIII.

¶ Dos Cafres Mosseguejos, & de seus costumes barbaros.

**R**olla terra dentro, que corre ao longo da costa de Melinde, habita hũa nação de Cafres, chamados Mosseguejos, muito barbaros, & muy esforçados, os quaes ha muyto poucos annos que começaraõ. Cujõ principio, & origem foy de Pastores de vaccas, no qual officio & tracto viuem inda hoje todos estes seus descendentes, & a fsi tem grandissimas creações de boys, & de vaccas.



CAPÍTULO XIII (Primeira Parte, Livro Quinto)

**De alguns mouros feiticeiros, que houve na costa de Melinde, e da erva dutró,  
a que os cafres chamam erva feiticeira.**

第13章(第一部第五卷) メリンデの海岸にいる幾人かの妖術師のムスリムに  
ついて。薬草のドウトローについて。この薬草をカフル人は  
エルヴァ・フェイティセイラ(妖術草)と呼ぶ

**妖術師チャンデ**

○今からおいおい語ろうとするこのメリンデ〔マリンディ〕の海岸に、偉大なる妖術師たちがいた。そして今も、ムスリムの妖術師が大勢おり、彼らはこの能力を誇りにしている。私がこの海岸にいたとき、ザンジバル島にひとりの偉い妖術師が住んでいた。その名をチャンデという。彼の名は広く知られ、悪魔のようなわざの使い手として、誰も彼の名を想い浮かべた。この人物に関し、次のようなことが語られていた。当地に住んでいた当海岸のカピタン配下のフェイトール〔商務官〕が、この人物——チャンデ——から船を一艘奪った。その狙いはこの船をメリンデへ送ることにあつた。チャンデの許しはなかつた。チャンデは浜へ出向いた。そこではフェイトールがメリンデへ送り出すため、今もこの船に荷積みをしつつある最中であつた。チャンデはフェイトールに向かい強く懇願した。どうか私の船を出さないで欲しい。外へ出さないでくれ。私には今すぐにもこの船に乗って旅をする必要があるのだ、と。しかしフェイトールはこの懇願をあざ笑い、チャンデの船を一向に手放そうとはしない。そしてこう言った。本船は、ポルトガル国王陛下の御用のため必要なのだ、と。この言い草は、フェイトールどもが力づくで事を運ぶとき、通常用いる強弁にほかならない。こうした所業は、連中がこの沿岸で同地のムスリムに日頃、仕掛けているものだ。フェイトールがみずからに向かって力づくの所業に出たことを見届けたチャンデは、自宅へ戻った。そして次のような呪文を唱えた。——わがパンガイオ船よ、お前は私の許しなしに港を出てはならぬ。にもかかわらず、フェイトールはパンガイオ船に荷を積み、水夫たちを乗船させ続けた。艀装を終えた後、碇を上げ、帆を張るよう命じた。ただちにそれは実行された。帆は、船尾から吹きつつあつた大いなる順風を豊かに孕んだ。しかしパンガイオ船はゆらりともせず、もといたところから一向に動こうとしない。こうして帆を上げたまま停止が続くこと、一時間以上。この事態に対し、フェイトールがあたふたと駆けつけた。その他のポルトガル人も、たまたまそこに居合わせたムスリムもやってきたが、見たこともないこの事件に驚嘆しない者はなかつた。

Chande feiticeyro.

¶ Nesta costa de Melinde, de que vou falando, houve grandes feiticeiros, e ainda hoje há muitos mouros, que se prezam desta habilidade. Estando eu nesta costa, morava na ilha de

Zanzibar um grande feiticeiro, por nome Chande, mui conhecido e nomeado por suas obras diabólicas. Deste me contaram, que tomando-lhe o feitor do Capitão da costa, que ali residia, ùa embarcação, pera lha mandar a Melinde sem sua licença, ele se foi à praia onde o feitor a estava carregando pera a mandar, e lhe pediu muito que não mandasse a sua embarcação, nem lha mandasse fora, porque tinha necessidade de fazer viagem nela muito cedo. Mas o feitor zombou disso, e não lha quis largar, dizendo que a havia mister pera o serviço d'el-Rei (capa com que estes ordinariamente cobrem muitas forças, que nesta costa fazem aos mouros dela). Vendo Chande a força que o feitor lhe fazia, foi-se pera sua casa, jurando que o seu pangaio não havia de sair do porto sem sua licença. Sem embargo disso, o feitor o ficou carregando, e aviando de marinheiros, e depois de aparelhado, mandou levar fateixa, e dar à vela, o que logo se fez, e a vela se encheu de vento mui bom que ventava em popa, mas o pangaio não se buliu, nem se moveu do lugar onde estava, e assim quedo esteve posto à vela mais de ùa hora, ao que acudiu o feitor, e outros portugueses, e mouros que ali se acharam, todos admirados do caso nunca visto.

#### 偉大なる妖術

居合わせたムスリムのひとりがフェイトールに言った。驚くには及ばぬ。パンガイオ船は、チャンデつまりその正当な持ち主の意思を汲まぬ限り、今の位置からはいっかな動かぬ、と。その理に服して、さしものフェイトールもチャンデの家へ出向き、チャンデに伏して懇願せざるを得なかった。どうぞあなたの持ち船であるパンガイオを賃貸してください。これをミンデに遣りたいのです。重大きわまりない業務であります。私は力づくであなたからパンガイオ船を取り上げたわけではありません。そうではなくて、この船がどうしても必要だったのです。ですから用が済めば、ただちにお返しするよう計らい、船賃も支払いましょう。そして機会があれば貴殿のお役にも立ちましょう、と。こうした道理によって、そしてフェイトールの語りかけた穏やかな言葉によって、妖術師チャンデは平静を取り戻し、満足の体を示した。そしてただちにフェイトールと連れだって浜へ向かった。そこにはパンガイオ船が帆を上げ停まっていたが、そこから動こうとする気配はまるでなかった。チャンデはパンガイオ船に大きな声で呼びかけた。「パンガイオよ。フェイトール殿の命ずるところへ向け出立せよ」と。ムスリムすなわちチャンデがこの言葉を言い終わったまさにそのとき、パンガイオ船はまるで放たれた矢の如く、停泊中の場を離れたのだ。そして河口に向かって河を出てゆき、無事、航海をやり遂げた。

#### Grande feiticeira.

Disse então um daqueles mouros ao feitor, que se desenganasse, porque o pangaio não se havia de bulir daquele lugar, sem vontade de Chande seu dono. Pola qual rezão o feitor se foi logo a casa de Chande, e lhe pediu muito quisesse fretar-lhe o seu pangaio, pera o mandar a Melinde,

porque importava muito, e que lho não tomara por lhe fazer força, senão pola necessidade que dele tinha, e que logo lho mandaria tomar, e lhe pagaria seu frete, e o serviria também outro dia no que se oferecesse. Com estas razões, e palavras brandas, que o feitor lhe disse, se quietou este feiticeiro e ficou satisfeito. E logo se foi com ele à praia, onde estava o pangaio posto à vela, sem se querer bulir do mesmo lugar, e disse-lhe em alta voz: *pangaio vai embora onde te manda o senhor feitor*. No mesmo ponto que o mouro acabou de dizer estas palavras partiu logo o pangaio do lugar onde estava como ãa seta, e foi saindo polo rio fora, e fez sua viagem a salvamento.

### 愉快なる妖術

○この妖術師チャンデがあるポルトガル人兵士から侮辱を受けた。そのためチャンデは非常に気分を害したが、しかしこの兵士に対する復讐は幾つかの洒落っ気のある妖術によって行なうことにした。その妖術とはずいぶん愉快なものであって、兵士が何かしゃべろうとして口を開けると、毎度、言葉を発する前に、腹中で鶏が鳴くのである。口から出る鶏の鳴き声はいとも明瞭であって、遠くからでもよく聞こえた。だから兵士は赤恥をかき続けるほかなかった。家を出たり誰かと話したりする勇氣は、とても出なかった。皆が兵士を笑いものにし、からかいの言葉を投げつけるからだ。このような按配で過ごすこと一ヵ月以上、チャンデをきつと殺す、との誓いを兵士は幾度も立てた。兵士は、チャンデこそ妖術を自分に仕掛けた張本人、俺の蒙っている苦しみはその妖術のせい、と、うたぐったのだ。このような調子ではあったが、兵士はチャンデの家へ出向くよう、注意を受けた。そしてチャンデの足もとに身を投げ出し、彼へ与えた侮辱に対する許しを乞うのがいい、と助言され、さらにまた、侮辱を与えた償いとして、これからはチャンデの大いなる友になり、困ったことが何かチャンデに生ずれば、お役に立とうと申し出、そのうえでチャンデに対し、今蒙っている災いから救い出してくれるよう、懇ろに願い出よ、と忠告されたのである。兵士は、妖術師チャンデに怒り心頭であつたし、チャンデを殺すとの誓いを立てていたのだが、己おのれの置かれている窮状に鑑み、従来の考えを変更せざるを得なかった。そして与えられた忠告を受け入れた。チャンデの家へ赴き、許しを乞い、みずからの奇病に対する癒しを施して欲しい、と願った。ムスリム——チャンデ——は兵士からの謝罪の言葉を受け容れ、こう言った。蒙っておられる災いだが、それは私の惹き起こしたのではない。あなたに妖術など仕掛けたことはない。しかしながら、あなたを癒すため、この奇病からあなたを救うため、できる限りのことはしてあげよう。そこで、だ。あなたのなすべきことだが、このまま家へ戻ればよろしい。ただしその際、健やかさが恢復すると堅く信じるように、と。兵士はただちにそれを実行した。家に戻るや、鶏まがいの鳴き声はもう出なくなった。そのときまでは、何かしゃべろうとすると、腹中で鶏が鳴いていたのだが。

Feitiços graciosos.

¶ Um soldado português fez um agravo a este Chande feiticeiro, de que ficou mui magoado, mas ele por se vingar do soldado lhe fez uns feitiços graciosos, e foram tais, que todas as vezes que o soldado abria a boca pera falar, antes que dissesse algũa palavra, lhe cantava um galo na barriga, saindo-lhe a voz do galo pola boca tão claramente, que se ouvia muito longe, de que o soldado andava tão envergonhado, que não ousava sair de casa, nem falar com pessoa algũa, porque todos se riam dele, e lhe davam matraca. Desta maneira andou mais de um mês, e jurava mil juramentos, que havia de matar o Chande, suspeitando que ele lhe fizera alguns feitiços, por onde padecia o mal que tinha. Andando desta maneira, foi aconselhado que se fosse a casa do Chande, e se lançasse a seus pés, pedindo-lhe perdão do agravo que lhe fizera, e que em satisfação disso, seria mui grande seu amigo dali por diante, e o serviria no que lhe fosse necessário, e que lhe pedia o curasse daquele mal que tinha. E posto que o soldado estava indignado contra o feiticeiro, e jurava de o matar, contudo a necessidade em que se via lhe fez mudar o parecer, e aceitou o conselho que lhe deram, e foi a casa do Chande, e pediu-lhe perdão, e remédio para a sua infirmitade. O mouro aceitou sua satisfação, e disse-lhe que ele não lhe tinha feito o mal de que padecia, nem feitiço algum, mas que ele faria muito polo curar, e sarar daquela infirmitade, e que se fosse embora pera sua casa, confiado em ter saúde; o que o soldado fez, e tanto que chegou a casa nunca mais cantou como o galo, como até àquela hora fazia, quando queria falar.

### メリンデの妖術師/盗品を発見する方法

○メリンデにインディアから商人がひとり、商品や布地のかずかずを携えてやってきた。ある夜、一梱<sup>こり</sup>のカネキン<sup>19</sup>が盗難に遭った。その価値は 200 クルザードほどであったろう。梱がなくなっていると気づいたものの、盗んだのは誰か心当たりはなかったので、商人は、ある夜、名だたる妖術師のムスリムのもとへひっそり出向いた。このムスリムはメリンデで暮らしていた。商人は盗難に遭ったことをムスリムに語り、強く懇願した。見えなくなってしまったカネキンの梱を捜し出してくれないだろうか。私は貧しく、あれこそが暮らしの糧の過半なのだ。取り戻してくれたら 20 クルザード差し上げよう、と。ムスリムは答えてこう述べた。私は高齢であり、もうそんな妖術は使えぬ。がしかし、これは慈悲のわざであるから、私にできうることがあるならお

---

<sup>19</sup> 原綴り canequim. 細く上質な綿糸を用い、細かい目で薄地に織った綿布。Dicionário Priberam da Língua Portuguesa によると、Tecido de algodão da Índia (インドの綿織物) とある。「金巾」という漢字を宛て日本語にも入った語彙。

役に立とう。あすの夜、もう一度、同刻限に、私のもとへ戻ってきなさい、と。指示どおり次の夜戻ってみると、妖術師は商人に対しもう一度、犯人不明の盗難について、それが起こった日について、細かに訊ねた。妖術師はこのあと商人と連れだって、盗みの行なわれた家へ出向いた。そのとき鍋一個に鉄一丁携えるのを、忘れなかった。そして家の中、しかも布地〔カネキンの梱が持ち去られたという場所に鍋を置くと、ある種の言葉を唱え、鉄の脚で——それをかちやかちや動かし——音頭をとり始めた。その音に<sup>ね</sup>応じて鍋は、家の真ん中をぐるりと一周、そのあと勝手に走り出して扉の外へ出た。妖術師はかちやかちや音頭を取りながら、鍋の後を追った。商人は扉を閉め、音頭を取りつつ進む妖術師と、その前を自走してゆく鍋の後を追った。ふたりはこうして街並みをふたつ通り過ぎた。やがて鍋はある家の扉に達し、停止した。もう動かなかった。妖術師は鍋を地面から持ち上げ、扉を叩いた。内部からムスリムらしき者が駆け寄ってくる。妖術師は扉を開けさせ、開くと、こう言った。カネキンの梱がこの家にあるね。その梱は一緒にやってきたこちら——ポルトガル人——の持ち物だ。梱をここへお持ち。ぐずぐずしてはいけない。この件は内密にする、国王にもカピタンにも知らせないでおく。盗品がおうちにあると、君たち、あとから高くつくよ、と。妖術師をよく知るこの泥棒は大いに恐れ、口答えも申し開きもせず、布地すべてを妖術師へ差し出した。出し渋りは何もなかった。泥棒自身がこの布地を背負うて、ポルトガル人の家へ向かった。そしてポルトガル人に頼んだ。この一件、どうか内密にして欲しい。そして弁解してこう述べた。盗んだのは私ではないのだ、ゼンチョ〔前出。異教徒〕の水夫が張本人なのです。私に属する輩ではあるが、こいつが転売をもくろんで布地を私の家へ持ち込んできたのだ、と。ここまでの話は、私がキリンバ島<sup>20</sup>にいたとき、当事者のポルトガル商人が私に語ってくれたものだ<sup>21</sup>。上記に類似するあれやこれやの魔術を、ムスリムたちははしてみせる。特に遺失物やら盗品を捜し出すに際して用いる

<sup>20</sup> 原語 ilha de Quirimba。現在モザンビーク共和国カーボ・デルガード州の沖合、インド洋に浮かぶ島。およそ 32 の島々からなるキリンバ諸島中の一島。

<sup>21</sup> “科学的”には信じがたい話であるが、説話の内容を帯びるこのエピソードとの同質性を連想させるストーリーなら、『信貴山縁起絵巻』「山崎長者の巻(飛倉の巻)」の一靈験譚に認めうる、と思考する。信貴山に堂を構える命蓮が、托鉢を求める鉢を、神通力を用いて、山崎の長者のもとへ飛ばす。長者は托鉢に応ずる気配を見せぬどころか、鉢を倉にしまい込み、扉に鍵さかかけてしまう。すると、倉は一尺ばかりも浮き上がり、鉢は倉からひとりでに外へ。倉は、鉢に支えられるように飛翔を始め、命蓮の住房のかたわらに落下する。長者の一行は、飛んでゆく倉を追い、信貴山へ。長者は命蓮に、倉を戻してくれるよう懇願する。命蓮いわく、倉そのものは返さぬが、中にあった大量の米俵は返還する、と。どのように運ぶのか、途方に暮れる長者に対し、命蓮は、まず米一俵を鉢の上に置くよう指示する。と、鉢は、残りの米俵とともに、飛翔を開始、空から、すべての米俵が、山崎の長者のもとへ続々戻る——というのが、同絵巻「山崎長者の巻(飛倉の巻)」の概要。サントスの記事と「飛倉」のエピソード。両者が、相互に内容的なつながりを有するわけではないが、単なる道具が、靈妙な能力を持つ人物から靈力を与えられ、不可思議な力を発揮する、という発想の類縁性に驚かされる。

魔法が、出色である。

Feiticeiro de Melide./Modo de descobrir o furto.

¶ A Melinde veio ter um mercador da Índia com muitas mercadorias, e roupas, e ãa noite lhe furtaram ãa trouxa de canequins, que valeria duzentos cruzados. Achando ele menos a trouxa, e não sabendo quem lha pudesse furtar, foi-se ãa noite secretamente a casa de um mouro feiticeiro afamado, que vivia em Melinde, e dando-lhe conta do furto que lhe tinham feito, pediu-lhe muito lhe quisesse descobrir a sua trouxa, porque era homem pobre, e nela lhe levaram muita parte do seu remédio, e que por isso lhe daria vinte cruzados. O mouro lhe respondeu que ele era já velho, e não usava aquela arte, mas que por ser obra de misericórdia o serviria no que pudesse, e que tornasse a ter com ele a noite seguinte às mesmas horas. Tornando o mercador a noite seguinte como lhe mandara o feiticeiro, tornou-lhe ele a perguntar miudamente polo furto que lhe fizeram, e o dia em que acontecera, e depois disso se foi com o mercador a sua casa, onde lhe tinham feito o furto, levando consigo ãa peneira, e ãa tesoura e pondo a peneira no meio da casa, no lugar donde se tinha levado a roupa, disse ãas certas palavras, e começou de tanger com as pernas da tesoura, dando com ãa na outra, ao qual som deu a peneira ãa volta no meio da casa, e depois disso se saiu correndo pola porta fora, e o mouro após ela tangendo. O mercador fechou logo sua porta, e se foi depressa após o mouro, que ia tangendo, e a peneira correndo diante dele, e assim foram por duas ruas, até que a peneira chegou a ãa porta onde parou, sem se mais bulir; e então o mouro a levantou do chão, e bateu à porta, e acudindo-lhe de dentro outro mouro, fez com ele que abrisse a porta, e aberta lhe disse: *Õa trouxa de canequins está nesta casa, a qual é deste português que vem comigo; mandai-a logo aqui vir sem mais detença, e ficará isto em segredo, e se não sabê-lo-á el-Rei e capitão, e custar-vos-á caro terdes furtos em vossa casa.* O ladrão, que conhecia muito bem o feiticeiro, teve grande medo dele, e sem mais réplicas nem rezões lhe entregou a roupa toda, sem faltar cousa algũa, e ele mesmo a levou às costas até a casa do português, pedindo-lhe tivesse segredo no furto, e desculpando-se que ele a não furtara, senão um marinheiro gentio do mesmo mercador, o qual lha levava a sua casa pera dali a vender. Esta história me contou o mesmo português mercador, estando eu na ilha de Quirimba. Outras muitas feiticiarias faziam estes mouros semelhantes a estas, e particularmente em descobrir cousas perdidas, ou furtadas.

#### 妖術草ドウトロー

○当エティオピアの多くの諸地方に、ある種の草が生育している。この草をポルトガル人はドウトローと呼ぶ。一部のカフル人はバンギニーと呼び、別名マチャイア・モローイともいう。こ

ジョアン・ドス・サントス『エチオピア・オリエンタル』（1609年、エヴォラ刊）を初版本テキストから訳注する試み

これはエルヴァ・フェイティセイラ〔妖術草〕というに等しい。この呼び名でもって、この草の効能が妖術そのものである、と示そうとするのだ。この草は葉といい実といい、野生の<sup>なす</sup>茄子に酷似している。その実の中に多くの種<sup>たね</sup>があり、その形状は<sup>ごま</sup>胡麻のようだ。この種をすり潰し、飲食物に投じたものを摂取すると、思慮分別は完全に奪われる。〔摂取する前の〕様態がどのようであれ、この種を食べたり呑んだりすると、判断力を失った状態が24時間続く。つまり、この種を食べたときその人が楽しげであれば、その状態のまま、にやにや笑うばかり。悲しげであれば、その後24時間は泣きっぱなし、だ。正気に戻っておのれが何をやらかしたのか、まるで憶えていないし、さっきまで笑いつめ泣きづめであったという自覚すらない。君はこれこれのことをされたと言われても、まるで信じようとしな。いろいろな魔法まがいの、実にみつともないぶざまも、この種<sup>たね</sup>の力を借りてやったりやらせたりできるという、もっぱらの噂だ。

Herua Dutrò feitiçeiro.

¶ Em muitas partes desta Etiópia se cria ãa erva, a que os portugueses chamam *dutró*, e alguns cafres *banguini*, e por outro nome lhe chamam *machaia moroy*, que é o mesmo que erva feitiçeira, significando com este nome, que seus efeitos são de feitiços. Esta erva é quasi semelhante à de beringelas bravas, assi na folha como no fruto, e dentro nela tem muita semente, da feição de gergelim, a qual moída, e deitada no comer, ou beber, tira totalmente o juízo a quem a toma; e de qualquer modo que está quando come, ou bebe a tal semente, do mesmo anda vinte e quatro horas; quero dizer que se a pessoa quando a come está alegre, tal fica, rindo sempre, e se está triste, chora todas as vinte e quatro horas e depois que torna a si, nada se lembra do que fez, nem disso em todo o tempo, nem mesmo dá fé do que lhe fizeram; e com esta semente dizem que se fazem muitos feitiços, e cousas mui mal feitas.

#### CAPÍTULO XIV\* (Primeira Parte, Livro Quinto)

\*初版本のローマ数字は誤って XIII と記される。

#### Dos cafres mossegejos, e de seus costumes bárbaros.

第 14 章(第一部第五卷) モッセゲージョと呼ばれるカフル人と彼らの野蛮な風習について

○メリンデの海岸沿いから内陸に向かい、モッセゲージョと呼ばれるカフル人の一種族が暮らしている。たいそう野蛮で蛮勇に富む彼らが、ここに住むようになったのはほんの数年前のことにすぎない。彼らの起源は牛飼いであり、彼らの子孫は皆、今もこのわぎで、これをなりわいとして生計を立てる。であるから彼らが養っている雌雄のウシはおびたしい数に上る。

彼らの主食はそうした雌ウシの出してくれる乳であり、雌ウシからは血を抜く作業を頻繁に行なう。雌ウシを窒息させないため、脂質〔過多〕で死なぬようにするためだが、そればかりではない。彼ら自身がその血に頼って生きるためである。この血から彼らはポタージュを作る。これを乳と混ぜ合わせたり、同一のウシの新鮮な糞と混ぜ合わせたりして作るポタージュだ。これらすべて一緒くたにし、直火で温めて飲む。このポタージュのおかげで筋骨は隆々となり、身体は強壯になる、と彼らは言う。

¶ Pola terra dentro que corre ao longo da costa de Melinde, habita ãa nação de cafres chamados Mosseguejos, muito bárbaros, e mui esforçados, os quais há muito poucos anos que começaram. Cujo princípio, e origem foi de pastores de vacas, no qual ofício e trato vivem ainda hoje todos seus descendentes, e assi têm grandíssimas criações de bois, e de vacas. O seu principal mantimento é leite das mesmas vacas, as quais também sangram muitas vezes, assi por lhes não abafarem e morrerem de gordas, como pera se sustentarem do próprio sangue, do qual fazem ãa potagem misturada com leite, e bosta fresca das mesmas vacas, e tudo isto junto, e quente ao fogo, o bebem, dizendo que os faz robustos e fortes.

### “重い”責務

○男の子は、7つか8つになると、頭を粘土でもって、ぴっちり覆わなくてはならない。粘土は、頭髮や頭皮に固着している。その固着ぶりは無類であって、この粘土は彼らにすれば、まるでもうひとつの頭皮、もしくはてっぺんが凛々しく装飾されたヘルメットのようなものだ。粘土に罅ひびが入ると、その上を別の柔らかい粘土で覆い直し、よりいっそうの丹精を込めて、手入れをやり直す。完璧に仕上がれば、大いに喜び、自画自讃する。この粘土製ヘルメットに、5～6 アラーテンの重し<sup>22</sup>をかけているカフル人が存在する。これを着けたまま眠るし、歩きもする。まるで頭に何も着けていないかのような風情だ。若者は、この粘土を頭から〔勝手には〕取り外せない。〔着用したままでは〕長老の寄り合いで発言できないし協議の席にも加われない。ただそれは、いくさなり正当な争いで、人を殺めずあやにいるあいだのことだ。あらゆる若者はだから、いくさあれかし、とうずうずしている。戦いで敵を殺し、おのれが豪勇にして高貴の男であると誇示するとともに、実際そのような男へ成り上がるためだ。確かに敵を殺したことを知らしめるため、争いが終わると、首領の前へ、殺した男の明白な証拠カヴァレイロ（男性器）を持参するよう、若者は義務づけられる。この証拠をより多く持参した連中こそ、より偉大な騎士と見なされ、い

<sup>22</sup> 原語 cinco ou seis arratês de peso. arratem は arrátel に同じ。古い重量単位。1 アラーテン = 459 グラム (Priberam Dicionário da Língua Portuguesa)。



ジョアン・ドス・サントス『エチオピア・オリエンタル』（1609年、エヴォラ刊）を初版本テキストから訳注する試み

くさで豪勇を示した者、ゆえに名誉と賞讃にいつそう値する輩、ということになる。敵を殺めて豪勇を示したと認められると、<sup>カピタン</sup>首領はその若者に<sup>カヴァレイロ</sup>騎士のしるしを授ける。すなわち若者の頭から粘土を取り外してやるのだ。以後彼らは、別格の騎士(outros caualleiros)として、もろもろの特権を享受することになる。

### Pesada obrigação

Os machos de idade de sete, ou oito anos para cima são obrigados a trazer a cabeça coberta de barro pegado nos cabelos, e no couro da cabeça, de tal modo que lhes fica como outro casco, ou capacete mui bornido por cima, e quando se greta o barro, tornam-lhe a dar com outro mole por cima, e a consertá-lo de novo com muito primor, estimando muito sua perfeição. E há cafre que traz neste capacete de barro cinco ou seis arrátens de peso, e com ele dormem, e andam, como se não trouxeram nada. Este barro não podem tirar da cabeça, nem falar em ajuntamento de homens velhos, nem entrar em conselho até que não matem algum homem em guerra, ou briga justa. Pola qual rezão todos os mancebos pretendem que haja guerras, pera nelas se mostrarem, e fazerem cavaleiros, e nobres, matando algum inimigo nelas. E pera se saber que o mataram, são obrigados depois da briga acabada, levar diante de seu capitão um sinal evidente do homem que mataram; e os que levam mais sinais destes, são tidos por mores cavaleiros, e esforçados na guerra, e por isso mais honrados, e estimados. Pola qual rezão logo o capitão os arma cavaleiros, tirando-lhes o barro da cabeça, e dali por diante ficam gozando dos privilégios dos outros cavaleiros.

○この野蛮人がこのようなことをやってのける主たる動機、それは何より、敵から恐怖されることだ。彼らがいくさ場に出てゆくときの喜びようといったらなく、<sup>おの</sup>己が命運を賭け敵の命を奪うことにいそむ。結果としてもたらされる名誉のためだ。名誉を求める彼らの野心は尋常ではなく、そのためとあらば、彼らは内輪でも争いを繰り広げる。敵の命を奪うという目的を果たすため、傷つき倒れた敵のもとへ誰が最初に辿り着くか、皆、血まなこだ。他人に譲って誉れを横取りされるなど、決してあってはならないのだ。

¶ A principal causa porque estes bárbaros fazem isto, é por serem temidos de seus inimigos, vendo com quanto gosto entram na guerra, apostados a lhes tirar a vida, pola honra que disso lhes resulta, da qual são tão ambiciosos que pelem uns com os outros, em porfia de quem há-de chegar primeiro ao inimigo que cai ferido para este efeito, não dando lugar pera que outrem lhes tire esta honra.

奇妙な事件/モッセゲージョ族の獣性

○マコロエ島〔モサンビーク共和国北部沖合に浮かぶキリンバ諸島の一島〕の領主は私に、こんな話をしてくれた。キリーフェ——キリーフェについては後に論じるであろう——のいくさ場にあつたとき、彼はふたりのモッセゲージョ族が、ひとりのムスリムにがっちり食らいついでているのを見たことがある、と。ムスリムは重傷を負って地面に伏していた。モッセゲージョのふたりは、どちらが〔先に〕ムスリムを斬るかをめぐり、熾烈な言い争いのただ中であつた。一方ムスリムは、まだ息があり、ふたりの攻撃からできる限り身を守ろうと必死であつた。ついにモッセゲージョのうち、腕力の強いほうは、もくろみを成就した。この争いに勝ちを制したほうは引き続き、他の仲間が血まなこになって繰り広げている争闘の場へ転進していった。これが一段落すると、力自慢のモッセゲージョは、みずからの首領の前に進み出、いくさ場で人を殺めたその証拠〔男性器〕を披露した。彼はまさにそのゆえをもって、いくさ場で同じことをやってのけた仲間多数とともに、真<sup>カヴァレイロ</sup>の戦士のしるしを授けられた。

#### Caso estranho / Brutalidade dos Mosseguejos.

¶ O senhor da ilha de Macoloé, me contou que achando-se ele na guerra de Quilife (de que abaixo tratarei) vira estar dous mosseguejos pegados em um mouro, que caíra no chão mal ferido, em grande porfia sobre qual deles o cortaria primeiro; e por outra parte o mouro, que estava ainda vivo, defendendo-se deles o melhor que podia. E finalmente um dos mosseguejos que mais força teve levou o que pretendia, e depois disso tornou à briga em que andavam os mais companheiros, a qual acabada, se foi diante do seu capitão, e lhe mostrou o sinal de ter morto homem na guerra, e foi armado cavaleiro por isso, com outros muitos, que fizeram o mesmo na mesma guerra.

○これらモッセゲージョ族ときたら、その野蛮さは言いようもなく、おのれの豪胆ぶりを示す証拠物件〔男性器〕を、後生大事に保存する。後日催される祝祭の日に、そうした証拠を披露して一同の喝采を浴びようとするのだ。ハレの日にこそ彼らはみずからの蛮勇を示そうと望み、心の準備をしてくだんの証拠を持ち込む。そうしてその場の一同にみずからの蛮勇と敢為の精神を知らしめ、それを拠りどころに皆の賞讃を受けようとするのだ。そのような獣性を、男どもの妻も平然と受け入れている。祝祭やら舞踏の場に妻が〔夫と〕たまたま同席すると、彼女らも、名誉あり勇気に溢れた男の妻として、賞讃を受け広く認知されるのである。そのほかにも、モッセゲージョというカフル人の種族の獣性のかずかずなら、私には幾らでも語る事ができる。上に述べたような事柄ばかりか、そのほかの風俗といつか悪習についてそう言えるのだが、私は敢えて口を閉ざす。口にするのも憚<sup>はばか</sup>られる、到底信じがたい風俗であり悪習であるからだ。

¶ Tão bárbaros são estes mosseguejos, que guardam estes sinais de sua valentia, para depois

se honrarem com eles nos dias de suas festas, em que se querem mostrar, levando-os consigo, para que todos conheçam por eles sua valentia, e cavalaria, e sejam estimados por isso. A mesma brutalidade permitem a suas mulheres quando se hão-de achar em algũas festas, ou bailos pera lá serem estimadas, e conhecidas por mulheres de homens honrados, e esforçados. Outras muitas brutalidades pudera contar desta nação de cafres, assi nesta matéria, como em outros costumes, e abusos que calo, por serem mui desonestos, e increíveis.

○アベシーン〔アビシニア〕人や、彼らの隣人である一部ムスリムや、当エチオピアのゼンチョのガーラス<sup>23</sup>。彼らは皆、モッセゲージョと同じ習俗を有する。このことは遣外使節団長ドン・ジョアン・ベルムデス<sup>24</sup>が、プレステ・ジョアンに関して作成した書物において言及するとおり。つまりこの習俗は、当エチオピアの幾つかの種族が共有するものなのだ。これと似た別の話なら、聖書にもその例を見出しうる。それは『列王記上』〔実際は『サムエル前書』18章〕において。次のような話だ。サウル〔イスラエル王国最初の王。紀元前1000年頃に没〕はダヴィド〔ダヴィデ。イスラエル王。在位紀元前1000頃～961〕に対し、その娘ミチョール〔ミカル。サウルの次女〕をダヴィドに嫁がせる条件として、ダヴィドがフィリステウ〔ペリシテ〕人をいくさで殺し、その陽皮〔男性器の包皮〕を100枚持参するよう命じた。ダヴィドはサウルのため、陽皮200枚を持ち帰った。サウルがダヴィドに下した命を、ニコラウ・デ・リーラ〔ニコラウス・リラス。1270～1349。フランシスコ会士。中世フランスの神学者にして聖書研究者〕は解説してこう述べる。——ダヴィドがいくさで殺めたのはエブレウ〔ヘブライ〕人ではなく、フィリステウ〔ペリシテ〕人である。ダヴィドがサウルの命令を果たしたか否かは、ダヴィドが持ち帰る〔陽皮という〕証拠によって、一目瞭然となる。エブレウ人なら割礼を施しているが、フィリステウ人はそうではない。さらに言えば、サウルは、フィリステウ人がダヴィドに対して懐く憎悪を、こうした手段で掻きたてようとしたのだ。フ

---

<sup>23</sup> 原綴り Galas. *Dicionário Priberam da Língua Portuguesa* によると、常に複数形で用いる男性名詞。Povos da fronteira da Abissínia (アビシニア辺境のもろもろの民)の義。

<sup>24</sup> ガリシア生まれのポルトガル人。1520年に使節団を率いてエチオピアを訪問。かの地で囚われの身となり、エチオピア皇帝の使者として、ポルトガルへ帰還することを許される1536年まで抑留される。ゴア、ふたたびエチオピア、ローマでも活動し、1570年リスボアで没。エチオピア皇帝がポルトガルへ送った使節の顛末を記した次の書物が、サントスの言及するものと思われる。Esta he hua breve relação da embaixada que o Patriarcha D. João de Bermudez trouxe do Imperador de Ethiopia chamado vulgarmente Preste João ao christianissimo & zelador da fee de Christo Rey de Portugal dom João o terceiro deste nome: dirigida ao mui alto & poderoso, de felicissima esperança, Rey tãbem de Portugal dom Sebastião, o primeiro deste nome. Em a qual tãbem conta a morte de dom Christoum da Gama: & dos successos que acontecerã aos portugueses que forão em sua companhia. Em Lisboa, em casa de Francisco Correa, Impressor do Cardeal Infante. Anno de 1565. 80 f. (reimpressa em Lisboa, 1875)

イスラエ人は割礼という習慣を、<sup>だかつ</sup>蛇蝎の如く忌み嫌うから、みずからに割礼を迫ってきたダヴィドの殺害をフィリステウ人が画策するよう、サウルは〔暗に〕仕向けたのだ、と<sup>25</sup>。上述のとおり、のちにサラマン〔ソロモン。イスラエル王。在位紀元前 961～922。諸説あり〕が、女王サバ〔シバの女王〕とのあいだに儲けた子〔エチオピア初代の王。メネリク一世〕が当エチオピアの統治に赴いたとき、この人物があちら〔イスラエル〕からこの習俗〔割礼〕を持ち込み、当エチオピアで行なわれるよう命じたのではないか、とする推測には蓋然性がある。

¶ Os abexins e alguns mouros seus vizinhos e os galas gentios desta Etiópia, todos têm este mesmo costume dos mosseguejos, como refere o Patriarca D. João Bermudes, no livro que fez do Preste João. De modo que deste costume usam algũas nações desta Etiópia. Outra cousa quasi como esta se acha na Sagrada Escritura, no I. *Livro dos Reis*, onde se conta que Saul pediu a David por lhe dar sua filha Michol em casamento, lhe trouxesse cem prepúcios de filisteus, que matasse na guerra, e ele lhe trouxe duzentos. O que Saul fez (como diz Nicolau de Lira explicando este lugar) assi porque este sinal se conhecesse serem filisteus os que David matara na guerra, e não hebreus, que eram circuncidados, como também por acrescentar o ódio dos filisteus contra David, e eles lhe procurassem a morte, porquanto os circuncidava, cousa que eles grandemente abominavam. E como depois o filho de Salamão, e da Rainha Sabá veio reinar nesta Etiópia (como já disse) cousa provável é que traria de lá este costume, e o mandaria usar nesta Etiópia.

---

<sup>25</sup> 『サムエル前書』18章には、ペリシテ人に対し軍功を重ねるダビデを妬み、これを陥れようとするサウルの策略と、それに対するダビデの行動が、概略次のように述べられている。

サウルは自分の手でダビデを殺すのではなく、ペリシテ人の手を借りてダビデを殺させたいと考えた(18節)。サウルは、その計画を実行するため、サウルの戦士として「主の戦い」を実行するなら、長女メラブを与えようと、ダビデに約束する(17節)。王の婿になることを辞退したダビデであるが、しかしサウルの命令には忠実に従い、要求どおりの軍功を上げる。ところがサウルは、長女メラブを、メハラ人アドリエルに嫁がせてしまう。サウルは、ダビデを何としても、もっと危険な戦場へ送り、さらに難しい条件を課して、ペリシテ人の手を借りてダビデを殺す機会をうかがう。やがてその機会が巡ってくる。次女ミカルがダビデを愛している、と聞きつけたサウルは、ミカルを嫁としてダビデへ与えようと伝えた。ダビデは、王の娘へ贈る結納金が用意できないと、サウルの申し出を辞退する。しかしサウルは述べた。そのような結納金などなくてもよい。王の敵への報復のしるしとして、ペリシテ人の「陽皮百枚」を持ち帰れ。されば汝をわが婿にしよう、と(25節)。

上記の申し出はしかし、ペリシテ人の手を借りてダビデを殺すための口実にすぎなかった。サウルがダビデに持ち帰るよう求めたのは、ペリシテ人の耳でも鼻でもなく、「陽皮」(男性器の包皮)である。この要求は、割礼なき民、ペリシテ人を辱めるための「主の戦い」(17節)であるという意味合いを含む。その意義を肯定的に理解したダビデは、王〔サウル〕の婿になることはよいことだ、と判断、ペリシテ人を討ち取るいくさに出かけ、サウルに要求されたその倍の「陽皮二百枚」を持ち帰る。それゆえサウルは、約束どおり、娘ミカルを、軍功著しいダビデへ与えざるを得なくなる。ペリシテ人の手を借りてダビデを殺す、という計画はこうして頓挫、サウルは、ダビデを正当な王位継承者の地位へ近づけることに、結果的に手を貸すことになる。

## CAPÍTULO XV\* (Primeira Parte, Livro Quinto)

\*初版本のローマ数字は誤って XIII と記される。

### De duas vitórias que el-Rei de Melinde alcançou d'el-Rei de Quilife, e do de Mombaça, com a ajuda dos mosseguejos e do Capitão da costa.

第15章(第一部第五卷) メリンデ王が、モッセゲージョ族、および沿岸〔行政を担うポルトガル人〕カピタンの助力により、キリーフェの王から、そしてモンバーサの王から、それぞれ勝ち取った勝利について

#### メリンデの敵、キリーフェ/キリーフェとの争闘

○主の年の1592年、私が当メリンデ沿岸にいたとき、メリンデ王がふたつの勝利を勝ち取った。ひとつは、キリーフェの王から勝ち得たそれであり、もうひとつは、モンバーサの王——モンバーサの王はキリーフェの王と縁続きだ——から勝ち取ったそれだ。ふたつの勝利に際し、メリンデ王は、メリンデ沿岸〔の行政にあたるポルトガル人〕カピタンおよびポルトガル人兵士らの助力、さらには、彼らの隣人であり味方であるモッセゲージョ族の加勢を得た。キリーフェとは〔元来〕、モンバーサとメリンデのあいだに位置する河〔の名称〕だ。キリーフェ王の地位にあるのは、ムスリムの某であり、彼はモンバーサ王と縁続きだ。メリンデのムスリムらにとり、キリーフェ王は悪しき隣人そのものであった。それはキリーフェ王がポルトガル人に対してだならぬ嫌悪感を懐いているからだ。キリーフェ王は、手下を<sup>そそのか</sup>唆し是認を与えては、ポルトガル人に対する暴力や侵害を欲しいままにやらせている。そのありさまは目に余るものであり、召使いの若者や黒人女で、メリンデの街に近接する森へ薪探しに入ってゆく度胸のある者など、いなかった。森の中では、キリーフェの連中が<sup>まき</sup>跳梁し、<sup>ちようりょう</sup>彼らによる強奪や、傍若無人な振舞いが跡を絶たないのだ。メリンデ王は、キリーフェの連中から日々こうむる屈辱と、無数の損害に直面し、この一件を何とかしてもらえぬかと、当海岸〔で行政を担うポルトガル人〕カピタンに相談を持ちかけた。両者はキリーフェ勢に対し、いくさを仕掛けることで合意、受けた侮辱のかずかずに復仇しようと決意した。このねらいを実行に移すため、両者は必要なことがらを協議し、メリンデに居合わせたポルトガル人やムスリムを召し出した。併せてモッセゲージョの連中も、呼び寄せた。彼らにポルトガル人とムスリムの手助けをさせるためである。モッセゲージョらは、〔メリンデ勢の〕要請にただちに応じ、皆、キリーフェへやってきた。彼らはキリーフェで〔キリーフェ〕王の姿を認めた。王は、配下とともに、塹壕に潜み、態勢を強化して待ち構えていた。キリーフェ王は、〔メリンデ勢が〕来襲するという知らせを、あらかじめ

め掴んでいたのだ。かくして[メリンデ勢と]キリーフェ勢は激突、彼らのあいだで残忍かつ激  
烈な白兵戦が始まった。戦いでは、[両軍とも]一兵残らず、はなはだ勇敢に戦った。キリーフ  
ェ勢の戦いには、故郷や一族を守るという名分があったものの、攻撃を繰り返す士気の高さと  
勇猛さにおいて、メリンデ勢はキリーフェ勢より一枚上であった。ほどなくキリーフェ勢は、メ  
リンデ勢に背を向け、敗走の余儀なきに追い込まれた。追い詰められたキリーフェ勢の狼狽ぶ  
りは、見るも無残であり、彼らの大半は[キリーフェの]街へ向かって敗走を重ね、周囲の塹壕  
に搦め取られた。みずからが塹壕に嵌め込み仕組んでいた木製や鉄製のエストレーペ<sup>26</sup>  
なりアブローリョ<sup>27</sup>のため、身動きがとれなくなってしまうのだ。もとはと言えば、メリンデ勢を  
串刺しにするための仕掛けであったのだが、こうしてキリーフェ勢はほぼ全員、殺されるか遁  
走した。ほかならぬキリーフェ王も運命を共にした。この勝利を見届けて、メリンデ勢は[キ  
リーフェの]街を略奪、街から多くの戦利品<sup>28</sup>を持ち出し、俘虜を連れ出した。その後メリンデ勢  
は、[キリーフェの]街を更地同然になるまで破壊、意気揚々、メリンデへ帰還した。意気揚々、  
というのは、勝ち得た勝利のゆえではあるが、何より、キリーフェという厄介な隣人にして仇敵  
の圧迫から、ようやく一息つくことができたからだ。この戦いから辛うじて命を落とさなかった少  
数のムスリムは、尾羽打ち枯らし、モンバーサへ逃亡した。

Quilife. Reino inimigo de Melinde. /Briga de Quilife.

¶ No ano do Senhor de 1592, estando eu nesta costa, alcançou el-Rei de Melinde duas  
vitórias d'el-Rei de Quilife e d'el-Rei de Mombaça seu parente, com ajuda do Capitão da costa, e  
seus soldados portugueses, e com ajuda dos mosseguejos seus vizinhos, e amigos. Quilife é um rio  
que está entre Mombaça e Melinde, de que era rei um mouro parente d'el-Rei de Mombaça, o qual  
fazia tão ruim vizinhança aos mouros de Melinde, em ódio dos portugueses, que consintia a seus  
vassallos fazerem-lhe mil forças, e agravos. E era isto tanto que os moços, e negras de serviço não  
ousavam ir aos matos que estão junto da cidade a buscar lenha, porque neles os salteavam,  
roubavam, e espancavam os de Quilife. Vendo el-Rei de Melinde tanto desaforamento, e tantos  
agravos, quantos cada dia recebia dos Quilife, consultou este negócio com o Capitão da costa, e

<sup>26</sup> 原綴り estrepes. 先を鋭く切った鉄や木、もしくは管状植物(竹など)の棒を二列に並べたいくさの仕掛け。ほぼ全  
体を地中に埋めて隠し、敵の騎馬隊もしくは歩兵隊の進軍を困難ならしめるもの(*Dicionário Priberam da Língua  
Portuguesa*)。古代・中世の日本で用いられた「逆茂木<sup>さかもぎ</sup>」は材料が植物であり、地中に埋めて用いられたわけではない  
ようであるが、機能としてはエストレーペに類似する。

<sup>27</sup> 原綴り abrolhos. 前注エストレーペとほぼ同義(*ibid.*)。

<sup>28</sup> 原綴り despojos. 元来は「残りもの」のほか「食肉に供される、屠殺済みの四足獣」を指す(*ibid.*)。ここでは、キリー  
フェの街に残された「食糧を含む戦利品一般」を指すか。

assentaram ambos de lhes fazer guerra, e tomar vingança destas afrontas. E pera este efeito negociaram as cousas necessárias, e ajuntaram os portugueses, e mouros, que havia em Melinde, e juntamente mandaram chamar os mosseguejos, pera que os viessem ajudar, o que eles logo fizeram, e todos juntos foram a Quilife, onde acharam o rei com sua gente entranqueirado, e fortificado, porque já tinha notícia de sua ida. Tanto que os de Melinde chegaram, foram cometendo a cidade, e os de Quilife lhes saíram ao encontro, e começaram ùa cruel, e travada briga, em que todos pelejaram mui esforçadamente. Porém inda que os de Quilife pelejavam por defender sua pátria e famílias varonilmente, contudo os de Melinde os cometeram com tanta vantagem de ânimo, e esforço, que em breve tempo lhes fizeram virar as costas. E foi tanto o aperto em que os puseram, que os mais deles indo fugindo para a cidade, se meteram em ùa estacada, onde se encravaram nos estrepes, e abrolhos de pau, e ferro que ali tinham metido, e ordenado, pera os de Melinde se espetarem. E neste passo foram mortos, e desbaratados quasi todos, juntamente com o mesmo Rei de Quilife. Alcancada esta vitoria, saquearam os de Melinde a cidade, levando dela muitos despojos, e cativos, e depois disso a puseram por terra, e se tornaram pera Melinde mui contentes, assi pola vitoria que tinham alcancado, como por estarem desapressados de tao ruins vizinhos, e inimigos. Alguns mouros, que puderam escapar da briga, fugiram pera Mombaca desbaratados.

### モンバーサ王、メルンデに戦いを仕掛ける/モンバーサ王、(メルンデ勢に)撃破さる

○キリーフェの街の破壊と、その街の王および王の家来たちの死が、モンバーサ王の耳に入ると、一族や友を失ったモンバーサ王はただならぬ悲しみに暮れた。ただちにメルンデ王に対する復讐を決意した。これをやり遂げるため、モンバーサ王が駆り集めたムスリムの臣下、さらにその朋党はその数 5000 を超えた。が彼らは、駆り集められはしたものの、内心は不承不承であった。誰ひとり、メルンデのムスリムといくさなど、したくはなかつたのだ。それはメルンデのムスリムと行動をともにしていたポルトガル人を念頭に置いてのことであった。ポルトガル人と争ってもろくな結果にはならぬ、と彼らは気づいており、それゆえ、このいくさとは何とか関わり合いにならぬよう、手を尽くした。しかしモンバーサ王は苦悩しつつも、メルンデに王に対し遂げようとする復讐への激しい願いに燃えていた。だから、ひとたび懐いた意志を放擲するわけにはゆかなかつた。みずから[先頭に立ち]陸路、行軍したが、何とか言うことを聞かせ、無理に駆り集めた配下を引き連れてのそれであった。このようにしてモンバーサ王はモッセゲージョ族の住む土地へ達する。モッセゲージョはメルンデ王の味方だ。モンバーサ王は露営を行ない、まずこの野蛮人と一戦を交え、これを撃破しようと決意した。モンバーサ王の

理解によれば、ここより迂闊に先へ進めば、モッセゲージョに背後を衝かれる<sup>おそ</sup>恐れがある。そうなればモッセゲージョはみずからに大きな災厄をもたらすだろう。なにしろ彼らモッセゲージョはメルンデ王の友人、確実にメルンデ王の救援と加勢へ向かうだろう、と。事実それは、そのあたりヘジンバ族が襲来してきたときにも、モッセゲージョがやったことだ。そのとき、モッセゲージョの援助によって、ジンバ族は打ち破られ<sup>せんめつ</sup>殲滅された。メルンデ王が上述の勝利を手中にしたのは、まさにモッセゲージョの加勢あってこそであった。もろもろの事理を踏まえ、モンバーサ王は逸早く戦闘態勢に入り、モッセゲージョに対し戦いを仕掛けた。一方、モッセゲージョも、モンバーサ王の襲来を知るや、これまた素早く準備を整え、モンバーサ王との会戦に打って出た。彼らの勇猛ぶりはいつもどおりであり、攻撃の苛烈さは格別であった。初期の会戦で、[モンバーサの]ムスリム勢は大半が潰走に追い込まれた。いくさ場へやってきたのは駆り立てられてであったから、無理もなかった。辛うじて戦陣に残ったのは、モンバーサ王、その3人の子、さらに身分あるムスリム数人、というありさまであった。こうした連中はさすがに、恥を知るところがあったか、戦場に踏みとどまり、逃亡しはしなかった。彼らは皆、モッセゲージョらと戦い、勇士として死ぬ道を選んだ。野蛮人ども[モッセゲージョ族]は戦果のさらなる拡大を求め、敗走者に手をかけうる地点へ到る。飽くなき殺戮を重ねつつ、彼らはついにモンバーサの領域に入り、そこからモンバーサ島へ渡った。同島には何ら抵抗を受けることなく進入、多くの婦女子と老人を俘虜にした。彼らは島の密林へ逃げるができなかったのだ。モッセゲージョらは、モンバーサ市の制圧後、男の子をひとり捕らえた。島に残っていたモンバーサ王の子だ。要人と思われる連中も片っぱしから取り押さえ、島の港で見つけた舟艇2艘に全員を押し込めた。モッセゲージョたちは、彼らに警護の兵をつけ、こう命令した。メルンデへ赴き、メルンデ王へ恭順の意を示し臣下の礼をとれ、と。モッセゲージョからすると、メルンデ王はこれからみずからの王とも主人ともなるべき人物だ。モッセゲージョらは伝言をもって、メルンデ王へ伝えた。——王よ、モンバーサを占拠しにお出ましく下さい、我ら当市をすでに平定しております、と。モッセゲージョらはさらにメルンデ王へ、尊大なるモンバーサ王へみずからが仕掛けたいくさが首尾よく運んだことを語ったうえ、我ら[モッセゲージョ]は本島に踏みとどまり、王[メルンデ王]がこの街の占拠にお出ましになるのを鶴首している、と申し送った。

El Rei de Mõbaça faz guerra a Melinde. /O Rey de Mõbaça desbaratado.

¶ Sabida por el-Rei de Mombaça a destruição da cidade de Quilife, e morte do rei dela, e de seus vassallos, sintiu grandemente tal perda de parentes, e amigos, e logo determinou tomar vingança d'el-Rei de Melinde. E pera isso ajuntou passante de cinco mil mouros seus vassallos, e vizinhos, quasi contra vontade de todos eles, porque nenhum queria pelear com os mouros de Melinde, por respeito dos portugueses, que estavam em sua companhia, dos quais entendiam que



não haviam de levar a melhor, e por isso todos faziam muito por se escusar desta guerra. Mas o rei que estava magoado, e tinha os desejos mui acesos da vingança que pretendia tomar de Melinde, nunca quis desistir de seu intento; antes logo se pôs a caminho por terra, indo marchando com sua gente ordenada e quasi forçada; e desta maneira chegou às terras dos mosseguejos amigos d'el-Rei de Melinde, onde assentou seu arraial, e determinou pelejar primeiro com estes bárbaros, e desbaratá-los, porque entendia mui bem que se passasse avante, e lhes ficassem nas costas, que lhes poderiam fazer muito mal, por serem amigos d'el-Rei de Melinde, e era certo que o haviam de socorrer, e ajudar, como tinham feito no tempo que ali foram os zimbas, com cujo socorro foram destruídos, e desbaratados, ficando el-Rei de Melinde vitorioso, como fica dito. Polas quais razões se pôs logo em feição de pelejar, e representou batalha aos mosseguejos, os quais tanto que souberam de sua vinda também fizeram prestes saindo-lhe ao encontro como esforçados que são, e com tanto ímpeto, que logo dos primeiros encontros fizeram fugir a mor parte dos mouros que vinham a esta guerra forçados, ficando somente no campo el-Rei de Mombaça, com três filhos seus, e alguns mouros fidalgos, que com vergonha se deixaram ficar, e não fugiram, os quais todos ali morreram como esforçados pelejando com os mosseguejos. E prosseguindo estes bárbaros a vitória, foram no alcance dos que fugiam, matando sempre neles ate às terras de Mombaça, e dali passaram à mesma ilha de Mombaça, onde entraram sem haver resistência algũa, e cativaram muitas mulheres, mininos, e velhos, que não puderam fugir para os matos da ilha. Depois que foram senhores da cidade, tomaram um minino filho d'el-Rei de Mombaça, que ficou na ilha, e a gente principal que puderam haver às mãos, e meteram todos em duas embarcações que acharam no porto da ilha, e puseram-lhe gente de guarda e mandaram que fossem a Melinde dar obediencia e vassalagem ao Rei de Melinde, que havia de ser dali por diante seu rei, e senhor. E mandaram dizer ao mesmo rei, que viesse tomar posse de Mombaça, que eles tinham ganhado, contando-lhe o mais sucesso da guerra que tiveram com o soberbo Rei de Mombaça, e como ficavam na ilha esperando que fosse tomar posse dela.

#### モンバーサに対する勝報, メリンデへ届く

○ところがである。メリンデ王の思惑は、モッセゲージョのそれとは、いささか異なっていた。メリンデ王はみずからの街から動かぬつもりであった。メリンデ沿岸〔の行政を統べるポルトガル人〕カピタンにしても、彼はそのときそこに居合わせたポルトガル人やムスリムとともに戦闘準備を整え、モンバーサ王の来襲を、今や遅しと待ち受けていたのだ。彼らの観測では、モンバーサ王は陸路を伝い、十分に武装したうえでメリンデを襲うはずであった。〔メリンデへ向

かう)道中、モンバーサ王がモッセゲージョと激突した結果その身にふりかかった出来事など、ミンデ王はまだその知らせを得ていなかった。だからこそミンデ勢は、モンバーサ王が来襲するや、ただちにこれと戦闘に入るよう怠りなく準備を進めてきたのだ。このように敵襲を待ち受けていると、[案に相違して]ミンデの港にはナヴィオ船 2 隻がやってきた。これらのナヴィオ船はモンバーサからモッセゲージョが遣わしたものだ。[モッセゲージョを代表する]特使らは上陸するやただちにミンデ王のもとへ案内された。ミンデ王は特使らが上陸したのと同じ浜におり、[ポルトガル人]カピタンや、ミンデ市の要人を侍らせていた。敵たるモンバーサ勢が[陸路]海側沿いに来襲すると思いついていたミンデ勢であるが、特使の来着により、彼らの恐怖はいささか軽減された。特使らがミンデ王へ、モンバーサ王は戦死し、モンバーサの街も破壊された、という知らせをもたらしたからだ。さらにまた、モッセゲージョらは[勝利後も]そのままモンバーサ島に踏みとどまり、同島の引き渡しを行なうため、ミンデ王の来訪を待っているという。この知らせも、ミンデ勢の怖れを大いに和らげた。モッセゲージョの特使らは、会見の締めくくりに、このたびモッセゲージョがモンバーサ勢から勝ち得た勝利の顛末を語って聞かせた。ミンデ王やカピタンや臨席の連中は、このような想定外の出来事というか、予見<sup>たが</sup>と違う事態に、驚きを隠さなかった。しばらくは耳に入った知らせを本当と信じてことができず、夢物語ではないのか、という面持ちであった。やがて[気を取り直した]ミンデ王は、モンバーサ王の子である少年に対し、ナヴィオ船から下りてくるよう命じた。他の俘虜たちも少年と一緒にあり、彼らは舟艇 2 艘に分乗してやってきた。彼らは陸に上がるや進み出、ミンデ王の前に身を投げ出した。ミンデ王は温情をもって彼らを迎え、彼らを臣下ながら友人として受け入れた。ミンデ王はただちに艤装を開始、さしたる時間をおかず、[モンバーサへ向かう]船に乗り込んだ。同行者として[ポルトガル人]カピタンを指名、配下の全兵士と、ミンデ在住のムスリム多数が付き従った。やがてミンデ王はモンバーサ島に到着。モッセゲージョは歓呼して迎え、賑々しいお祭り騒ぎのうちに、ミンデ王へモンバーサ島を引き渡した。爾来、今に至るまで、モンバーサ島はミンデ王の所有に帰している。ミンデ王は自邸をこの島へ移し、ここで暮らす一方、ミンデには息のかかった行政官や執行官を据えた。モンバーサ島には今、我らの要<sup>フォルタレーザ</sup>塞があるが、この要塞は、ヴィディゲイラ伯ドン・フランシスコ・ダ・ガマ<sup>29</sup>が築き運用を始めたものだ。ヴィディゲイラ伯がインディア副王として、ポルトガルより赴任する途次、モンバーサ島に滞留し、ひと冬を過ごした主の年 1596 年の出来

---

<sup>29</sup> 原語 Dom Francisco da Gama Conde da Vidigueyra. 1565～1632 年。1597～1600 年インディア副王。1622～28 年に再度インディア副王。ヴィディゲイラ伯として第四代。第三代ヴィディゲイラ伯ドン・ヴァスコ・ダ・ガマの子。初代ヴィディゲイラ伯ヴァスコ・ダ・ガマ——インド航路開拓者として著名——の曾孫。

事である。

**Chegão as nouas da vitoria a Melinde.**

¶ Bem diferentes eram os pensamentos do rei de Melinde, o qual estava na sua cidade, e o Capitão da costa prestes com os portugueses, e mouros, que se acharam ali naquele tempo, esperando a vinda d’el-Rei de Mombaça, que sabiam vinha por terra com mão armada sobre Melinde, e até então não tinham notícia do que lhes sucedera no caminho com os mosseguejos, antes se aparelhavam pera pelejar com ele quando chegasse. Estando pois desta maneira esperando a vinda d’el-Rei de Mombaça, chegaram ao porto de Melinde os dous navios que vinham de Mombaça mandados pelos mosseguejos, e desembarcando os embaixadores foram levados a el-Rei de Melinde, que estava na mesma praia com o capitão, e mais gente da cidade, cuidando serem chegados os inimigos por mar; mas ficaram logo desassombrados, com as novas que os embaixadores lhe deram da morte e destruição d’el-Rei de Mombaça, e de como os mosseguejos ficavam na ilha esperando a ida d’el Rei de Melinde pera lha entregarem; e finalmente relataram todo o sucesso desta vitória. El-Rei de Melinde, e o Capitão da costa, e os mais que presentes estavam, ficaram espantados de tal sucesso, e caso não esperado, e não podiam crer o que ouviam, parecendo-lhes ser sonho. Finalmente o rei mandou desembarcar o minino filho d’el-Rei de Mombaça, com todos os mais prisioneiros, que vinham nas duas embarcações, os quais chegando a terra se foram lançar aos pés d’el-rei, e ele os recebeu benignamente, aceitando-os por vassalos, e amigos, e logo se começou de aviar, e em breve tempo se embarcou para ir a Mombaca levando em sua companhia o Capitão da costa, com todos seus soldados, e muitos mouros de Melinde, e chegando à ilha de Mombaça logo os mosseguejos lhe entregaram a cidade com muito gosto, festas, e alegrias. E de então até’gora ficou esta ilha d’el-Rei de Melinde, e passou sua casa pera ela, onde ora vive, deixando em Melinde seus governadores e regedores postos de sua mão. Nesta ilha está hoje ãa fortaleza nossa, que fundou e principiou D. Francisco da Gama, Conde da Vidigueira, quando invernou nesta ilha, indo de Portugal por vice-rei da Índia, no ano do Senhor de 1596.

terdes furtos em vossa casa. O ladrão, que conhecia muito bem o feitiçeiro, teue grande medo d'elle, & sem mais replicas nem rezões, lhe entregou a roupa toda, sem faltar cousa alguma, & elle mesmo a leuou às costas até a casa do Portugues pedindolhe tinesse segredo no furto, & desculpandose que elle a não furtara, senão hum marinheiro gétio do mesmo mercador, o qual lho leuara a sua casa pera dahi a vender. Esta historia me contou o mesmo Portugues mercador, estando eu na ilha de Quirimba. Outras muitas feitiçarias fazião estes Mouros semelhantes a estas, & particularmente em descubrir cousas perdidas, ou furtadas.

Herua  
Dutrò,  
Feitiçei-  
ra.

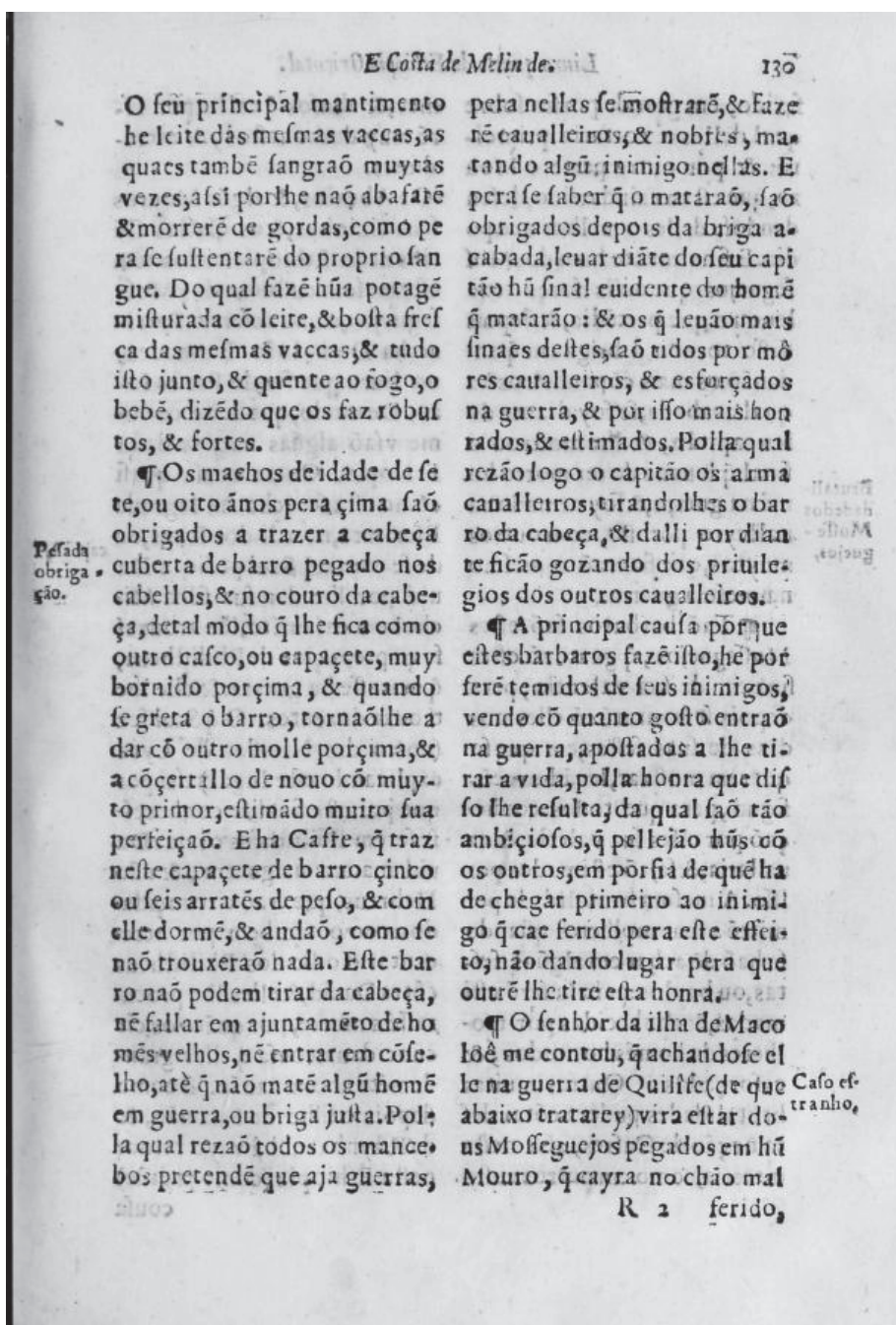
¶ Em muitas partes desta Ethiopia se cria hũa herua, a q̃ os Portugueses chamão Dutrò, & algũs Cafres Bâguinî, & por outro nome lhe chamão Machaya Moroy, q̃ he o mesmo q̃ herua feitiçeira, significando com este nome, q̃ seus feitos são de feitiços. Esta herua he quasi semelhante à de Beringellas brauas, a fsi na folha como no fruto, & dentro nelle tem muita semente, da feyçãõ de gergelim: a qual moyda, &

deitada no comer, ou beber, tira totalmente o juyzo a quem a toma: & de qualquer modo q̃ está quando come, ou bebe a tal seméte, do mesmo anda 24 horas: quero dizer, q̃ se a pessoa quando come está alegre, tal fica, rindo sempre, & se está triste, chora todas as 24. horas & depois que torna em si, nada lhe lembra do que fez, nem disse em todo o tẽpo, nem menos dà fẽ do que lhe fizeraõ: & com esta semente dizem que se fazẽ muitos feitiços, & coufas muy mal feytas.

¶ CAPITULO XIII.

¶ Dos Cafres Mosseguejos, & de seus costumes barbaros.

**R**olla terra dentro, que corre ao longo da costa de Melinde, habita hũa nação de Cafres, chamados Mosseguejos, muito barbaros, & muy esforçados, os quaes ha muyto poucos annos que começaraõ. Cujõ principio, & origem foy de Pastores de vaccas, no qual officio & tracto viuem inda hoje todos estes seus descendentes, & a fsi tem grandissimas creações de boys, & de vaccas.



p.130. 左段。Pesada obrigação。〔“重い”責務〕

右段。Caso estranho。〔奇妙な事件〕

ferido, em grande porfia sobre qual dell'es o cortaria primeiro: & por outra parte o Mouro, que estaua ainda viuo, defendendo se dell'es o melhor que podia. E finalmente hum dos Mosseguejos que mais força teue leuou o que pretedia, & depois disso tornou à briga em q'andauão os mais cõpanheiros: a qual acabada, se foy diante do seu capitão, & lhe mostrou o sinal q' leuaua de ter morto hum mē na guerra, & foy armado caualleyro por isso, com outros muytos, que fizeraõ o mesmo na mesma guerra.

Brutali-  
dadados  
Mosse-  
guejos.

Tão barbaços são estes Mosseguejos, q' guardaõ estes sinais de sua valentia, pera depois se honrarẽ cõ elles nos dias de suas festas, em que se querem mostrar, leuãdoos cõfiguo, pera que todos conheçaõ por elles sua valétia, & cauallarja, & sejaõ estimados por isso. A mesma brutalidade permittē a suas molheres quando se haõ de achar em algũas festas, ou baylos: pera la serẽ estimadas, & conhecidas por molheres de homēs honrados, & esforçados. Outras muitas brutalidades pudera cõtar desta nação de Cafres, assi nesta materia, como em outros cultu

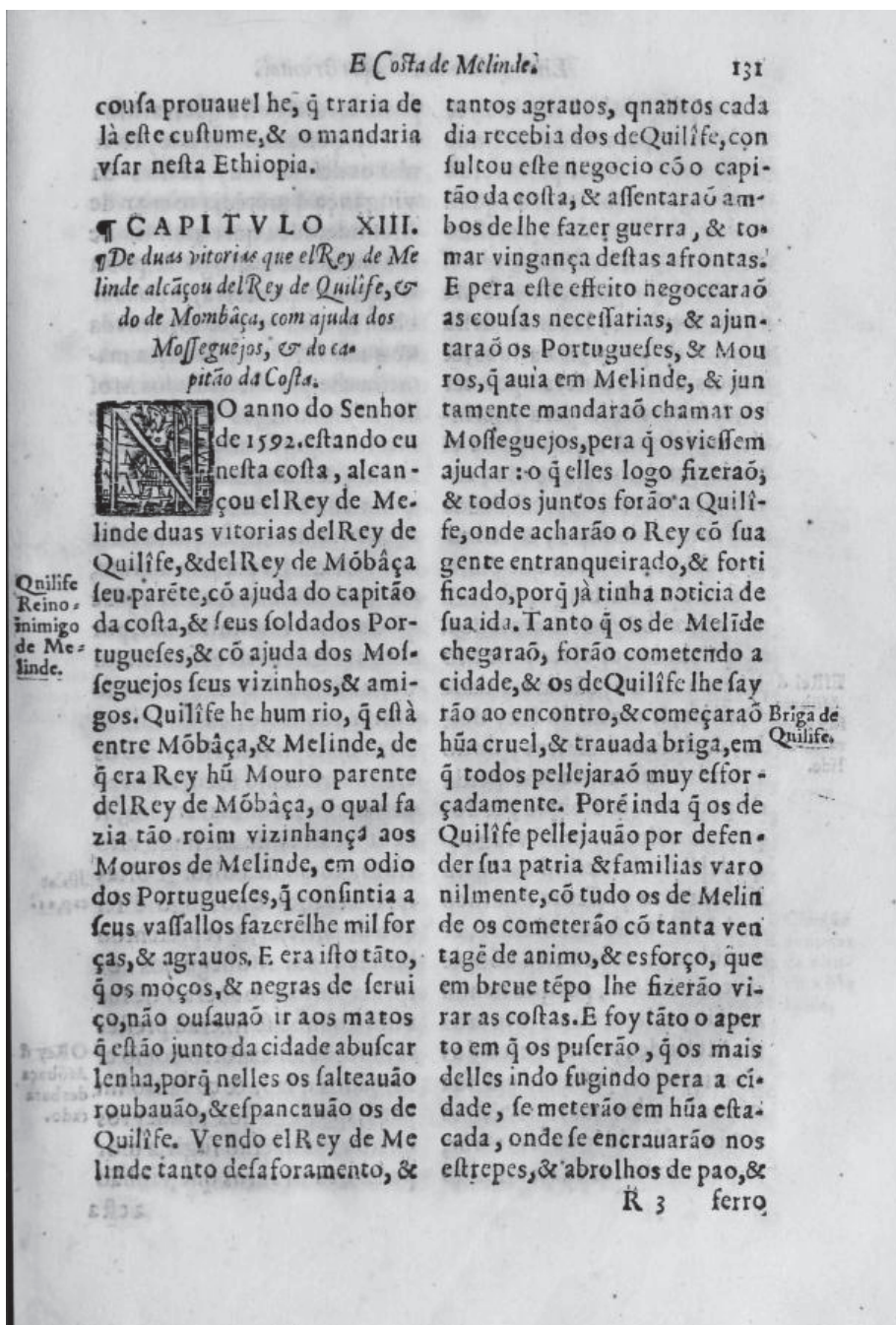
mes, & abusos q' callo, por ferẽ muy deshonestos, & incrediveis.

Os Abexins, & algũs Mouros seus vizinhos, & os Gallas Gētiõs desta Ethiopia: todos tem este mesmo costume dos Mosseguejos, como refere o Patriarcha Dom Ioão Bermudez, no liuro que fez do Preste Ioão. De modo, que deste costume vsaõ algũas nações desta Ethiopia. Outra cousa quasi como esta se acha na sagrada Escriptura, no 1. li. dos Reys, on de se conta, q' Saul pedio a Dauid por lhe dar sua filha Michol em casamento, lhe trouxe se çẽ prepuços de Philistheus, q' mataste na guerra: & elle lhe trouxe duzentos. O q' Saul fez (como diz Nicolao de Lyra explicando este lugar) assi por que por este sinal se conhecesse serem Philistheus os que Dauid matara na guerra, & não Hebrẽus, que eraõ circuncidados: como tambem por acrescentar o odio dos Philistheus cõtra Dauid, & elles lhe procurasse a morte, por quãto os circuncidaua: cousa q' elles grandemētē abominauão. E como depois o filho de Salamão, & da Raynha Sabbã veyo reinar nesta Ethiopia (como ja disse) coufa

cap. 18.

p.130v. 左段. Brutalidade dos Mosseguejos. [モッセゲージョ族の獣性]

右段. Cap. 18. 『サムエル前書』第 18 章 (参照指示)



p.131. 左段. Quilife. Reino inimigo de Melinde. [メリンデの敵, キリーフェ]

右段. Briga de Quilife. [キリーフェとの争闘]

ferro, q̄ a lli tinhaõ metido, & ordenado, pera os de Melinde se esperarẽ. E neste passo foraõ mortos, & desbaratados quasi todos, juntamente cõ o mesmo Rey de Quilife. Alcançada esta vitoria, saquearaõ os de Melinde a cidade, leuando della muitos despojos, & catiuos, & depois disso a puferãõ por terra, & se tornarãõ pera Melinde muy contẽtes, asy polla vitoria q̄ tinhãõ alcançado, como por estarẽ desapressados de tãõ roins vizinhos, & inimigos. Algũs Mouros que puderãõ escapar da briga, fugiraõ pera Mombãça desbaratados.

El Rei d  
Mõbaça  
faz guer  
ra a Meli  
nde.

¶ Sabida por el Rey de Mõbãça a destruyção da cidade Quilife, & morte do Rey della, & de seus vassallos, sintio grandissimamente tal perda de parentes, & amigos, & logo determinou tomar vingança del Rey de Melinde. E pera isso ajuntou passante de cinco mil Mouros seus vassallos, & vizinhos, quasi contrã võrade de todos elles, porque nenhũ queria pellejar cõ os Mouros de Melinde, por respeito dos Portuguezes, q̄ estauãõ em sua cõpanhia, dos quaes entẽdiãõ q̄ não auiaõ de leuar a melhor, & por isso todos faziaõ muito

porse escusar desta guerra. Mas o Rey q̄ estaua magoado, & tinha os desejos muy accesos da vingança q̄ pretẽdia tomar de Melinde, nũca quis desistir de seu intẽto: antes logo se pos a o caminho por terra, indo marchando cõ a sua gẽte ordenada & quasi forçada; & desta maneira chegou a terras dos Mosseguejos amigos d' el Rey de Melinde, onde assentou seu arayal, & determinou pellejar primeiro cõ estes barbaros, & desbaratillos, porq̄ entendia muy bẽ que se passasse auante, & lhe ficassem nas costas, q̄ lhe poderiaõ fazer muito mal, por serẽ amigos del Rey de Melinde, & era certo q̄ o auiaõ de socorrer, & ajudar, como tinhaõ feito no tẽpo que alli foraõ os destruidos, & desbaratados, ficando el Rey de Melinde victorioso, como fica dito. Pollas quaes rezões se pòs logo ẽ feita a batalha aos Mosseguejos: os quaes tanto q̄ souberãõ de sua vinda tambẽ se fizeraõ prestes saindo lhe ao encõtro como esforçados q̄ saõ, & cõ tanto impeto, que logo dos primeyros encontros fizeraõ fugir a mór parte dos Mouros que vinhaõ a esta

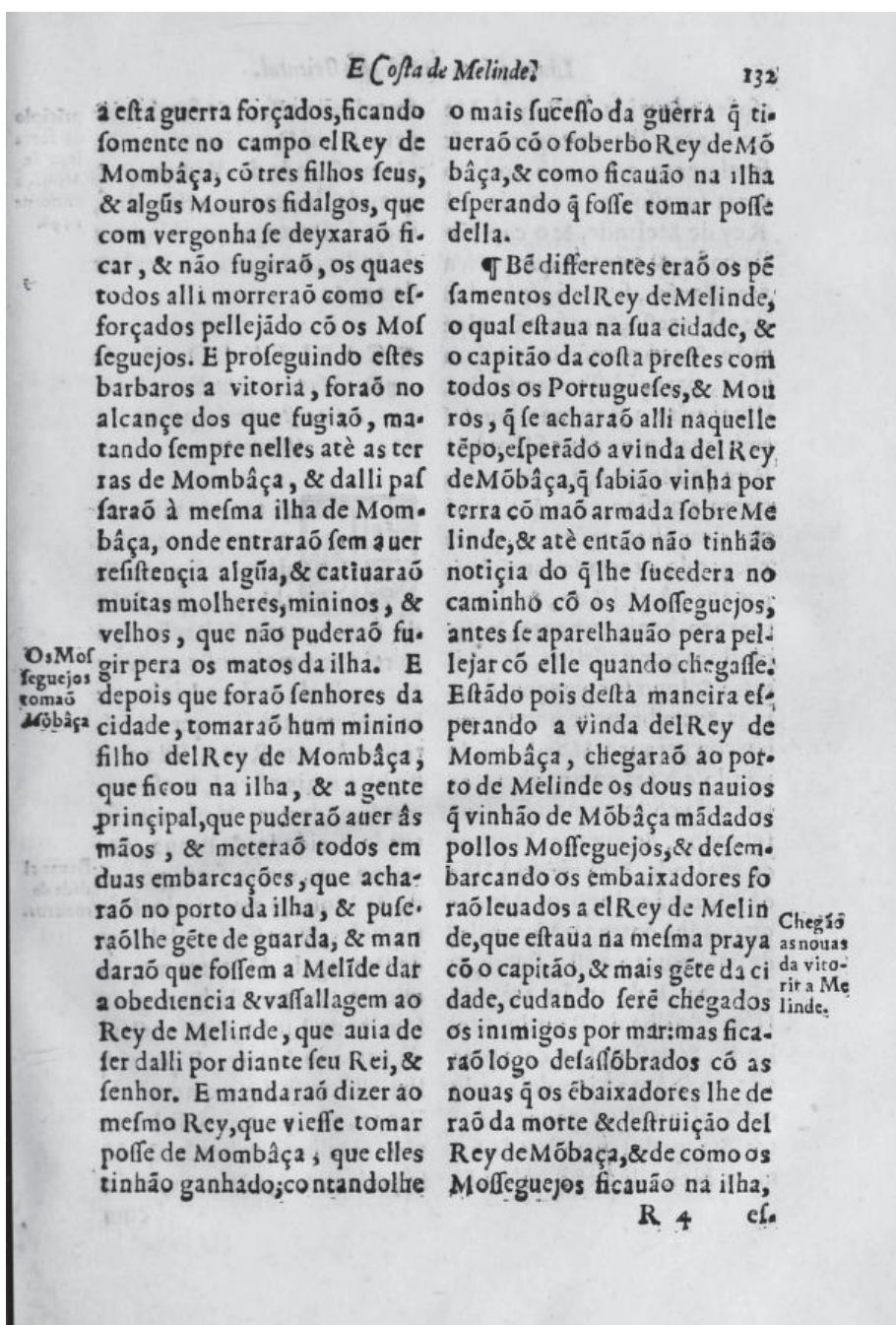
lib. 2.  
cap. 21.

O Rey d  
Mõbaça  
desbaratado.

p.131v. 左段. El Rei de Mõbaça faz guerra a Melinde.〔モンバーサ王, メリンデに戦いを仕掛ける〕

右段. O Rey de Mõbaça desbaratado.〔モンバーサ王, (メリンデ勢に)撃破さる〕





p.132. 左段。Os Mosseguejos tomão Móbâça。〔モッセゲージョ族，モンバーサを占拠す〕

右段。Chegão as nouas da vitoria a Melinde。〔モンバーサに対する〕勝報，メルンデに到着す〕

Liuro quinto da Ethiopia Oriental.

esperando a ida del Rey de Melinde pera lha entregarem; & finalmente relatarão todo o mais successo desta vitoria. El Rey de Melinde, & o capitão da costa, & os mais que presentes estauão, ficaraõ espátados de tal successo, & caso não esperado, & não podião crer o q̄ ou uião, pareçêdo-lhe ser sonho. Finalmête o Rey mandou desembarcar o minino filho del Rey de Mombâça, com todos os mais prisioneiros, q̄ vinhaõ nas duas êbarcações: os quaes chegando a terra se foraõ lançar aos pés del Rey, & elle os recebeo benignamente, azeitandoos por vassallos, & amigos: & logo se começou de aniar, & em breue tempo se embarcou pera ir a Mombâça, leuando em sua companhia o capitão da costa, com todos seus soldados, & muitos Mouros de Melinde, & chegãdo à Ilha de Mombâça logo os Moçeguejos lhe entregaraõ a cidade com muyto gosto, festas, & alegrias. E de então atêgora ficou esta ilha del Rey de Melinde, & passou sua casa pera ella, onde hora viue: deixando em Melinde seus governadores, & regedores postos de sua mão. Nesta ilha estã hoje hũa

fortaleza nossa, que fundou & principiou Dom Francisco da Gama Conde da Vidigueyra, quando inuernou nesta ilha, indo de Portugal por Viçerey da India, no anno do Senhor de 1596.

pricipiõ  
da fortaleza de  
Mõbâça  
anno de  
1596.

¶ CAPITVLO XV.  
¶ Dos Maracatos, & Eunuchos  
desta costa, & das partes  
Orientaes.



A temos visto as principaes cousas desta costa da Ethiopia, que ficão da Linha pera o Sul: resta agora relatar a mais costa que vay correndo da mesma Linha pera o Norte, até feneçer no Estreito do mar Roxo. Esta costa he a mais esteril, & aspera, que se pode ver. Nella estã situada a cidade de Braua, pequena, mas muito forte, pouoda de Mouros amigos dos Portugueses, & vassallos del Rey de Portugal. He terra muyto quente, porque estã hum grao somête da Linha Equinoctial da parte do Norte. E çerto q̄ lhe estã muy bem o nome de Braua, porque tem hũa barra tão trabalhosa, & braua, q̄ não se pode tomar, nê entrar, senão com

Braua cidade de mouros.

## CAPÍTULO XVI\* (Primeira Parte, Livro Quinto)

\*初版本には XV とあるが、明らかに XVI の誤り

### **Dos maracatos, e eunucos desta costa, e das partes orientais.**

第 16 章(第一部第五卷) 当メルンデ沿岸のマラカートについて、また、当沿岸と東方の諸地方にいる去勢されし者〔宦官〕について

#### **ムスリムの街、ブラーヴァ**

○我らはこれまで、当メルンデ沿岸をめぐる諸事を眺めてきた。それらはリーニャ〔赤道〕より南に関することともである。リーニャから北へ延び、マール・ロッショ〔紅海〕の海峡をもって終わりを告げる、残りの海岸部を叙述することが、我らに残されるのみである。ここは目にしうるうちで、最も不毛かつ最も荒々しい海岸である。この海岸にブラーヴァの街がある。小さな街ながら、いとも堅牢で、ポルトガル人の味方にしてポルトガル国王の家来であるムスリムが暮らすところだ。酷暑の土地である。というのは、リーニャよりわずか一度北の側〔北半球〕に位置するにすぎぬからだ。ブラーヴァとは、この街にとでもしっくりとくる呼称だ<sup>30</sup>。難所として有名な入り江がひとつあるからだ。あまりにも難所であるから、そこに立ち寄ろうとすると、大きなリスクと危難を冒すことになる。

#### **ブラーヴァの政体**

この街は、海岸部の他の街と同様、王を戴かない。この街は、さながらヴェネーザ〔ヴェネツィア〕のように、レプブリカ〔共和政体〕によって選出された代議員というか統治者によって運営されている。これより先、海岸は、同じような荒々しさでもって東北の方向へ延びてゆく。やがてそれはマガダショー〔モガディシオ〕の街へ到る。

#### **ムスリムの街、マガダショー〔モガディシオ〕**

マガダショーの街は、北の側〔北緯〕3 度半に位置する。街は堂々として頑丈な、高々と見上げるような壁に取り巻かれている。切り石で造られた建物がたくさんあるが、建物へ彩りを添えるのは、たいそう華やかで多数のアルコランだ。アルコランとはムスリムが通うモスクの塔のこと。街の住民はすこぶる尊大なムスリムだ。彼らは裕福であり、ポルトガル人が一帯の海岸に有する最大の敵だ。

**Braua cidade de mouros.**

¶ Já temos visto as principais cousas desta costa da Etiópia, que ficam da linha pera o sul, resta agora relatar a maia costa que vai correndo da mesma linha pera norte, até fenecer no Estreito

<sup>30</sup> ポルトガル語の形容詞 *bravo* は「豪胆な」とか「荒々しい」の意。*brava* ならその女性形。

do Mar Roxo. Esta costa é a mais estéril, e áspera que se pode ver. Nela está situada a cidade de Brava, pequena, mas muito forte, povoada de mouros amigos dos portugueses, e vassallos d'el-Rei de Portugal. É terra muito quente, porque está um grau somente da linha equinocial da parte do norte. E certo que lhe está mui bem o nome de Brava, porque tem ãa barra tão trabalhosa, e brava que não se pode tomar, nem entrar senão com muito risco, e perigo.

#### Gouerno de Braua.

Esta cidade não tem rei, como as mais da costa, mas é governada por vereadores, ou governadores eleitos pola mesma república, como Veneza. Daqui por diante vai correndo esta costa pera o nordeste com a mesma braveza, até à cidade de Magadoxo, situada em três graus e meio da banda do norte.

#### Magadaxò cidade de mouros.

A qual cidade é grande, e forte, e bem cercada de muros altos; tem muitos edificios de pedra de cantaria, e mui sumptuosa, e ornada de muitos alcorões que são torres das suas mesquitas; os moradores dela são mouros soberbíssimos, e ricos, e os mores inimigos que os portugueses têm nesta costa.

### ゼンチョのマラカート族

○ブラーヴァとマガダショーのあいだに広がる陸地奥深くに、エチオピア人の一種族が住む。彼らをマラカートと呼ぶ。膚色たいそう黒く、あるいは浅黒いゼンチョであり、縮れた髪を持ち、顔立ちはよい。彼らは文化的に洗練されており、理解力高く、もろもろの習俗においてアビシニア人に類似する。彼らはアビシニア人から、私の見るところ、あまり大きく隔たつてはいない。マラカートには、女の子が幼いときその陰部を縫ってしまう、という習わしがある<sup>31</sup>。

---

<sup>31</sup> この箇所原文は *Estes maracatos costumaõ coser as femeas [.....]* であり、直訳して「マラカートは(けもの)雌を縫い合わせる習わしである」。サントスは、このように微妙な、読み方によっては露骨な表現を用いているが、これが、ソマリアを含むアフリカ北部で今も行なわれる *Female Circuncision* (女子割礼) を指すことは、疑いようがない。女性にのみ貞操を強要する手段として、女性器の一部もしくは全部を切除する。施術を受ける少女は将来、さまざまな後遺症で苦しむ<sup>おそれ</sup>虞が強い。*Circuncision* (割礼) という語彙を女性に関して用いるのは、この施術が本来的に有する暴力性を覆い隠し合理化するくらいにあるとして、現在は *Female Circuncision* を避け、*Female Genital Mutilation* (女性器切除、FGM) という表現を用いよう、という国際的な合意が成立しているそうである。世界保健機関(WHO)が4タイプに分けて列挙するFGMのうち、サントスの言及する本習俗は、第3タイプの「陰部封鎖」(*infibulation*) にほかならない。この脚注を記すに際し、次の2書を参照した。内海夏子『ドキュメント 女子割礼』集英社新書、2003年。フラン・ホスケン『女子割礼——因習に呪縛される女性の性と人権』鳥居千代香訳、明石書店、1993年。1998年から翌年にかけて日本を巡回した『20世紀の証言 ピュリツァー賞 写真展』(図録、日本テレビ放送網、1998年)には1996年にピュリツァー賞を受

ジョアン・ドス・サントス『エチオピア・オリエンタル』（1609年、エヴォラ刊）を初版本テキストから訳注する試み

そうして大きくなっても妊娠できぬようにする。するとまさにそのゆえをもって、彼女らはより高く評価されるのだ。陰部を縫うという施術をほぼ必ず行なうのは、奴隷の娘に対してだ。より高値で売り払えるのだ。こうして陰部を縫われた女は、そうでない女より価値がある[とされる]。陰部を縫われた女は、そうでない女より身持ちが固く、墮落女になる機会をあらかじめ奪ってもっているからだ。娘の所有者は、まさにこの点〔陰部を縫合されていること〕を尊重して、彼女らに大きな信頼を置く。そうして、みずからの食糧保管庫を任せたり、家事を切り盛りする権能を渡したりする。

#### Maracatos Gentios.

¶ Pola terra dentro que fica entre Brava e Magadoxo habita ãa nação de etiopes a que chamam maracatos, gentios mui pretos, e azevichados, mas têm o cabelo corredio e boas feições de rosto; são polidos, e bem entendidos, e mui semelhantes nos costumes aos abexins, dos quais, cuidado, não estão muito longe. Estes maracatos costumam coser as fêmeas, quando são meninas de tenra idade, por não poderem conceber quando forem grandes, polo que são muito estimadas; e ordinariamente fazem isto às moças cativas, pera as venderem por mais preço, e assi valem mais que as outras, por serem mais castas, e terem a ocasião tirada de serem ruins mulheres, e por esse respeito fiam mais delas seus senhores, entregando-lhe suas despensas, e o governo de suas casas.

#### 少年の男根を切る

○マラカートにはまた、奴隷にした男児〔の陰茎〕を切り落とす、という風習がある。そうして少年は（持たざる男）となるわけだが、こうすると、より高値で少年を売り払うことができる。幼い時期に男児〔の陰茎〕を切り落とす、という習わしは、ゼンチョが暮らす東方の多くの国や地方において——なかんずくベンガーラ<sup>32</sup>の諸国において——ほぼ普通に見られるものだ。そこでは奴隷にした少年を去勢してしまう。より高値で売り捌けるからである。それほどまでに、去勢された少年は愛でられ、去勢されていない少年以上に、高い金銭的価値を与えられる。

#### インディアでは宦官の価値が高い

こうした考え〔去勢された少年に高い価値を与えること〕は、ポルトガル人のあいだばかりか、ゼンチョやムスリムのあいだでも〔許容されている〕。〔去勢された男子へ〕彼らが寄せる大きな信頼は、妻妾の召使いやその警護役に、〔去勢された男子を〕好んで用いることにより、証明される。そ

---

賞したフォトジャーナリスト、ステファニー・ウェルシュ (Stephanie Welsh) の作品「ケニアの女性割礼」(Female Circumcision Rite in Kenya) が、彼女自身の取材の概要とともに掲載されている (210～211 頁)。

<sup>32</sup> 原綴り Bengala. ベンガル。ガンジス河とブラマプトラ河の下流にあるデルター帯を占める地方。現在、インドの西ベンガル州とバングラデシュにまたがる。

うした役目ばかりではない。これら東方の国々なり地方では、王や権力者も、こうした宦官に頼るところ大であり、将官の地位ばかりか、すこぶる重大性を帯びた統治の権能をすら、彼らへ委ねることがある。

### チャウルの宦官は偉大な将官

チャウル・デ・シーマ<sup>33</sup>の街では、ある宦官が、ムスリムたちを統べる将官および為政者として、幾年も、その地位にとどまった。この宦官はメリーケ<sup>34</sup>によって拔擢された、極度に怖ろしく、統治能力に秀でた人物であった。この男が、チャウルおよび北部の幾多の地方に暮らすポルトガル人に対し残虐きわまりないいさを起こし、しかもそれを3年間にわたって継続させた。モーロ・デ・チャウル<sup>35</sup>の上にかの壮大にして目を眩るような要塞<sup>みは フォルタレーザ</sup>を造ったのがこの男であるが、ポルトガル人はほとんど奇跡的に、この要塞を奪取した。そのようすはこの先、語るであろう〔この戦いが叙述されるのは、第二部第四巻第13章〕。

Cortão os mininos machos./ Valem muito os eunucos na India.

¶ Costumam também estes maracatos cortar os mininos cativos, de modo que ficam rasos, para os venderem por mais dinheiro. Este costume de cortar os mininos, quando são de tenra idade, é quasi geral em muitos reinos e províncias do oriente, povoadas de gentios, e particularmente nos Reinos de Bengala, onde fazem eunucos aos mininos cativos, pera os venderem por mais dinheiro, e assi é que estes são mais estimados, e valem mais que os outros, que não são eunucos; e isto não

---

<sup>33</sup> 原綴り Chaul de çima. チャウルは、インド亜大陸西海岸、ムンバイの南60キロメートルに位置する、旧ポルトガル領インドの街。チャウル・デ・シーマは「上チャウル」の義。サントスはみずから、『エチオピア・オリエンタール』第二部第四巻第12章に、「Por este rio de Chaul açima da mesma parte da nossa cidade obra de meya legoa, está a pouoação dos Mouros nossos vizinhos, a que chamaõ Chaul de çima.」（チャウルの河——クンダリカ河——沿いを、我らの街と同じ側から、半レーガアばかり遡ったあたりに、我らの隣人たるムスリムの集落があり、これをチャウル・デ・シーマと呼ぶ）と説明する。チャウル・デ・シーマは、豊かな商人が多様な商品を扱い、さまざまな職種の職人が佳良な工藝・日用品を作るので、さながら‘hũa feira perpetua’、(営みをやめない市場)のような賑わいを見せていたという。

<sup>34</sup> 原綴り Melique. 1508年、ポルトガルは、チャウルで、グジャラート王国・マムルーク朝・カレクターのザモリンの三者連合軍に、敗北を喫する(チャウルの戦い)。このとき、初代インド副王のフランシスコ・デ・アルメイダの息子ロウレンソ・デ・アルメイダが戦死。ロウレンソの遺体を丁重に葬ったのが、グジャラート側の司令官でディウの太守マリーク・アヤース(Malik Ayyaz. ポルトガル人にはMeliqueazと呼ばれた)であった(生田滋「大航海時代の東アジア」〔榎一雄編『東西文明の交流 5 西欧文明と東アジア』平凡社、1971年〕、88～90頁)。サントスのいうメリーケがこの人物なのかどうか、今後の考証に俟つ。アルメイダは、1509年2月、ディウ沖の海戦で、ヴェネツィアの援助を受けるグジャラート王国・マムルーク朝の連合艦隊に勝利を収め、息子ロウレンソの仇を討つ。これ以降、チャウルはポルトガルの支配下に入るとともに、インド洋北西部すなわちアラビア海の制海権をめぐるポルトガル優位の基礎が定まる。

<sup>35</sup> 原綴り Morro de Chaul. 直訳して「チャウルの丘」であるが、チャウル市に沿って流れるクンダリカ河の河口あたり、岩がちの岬がアラビア海に突き出ており、そこに築かれたのがモーロ・デ・チャウル<sup>フォルタレーザ</sup>要塞。今はコーライ・フォート(Korlai Fort)と呼ばれる。

somente entre os portugueses, mas também entre os mesmos gentios, e mouros, porque destes se fiam, e lhe entregam o serviço, e guarda de suas mulheres, e particularmente os reis e senhores que nestas partes usam de muitas. Além disto os reis e príncipes do oriente estribam tanto nestes, que lhes entregam capitánias, e governos mui grandes, e de muita importância.

Eunuco de Chaul grãde capitão.

Em a cidade de Chaul-de-Cima esteve muitos anos por capitão, e governador dos mouros da dita cidade, um eunuco posto polo Melique, homem terribilíssimo, e de grande governo, o qual fez, e sustentou guerra crudelíssima contra os portugueses de Chaul, e de muitas partes do norte, por espaço de três anos, e fez aquela grande, e admirável fortaleza sobre o Morro de Chaul, que os portugueses depois tomaram quasi milagrosamente, como adiante contarei\*.

\*cf. Segunda parte, Livro Quarto, cap.XIII.

### チナの宦官は貴族である

〇こうした宦官がおびただしく存在するのは、チナにおいてである。去勢された者であるがゆえに重んじられ、榮譽を与えられる。というのは、チナ国王は彼らを、みずからの宮廷において、さらには門扉の内において、活用するからだ。彼らを通じて王国の諸事いっさいは整頓され、秩序づけられる。彼らは重要性を帯びるあらゆる案件をめぐり、国王と連絡を密にし、国王とともに決裁を下す。そうした重要案件は彼らのもとへ、チナの全プロヴィンシア〔省〕から届く。彼らこそ宦官であることを拠りどころに、国王が妻妾と暮らしをともにする居所へ入ってゆける唯一の存在であり、そのようなことは、他のいかなる男にも許されない。国王の命により、彼らは幼いときから王国のあらゆる法律を教え込まれ、一国の統治に欠かせぬ学問レブプリカを叩き込まれる。宮殿に入る前にそうした修養を積む。そうした学問に通じたのち、そして自由技藝アルテス・リベライスを身につけたのち、彼らは統治の道に入り、国王へ奉仕するに十分な資格を具える者、と認められる。以上の要職に抜擢されるのは、〔宦官のうちでも〕抜きん出て思慮に富み、智慧深く、理解力に秀でた連中である。

### 尊称たるロウティア

上記のような高位に収まった者を、ロウティアと呼ぶ。そのことは、パードレ・フレイ・ガスパー  
ール・ダ・クルスが、チナに関して著わした書物で述べるとおり<sup>36</sup>。彼らが生殖活動を為し得ぬ

<sup>36</sup> サントスが明朝シナの諸事に言及する際、決まって引用するのが、ドミニコ会の同志であり同胞でもあるガスパー  
ール・ダ・クルスの著書『中国誌』である (*Tractado em que se cõtam muito por estêso as cousas da China, cõ suas particularidades, e assi do reyno dormuz cõposto por el. R. padre fray Gaspar da Cruz da ordê de san Domingos, Évora, 1569. Biblioteca Nacional de Portugal, res-386-p. 幾つかの校訂本のうち、Raffaella D'Intino (ed.), Enformação das Cousas*

がゆえに、より尊重されるという考え方は、エチオピアのマラカート女に通ずる。彼女らは〔陰部縫合のため〕妊娠できぬがゆえに、大事にされる。〔チナの宦官やマラカート女が〕より尊重されるのは、彼ら彼女らが、より忠誠心と節操に富み、廉潔であるからだ。そうした属性は、彼ら彼女らが、ある種の〔誘惑の〕機会なりしがらみから切り離されていることに由来する。そうした機会やしがらみが原因となり、男も女も、無軌道な私情にほだされ、あまたの不行跡や不正義に走るケースが、非常に多い——。〔去勢された男女を重んずる〕チナ人およびマラカートは、そのように考えるのだ。

Os eunucos da China são nobres.

¶ Destes eunucos há muitos na China, mui honrados, e nobres por este respeito, porque destes se serve o rei da China em sua corte, e de suas portas adentro, e por estes são ordenadas e governadas todas as cousas do reino. E porquanto estes hão-de comunicar, e despachar com el-rei todos os negócios de importância, que acodem a eles de todas as províncias da China, e entrar onde o rei está com suas mulheres, onde nenhum outro homem pode entrar, portanto são todos eunucos, e logo de pequenos lhes manda el-Rei ensinar todas as leis do reino, e mais ciências necessárias pera o governo da república, antes que entrem no paço, e depois que são mui doutos nelas, e instruídos nas artes liberais, então ficam suficientes pera entrar no governo e serviço do rei. E pera isto ordinariamente se escolhem os mais prudentes, e de melhor entendimento.

Loutiãs nome hōrado.

---

*da China: Textos do Século XVI*, Lisboa, Imprensa Nacional / Casa da Moeda, 1989などが優れる。新人物往来社刊『ガスパーール・ダ・クルス 中国誌——附, 1569-70 年エヴォアラ原著作初版本(コインブラ大学総合図書館蔵)影印』(1996 年)および講談社学術文庫版『クルス 中国誌——ポルトガル宣教師が見た大明帝国』(2002 年)は、いずれも拙訳書。

サントスは、宦官のうち、特に秀でた連中を「ロウティア」と呼ぶ、と記すのだが、これにはやや誤解があるようだ。クルスは、明朝の行政に及ぼす宦官の無視しがたい影響力(人事に際しての、賄賂を介する斡旋や助言など)に、確かに言及している。が、クルスによる限り、「ロウティア」は、明代シナの官人一般に対する一種の尊称にすぎない(クルスはむしろ、宦官以外の、どちらかといえば上級官員一般を「ロウティア」と呼んでいる)。少なくとも、クルスは、宦官のうち最も選りすぐりの者(だけ)が、「ロウティア」と呼ばれるようになるとは、述べていない。クルスの宦官に関する記述は、ほぼ中立的と言ってよく、少なくとも、宦官に対する否定的言辭は、見えない(前掲『中国誌』第 17 章など参照)。明代はおしなべて、宦官の跋扈がはなはだしく彼らの政治への容喙が大きな弊害を及ぼした時代、とされるにもかかわらず、である。クルスの、全般的には肯定的な、明代シナに対するイメージが、シナの宦官に言及するサントスの筆致にも影響を与えている、と見てよいであろう。

男性の機能を、自発的に喪失させた、あるいは、他からの強制によって喪失せしめられた、シナの宦官と、陰部縫合によって妊娠を阻害されたマラカートの奴隷女。併行的に両者に論及し、生殖能力を持たぬ、という共通点のゆえに、彼ら・彼女らが、「より忠誠心と節操に富み、廉潔である」という理由で高い評価を受け、その特性ゆえに「無軌道な私情にほだされ、あまたの不行跡や不正義に走る」ことから免れている、と記すサントスの筆致が、彼のカトリック宣教師としての倫理的立場と、どのように調和するのか、別途一考を要する課題であろう。



Aos quais depois de postos nesta dignidade chamam *loutiás*, como conta o Padre Frei Gaspar da Cruz no livro que fez da China. De maneira que estes eunucos são tão estimados pola impossibilidade que têm de poderem gerar, como as maracatas da Etiópia, pola que têm de não poderem conceber, e também porque são mais fiéis, mais castos, e limpos, e mais tirados de ocasiões, e obrigações que forçam muitas vezes os homens, e mulheres a fazer muitos desmanchos, e injustiças, movidos pola desordenada afeição.

Liuro quinto da Ethiopia Oriental.

esperando a ida del Rey de Melinde pera lha entregarem; & finalmente relatarão todo o mais successo desta vitoria. El Rey de Melinde, & o capitão da costa, & os mais que presentes estauão, ficaraõ espátados de tal successo, & caso não esperado, & não podião crer o q̄ ou uião, pareçêdo-lhe ser sonho. Finalmête o Rey mandou desembarcar o minino filho del Rey de Mombâça, com todos os mais prisioneiros, q̄ vinhaõ nas duas êbarcações: os quaes chegando a terra se foraõ lançar aos pés del Rey, & elle os recebeo benignamente, açoitandoos por vassallos, & amigos: & logo se começou de aniar, & em breue tempo se embarcou pera ir a Mombâça, leuando em sua companhia o capitão da costa, com todos seus soldados, & muitos Mouros de Melinde, & chegãdo à Ilha de Mombâça logo os Moçeguejos lhe entregaraõ a cidade com muyto gosto, festas, & alegrias. E de então atêgora ficou esta ilha del Rey de Melinde, & passou sua casa pera ella, onde hora viue: deixando em Melinde seus governadores, & regedores postos de sua mão. Nesta ilha estã hoje hũa

fortaleza nossa, que fundou & principiou Dom Francisco da Gama Conde da Vidigueyra, quando inuernou nesta ilha, indo de Portugal por Viçerey da India, no anno do Senhor de 1596.

pricipiõ da fortaleza de Mõbãça anno de 1596.

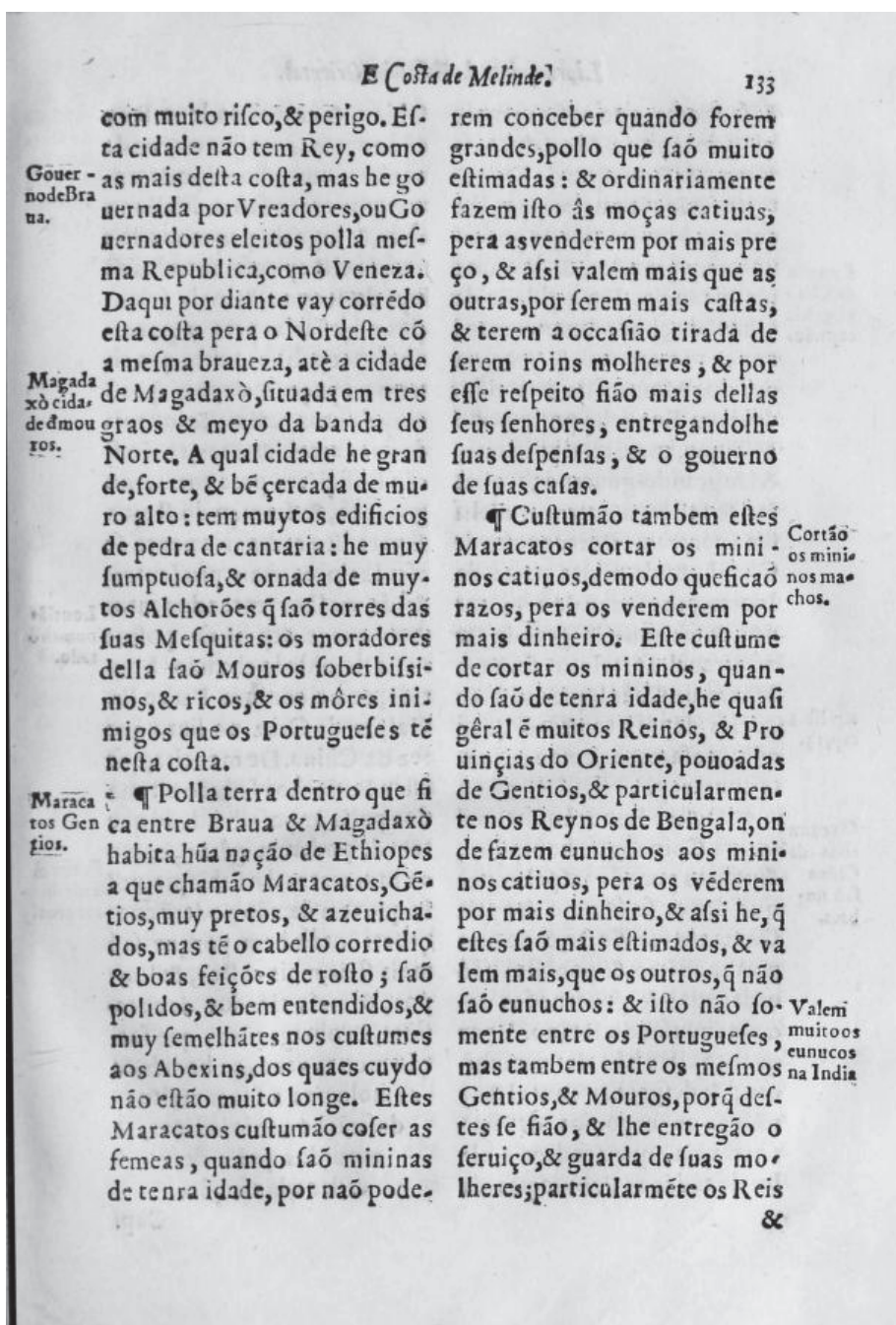
¶ CAPITVLO XV.  
¶ Dos Maracatos, & Eunuchos desta costa, & das partes Orientaes.



A temos visto as principaes cousas desta costa da Ethiopia, que ficão da Linha pera o Sul: resta agora relatar a mais costa que vay correndo da mesma Linha pera o Norte, atê feneçer no Estreito do mar Roxo. Esta costa he a mais esteril, & aspera, que se pode ver. Nella estã situada a cidade de Braua, pequena, mas muito forte, pouoda de Mouros amigos dos Portugueses, & vassallos del Rey de Portugal. He terra muyto quente, porque estã hum grao somête da Linha Equinoctial da parte do Norte. E çerto q̄ lhe estã muy bem o nome de Braua, porque tem hũa barra tão trabalhosa, & braua, q̄ não se pode tomar, nê entrar, senão com

Braua cidade de mouros.

p.132v. 右段。Pricipio da fortaleza de Mõbãça anno de 1596.[1596年, モンバーサ要塞の草創]/ Braua cidade de mouros.[ムスリムの街, ブラーヴェ]



p.133. 左段。Gouerno de Braua. [ブラーヴァの政体] / Magadaxò cidade de mouros. [ムスリムの街, マガダショー(モガディシオ)] / Maracatos Gentios. [ゼンチョ(異教徒)のマラカート族]

右段。Cortão os mininos machos. [少年の男根を切る] / Valem muito os eunucos na India. [インディアでは宦官の価値が高い]

Liuro quinto da Ethiopia Oriental.

& senhores, que nestas partes  
 vſaõ de muitas. Alem disto os  
 Reys, & Príncipez do Orien-  
 te eſtribão tâto nestes, que lhe  
 entregaõ capitãias, & gover-  
 nos muy grandes, & de muita  
 importancia. Em a cidade de  
 Chaul de cima esteue muytos  
 annos por capitaõ, & governa-  
 dor dos Mouros da dita cida-  
 de, hum Eunucho posto pollo  
 Melique, homẽ terribilissimo,  
 & de grande governo, o qual  
 fez & sustetou guerra crudelif-  
 ſima contra os Portugueſes de  
 Chaul, & de muita parte do  
 Norte, por eſpaço de tres an-  
 nos, & fez aquella grande, &  
 admiravel fortaleza sobre o  
 Morro de Chaul, que os Portu-  
 gueſes depois tomaraõ quasi  
 milagrosamente, como adian-  
 te contarey.

Eunuco  
 de Chaul  
 a grande  
 capitão.

\*.p.lib.3  
 cap.13.

Os eunu-  
 chos da  
 China  
 são no-  
 bres.

¶ Destes Eunuchos ha mui-  
 tos na China, muy honrados,  
 & nobres por este respeito, por  
 que destes se serue o Rey da  
 China em ſua Corte, & de ſuas  
 portas adentro, & por estes ſaõ  
 ordenadas & governadas to-  
 das as couſas do Reino. E por  
 quanto estes hão de cõmunica-  
 r, & despachar com el Rey  
 todos os negoçios de im-  
 portancia, que acodem a el-  
 les de todas as Prouinçias da

China, & entrar ondẽ o Rey  
 eſtã com ſuas molheres, onde  
 nenhum outro homẽ pode en-  
 trar: por tanto ſaõ todos Eunu-  
 chos, & logo de pequenos lhe  
 manda el Rey enſinar todas as  
 leys do Reyno, & mais ſcien-  
 çias neçessarias pera o gover-  
 no da Republica, antes que en-  
 trem no paço, & depois q̃ ſaõ  
 muy doutos nellas, & instrui-  
 dos nas artes liberaes, entãõ fi-  
 cãõ ſufficiẽtes pera entrar no  
 governo, & ſeruiço do Rey.

E pera isto ordinariamente ſe  
 escolhem os mais prudentes,  
 & de melhor entendimento.  
 Aos quaes depois de postos  
 nella dignidade chamãõ Lou-  
 tiãs, como conta o Padre Fr.  
 Gaspar da Cruz no liuro que  
 fez da China. De maneira, que  
 estes Eunuchos ſaõ tão estima-  
 dos polia impossibilidade que  
 tem de poderem gêrar, como  
 as Maracatas da Ethiopia, pol-  
 la que tem de não poderẽ con-  
 çeber: & tambem porque ſaõ  
 mais fieis, mais castos, & lim-  
 pos, & mais tirados de occa-  
 siões, & obrigações, que for-  
 çãõ muitas vezes os homẽs, &  
 as molheres a fazer muitos  
 deſmãchos, & injustiças,  
 mouidos polia deſ-  
 ordenada afeição.

Loutiãs  
 nome chã-  
 rado.

Capl

p.133v. 左段。Eunuco de Chaul grãde capitão。[チャウルの宦官は偉大な将官]/ Os eunucos da China são nobres。[シナの宦官は貴人である]

右段。Loutiãs nome hõrado。[尊称たるロウティア]